
第9回大会 せたがや福社区民学会

「地域社会（まち）を創る」
～ボーダレスな実践～

報告集



日時：平成29年10月1日（日）
12：00～17：30（開場11：30）
会場：昭和女子大学1号館

主催：せたがや福社区民学会
せたがや福社区民学会第9回大会実行委員会
共催：昭和女子大学人間社会学部
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援：世田谷区
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会

目 次

せたがや福社區民学会第9回大会プログラム.....	5
会場見取り図.....	6
全体会 I	
せたがや福社區民学会会長挨拶.....	10
せたがや福社區民学会第9回大会開催校挨拶.....	11
世田谷区長挨拶.....	12
基調講演「市民性を育むー世田谷からの発信」 興梠 寛（昭和女子大学グローバルビジネス学部特任教授）.....	14
実践研究発表	
ポスター発表一覧.....	24
口頭発表一覧.....	25
企画分科会一覧.....	29
〈ポスター発表〉	
第1会場	
(1) 在宅介護者に必要な情報.....	32
(2) 歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の取り組み.....	34
(3) 「介護」や「有料老人ホーム」についてもっと知っていただくために ー世田谷区内での取り組みー.....	36
(4) デイホーム池尻の実践事例.....	38
(5) 地域共生のいえ「椎の木」と特別養護老人ホームとの7年間の活動報告...40	
(6) 世田谷区にある高齢者施設 お役立ちガイドー世田谷ケアマネジャー連絡会 「施設ケアマネジャー部会」からの発信ー.....	42
(7) ノートとペンだけでできるモチベーションUP方法 マイナス現象を宝に変える。.....	44
(8) 世田谷区介護職員合同入職式 実践報告.....	46
担当助言者.....	48
第2会場	
(1) 失語症カフェ ー失語症への理解と失語症会話パートナーの活動を広げたいー.....	50

(2) 「更生保護」って何だろう？ー立ち直りを支え、犯罪を防止するー	52
(3) 配食サービスから地域高齢者を見守るために	54
(4) 玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供 2017	56
(5) 認知症デイサービスにおける認知症ケアを考える	58
(6) スマートライフプロジェクト～やめよう歩きたばこ	60
(7) 健康を招き入れよう！豪徳寺ウォーキング！！	62
(8) 地域とつながり、育ち合う子育てーぽっぽちゃんひろばの活動を通してー	64
担当助言者	66

〈口頭発表〉

第1分科会 高齢福祉

(1) ひこばえ広場「たまごの家」の実践から	68
(2) サービス導入が困難な方への関わり	70
(3) 小規模多機能ホーム三宿の実践事例ー在宅で高齢者を支えるにはー	72
(4) 食べることを忘れてしまった利用者様への食事ケア	74
(5) タクティールケアによる不安の軽減の取り組み	76
(6) センサーマットの見直しから気づかされたその方を知る大切さ	78
(7) 在宅介護における本人、家族、介護スタッフのあきらめない経口摂取の取り組み	80
担当進行役・助言者	82

第2分科会 高齢福祉／障がい児・者／医療・保健・福祉

(1) 介護施設を特別な場所にしない「自立支援研修センター」の取り組み	84
(2) 利用者の気持ちに寄り添ったボランティア活動をめざして	86
(3) ももちゃんにおける若年性認知症とは？	88
(4) 重症心身障害児と、こどもデイういずの活動紹介 ー愛と希望のある未来のためにー	90
(5) 踊るだけでなく学べるイベント“SOCIAL FUNK！”	92
(6) 入所前の生活環境を知ることで見えてきたこと	94
(7) けやき学級の障がいのあるメンバーと仲間たちの活動ー障がいのあるメンバーを中心にして、ともに学び、遊び、ともに生きる仲間を創るー	96
担当進行役・助言者	98

第3分科会 障がい児・者

(1) Aさんに関心をよせたことでAさんが見せた変化	100
(2) 行動障害の理解と支援に必要なこと	102
(3) 障がい者の主体性を引き出す「リハ・スポーツ」	104
(4) 障がいを持つ子供たちとのプログラムを通じた関わりープレイ&リズム希望丘でのソーシャルワークプロジェクト活動を通してー	106
(5) 主体性を発揮する暮らしぶりに向けて	108

(6) 分かりやすい！伝わる！個別支援計画	110
(7) 本人の想いに添う支援ーセルフ5ピクチャーズから見えてきたものー	112
担当進行役・助言者	114

第4分科会 障がい児・者

(1) 大原福祉作業所での実習を通して、支援のあり方を考える	116
(2) 『主体性』の発揮を意図して～「自由発表」の時間から思うこと～	118
(3) 「ストレングス」に基づく利用者支援 ～パイ焼き窯での就労支援の取り組み～	120
(4) 不安感や自信のなさがあるAくんとのかわりについて	122
(5) 園外活動を介して利用者との関係性を発展させる ー過敏性の強いAさんのケースを通じてー	124
(6) 利用者支援の実践報告	126
(7) 障害のある方の「自分らしさ」の発揮を考える	128
担当進行役・助言者	130

第5分科会 子ども・若者／国際／医療・保健・福祉

(1) 自然遊びの大切さ	132
(2) 主体性を育む幼児保育	134
(3) 人のかわりで育まれる心	136
(4) 児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェ アハウス運営 安心して住むことの出来る居場所の必要性	138
(5) 『療養しながら地域で暮らす』 ～世田谷区在宅医療電話相談センター10年の実践をとおして～	140
(6) コーヒー生産国の労働者 コーヒー生産国と消費国の関係とコーヒー生産者の労働条件	142
(7) 途上国女性の社会進出課題	144
担当進行役・助言者	146

第6分科会 地域福祉

(1) 世田谷セレ部 活動報告	148
(2) 誰もが普通に生きられる つながるやさしい街づくりー医療的ケアの必要な 重度身体障害者のグループホーム設立を目指してー	150
(3) 烏山ファーストー多職種連携からみえてきた地域連携における課題と烏山地 域部会の取り組み	152
(4) 砧地域ご近所フォーラムの取組み ～ひろげようご近所フォーラムのわ～	154
(5) 世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）の活動 ー誰もが自由におでかけできる世田谷を目指すそとでるの活動ー	156
(6) 地域とともにある施設を目指して～地域公益への取り組み～	158

(7) 若年性認知症コース「ともに」の活動報告	160
担当進行役・助言者	162
第7分科会 高齢福祉／地域福祉／医療・保健・福祉	
(1) eラーニングによる実務者研修ーいつでも何処でもできる研修資格へー ..	164
(2) おでかけひろばの「食」がつなぐ、地域のつながり	166
(3) 都営アパートのコミュニティ再生「サロン下馬和楽」	168
(4) 日大さくらサロン～学生主催サロンにおける活動の継続と新たな挑戦～ ..	170
(5) 区民向け在宅医療連続講座を開催してわかったこと	172
(6) 「世老研」高齢者なんでも相談室の相談内容について	174
(7) 地域のインフラとしての可能性	
ー世田谷区介護サービスネットワーク地域部会の活動ー	176
担当進行役・助言者	178
〈企画分科会〉	
(1) コミュニケーションの発達支援	179
(2) 社会問題に挑戦する実践：かべ、境界、を乗り越え新しいコミュニティ創造 の戦略	181
全体会Ⅱ	
大会総括	184
次回開催校挨拶	189
第9回大会実行委員長挨拶	190
特別寄稿「せたがや福社區民学会の過去と未来」	193
資料編	
せたがや福社區民学会役員名簿	196
第9回大会実行委員名簿	197
第9回大会実績	198
団体会員名簿	199
設立趣旨	202

せたがや福社区民学会 第9回大会プログラム

1 全体会Ⅰ (12:00~13:00) 1号館4階4S32教室

- 会長挨拶
- 開催校挨拶
- 世田谷区長挨拶
- 基調講演 「市民性を育むー世田谷からの発信」

興梠 寛 (昭和女子大学グローバルビジネス学部特任教授)

2 実践研究発表 (12:00~16:30)

- ポスター発表 (12:00~16:25) 1号館4階(4S03、4S04)

【コアタイム】 発表者が説明および質疑応答に対応します。

第1会場 13:50~14:40

第2会場 14:50~15:40

※ポスター会場は12:00から16:25まで自由にご覧いただけます。

- 口頭発表 (13:30~16:25) 1号館3階・4階各教室

第1分科会 4S05教室 第5分科会 3S04教室

第2分科会 4S06教室 第6分科会 3S05教室

第3分科会 4S07教室 第7分科会 3S06教室

第4分科会 3S03教室

- 企画分科会 1号館3階(3S07、3S08)

①コミュニケーションの発達支援 13:00~15:00

②かべ、境界、を乗り越え新しいコミュニティ創造の戦略 14:00~16:30

3 全体会Ⅱ (16:45~17:30) 1号館4階4S32教室

- 大会総括
- 次回開催校挨拶
- 閉会

※全体会では、ハブネットせたがや(当会会員)によりパソコン文字通訳を行います。

※全体会及びご希望の分科会には、手話通訳が付きます。ご希望の方は大会総合受付にお申し出ください。

※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学からの学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

*懇親会 (17:45~19:00)

1号館地下1階食堂ソフィア

当日の参加申し込みができます。詳しくは、大会総合受付にお問い合わせください。

キャンパスマップ

1号館

(1階)

受付・・・ 西側エレベーターホール

(地下1階)

懇親会会場・・・食堂ソフィア

(3階)

第4分科会・・・

3S03 教室

第5分科会・・・

3S04 教室

第6分科会・・・

3S05 教室

第7分科会・・・

3S06 教室

企画分科会①・・・

3S07 教室

企画分科会②・・・

3S08 教室

(4階)

総会・全体会会場・・・

4S32 教室

大会本部・・・

4S02 教室

控室・・・

4S33 教室

ポスター発表①・・・

4S03 教室

ポスター発表②・・・

4S04 教室

第1分科会・・・

4S05 教室

第2分科会・・・

4S06 教室

第3分科会・・・

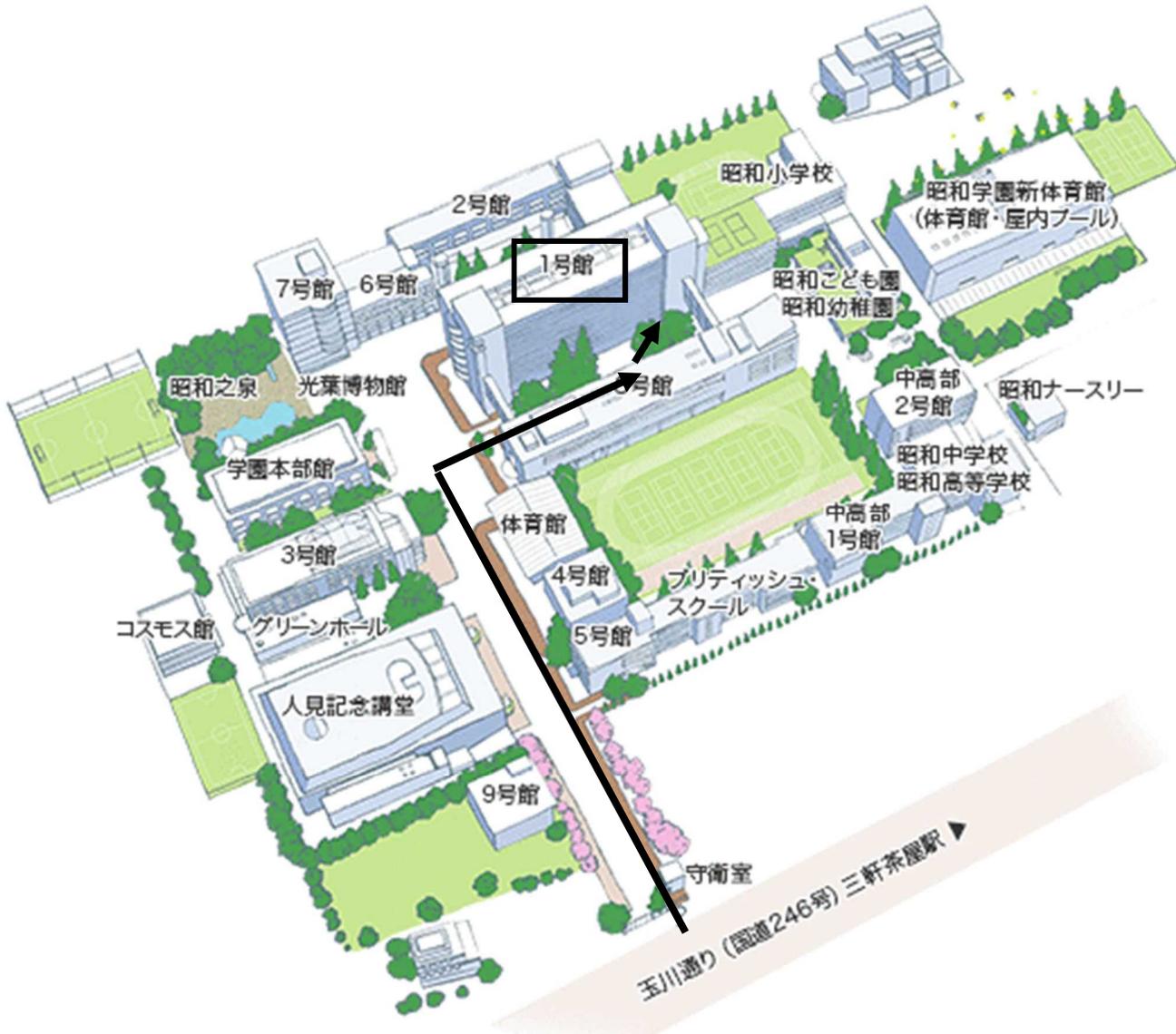
4S07 教室

ほっとスペース・・・

4S34 教室

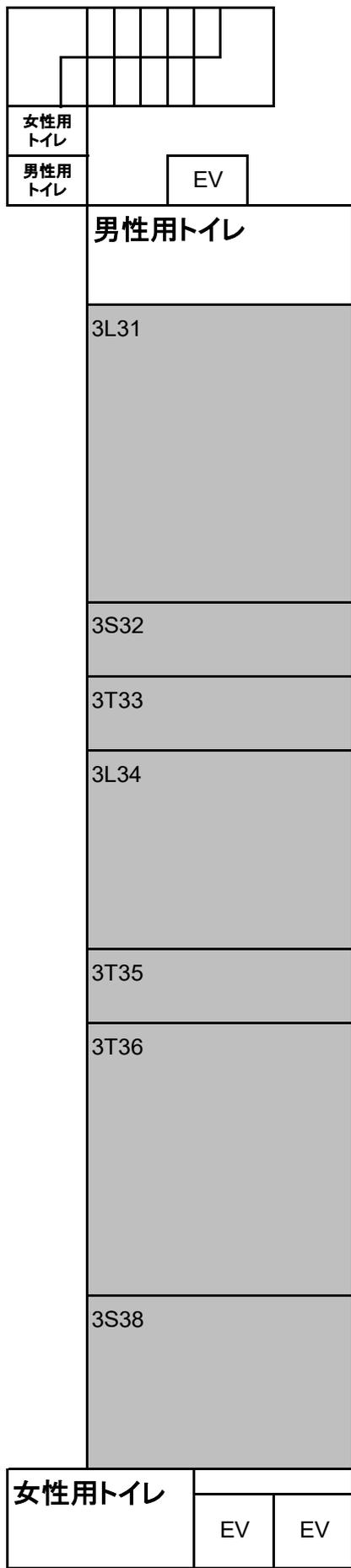
手作り販売・・・

4S34 教室



分科会会場 1号館

3階



懇親会会場へは女性用
トイレ側のエレベーターもし
くは階段をご利用ください。

2号館連絡通路

分科会会場 1号館

4階

										現代教養学科 教授室	
女性用 トイレ										4S02 大会本部	
男性用 トイレ		EV		男性用トイレ						4S03 ポスター発表①	
				4L31						4S04 ポスター発表②	
				4S32 総会・全体会						4S05 第1分科会	
				4S33 学生ボランティア控室						4S06 第2分科会	
				4S34 ほっとスペース 障害者施設手作り品販売 休憩室						4S07 第3分科会	
				4T35 社会福祉実習室						4S08	
女性用トイレ				EV		EV				福祉社会学科 教授室	

懇親会会場へは女性用
トイレ側のエレベーターもし
しくは階段をご利用ください。

全体会 I



せたがや福社區民学会会長挨拶

せたがや福社區民学会会長 上之園 佳子

皆様、こんにちは。せたがや福社區民学会は大会をいつも12月もしくは年明けに行うことが多かったのですが、10月に開催するのは初めてです。秋晴れの爽やかな日となり、多くの方々にご参加いただき心より感謝いたします。

せたがや福社區民学会は設立の準備大会から10年目を迎えました。くしくも、その会場は第9回大会の開催校、昭和女子大学でした。設立発起よりご尽力いただいた前会長、永山誠先生の大学でもあります。

初代会長の故石井哲夫先生の、設立の「学びあい、広げよう、世田谷福祉の輪」というテーマは、大会のサブテーマとして継承されています。このテーマとともに本学会は日本でも先駆的な組織活動となっています。

まず世田谷という身近な地域を基盤とした学会であること。そして、福祉に関わり働く人、福祉について学ぶ人、教育・研究する人、行政に関わる人と、さらに区民が対等の立場で参加する学会です。日頃の実践活動の工夫や抱える課題について研究成果を発表し学び合う場です。フォーマルな福祉に関する専門職だけでなく、インフォーマルな地域住民の活動、学生の活動、最近ではフォーマル・インフォーマルを超え、ともに協働する活動の報告も見られるようになりました。これは学会の規約にも掲げられる専門性の向上と共に、時代に即した新しい試みを地域住民と共に創る力を育てる。このように歩んできた学会と地域住民の取り組みは、誰もが住み慣れた地域で自分らしく生きるという地域社会をつくるという、国や世田谷区が目指す地域包括ケアシステムへの一翼を担うものと考えます。この10年間の学会活動をふまえ、新たな学会のさらなる発展につなげていきたいと思えます。

その意味で今回のテーマ「地域社会（まち）を創る～ボーダレスな実践～」は、地域の多様なニーズや課題への、領域横断的実践の必要性の問題提起を含め、今後の学会の展望にもつながるものとなりました。

第9回大会は、開催校の北本実行委員長をはじめ、実行委員、事務局、ボランティアなど、多くの方のご協力を得て運営されております。

世田谷区にある昭和女子大学、駒澤大学、日本大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学から、100名以上の学生がボランティアとして参加しています。



本大会が、活潑な研究成果の報告、多様な世代の交流となり、世田谷区において、新たな共生社会を育てる出逢いとつながりになりますようお願い、開会の挨拶といたします。ありがとうございました。

せたがや福社区民学会第9回大会 開催校挨拶

昭和女子大学副学長 吉田 昌志

本日は休日にもかかわらず、足を運んでいただきありがとうございます。先程の話にもありましたが、この学会は福祉学科等を持つ6大学の昭和女子大学、駒澤大学、日本大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学が持ち回りで協力しています。昭和女子大学は設立準備大会も含めて、今回で3回目です。

私は日本近代文学専攻なので、文学の授業でものごとや人の名前には必ず意味があり、言葉の1つ1つの意味を考えることで、ものごとの本質や真実に必ず出会うことができると思っています。学生に言うばかりではなく私自身にも言い聞かせています。

改めて「せたがや福社区民学会」という名前を考えると、世田谷という土地や場所、そこに住んで暮らしている区民、あるいは通学、通勤している人々がともに福祉に関して考え、勉強し、研究している学会。そんなことは当たり前と思われるかもしれませんが、この4つの言葉について真剣に考えていくのは、かなり大変なことだと思います。

目の前の具体的なテーマを考える前に、例えば、世田谷区というのはどういう地域性を持っているのか。福祉に今求められているものは何かとか、区民である自分が果たすべき役割は何か、と問い直してみる。それを堅苦しくいうと本質論といいます。そうした本質への問いかけを忘れずに、個々の具体的な問題について考えていけたらいいと常々思っています。

今回の学会の運営を手伝うのは、本学の福祉社会学科です。この学科は、従来の社会福祉士、精神保健福祉士、保育士の養成に加えて、今年から新たに言語聴覚士の養成を開始しました。あわせて地域の皆さんに利用いただける言葉の相談室も開室しましたので、多くの方に活用していただきたいと思います。

この学会の大きな特色は、会長からもありましたが学生がボランティアとして参加している点です。大学での授業だけではなく、生きた学びの場が与えられたということになりましょうか。また、今回は本学の附属校の高校生に発表してもらえることになりました。これも喜ばしいことです。シンポジウム形式の企画分科会を設けたのとあわせて、この学会に新しい面を開くことができましたし、昨年より8つ多い64の発表になりました。一層豊かで充実した発表が期待されます。

最後になりますが、本日参加した皆様への感謝はもちろんのこと、理事会はじめ委員の先生方、事務局の皆様にご挨拶申し上げます。これからの大会が盛会となるよう祈念して、開催校からの挨拶といたします。



世田谷区長挨拶

世田谷区長 保坂 展人

皆様、こんにちは。本来は、興梠先生の基調講演前にご挨拶すべきところですが、順番が前後して申し訳ありません。第9回になったせたがや福社區民学会の開催も大変な熱気で、大勢の方が集まっていただきました。年に1回の実践交流ということで、大変大きな意味があると思っております。

開催校の昭和女子大学をはじめ、本日は日本大学、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学など、それぞれの大学からご参加をいただいたと聞いております。7つの分科会で60を超える発表もあると聞いています。せたがや福社區民学会は、今日で第9回目ですが、本日は、世田谷区の85回目の誕生日でもあります。区制85周年というのは、実は10月1日です。今日をもって85年を刻んだことになり、記念すべき日です。世田谷区は9月1日現在で、人口が89万9072人。あと900人ちょっとで90万人。90万人だと、日本の中で7つの県より、人口が多いです。この近くだと山梨県よりも多く、世田谷区より少ないところでも政令指定都市になっているところもあります。90万人の自治体で、人口がこのところ割と増えているなかで、世田谷区は、0歳、乳幼児から高齢者まで代代的に、ほぼまんべんなく増えています。高齢者の人口も20%、2割ということで、比率は国の平均27%よりは低いですが、全体の人数が大きくなっているため、介護の判定で認知症の疑いのある方が、3月末時点で2万1700人になりました。一堂に集まる場所が世田谷区にないぐらい、認知症当事者が増えているということです。障害者手帳を持つ方だけで、4万人を超えています。一方年間8千人の子どもたちが生まれてきている。10年前は6千人だったので、子育て支援から、障害福祉、そして高齢福祉や介護と、まさに区のメインの仕事になっています。

昨年から27のまちづくりセンターをもう一度再活性化しようとしております。1つは防災拠点として。2つ目には、やはり地域の中で行きやすい近い場所という特徴を生かして、区の福祉の相談窓口をすべてに開設しました。しかし、区民全員が知っているところまでは至っていません。1年たって、区民の皆さんに少しずつ活発に相談に来ていただくには、もう一息のところですが、このような状況ですが、福祉に関わる、高齢、介護のみならず、障害福祉や様々の相談が、地域のまちづくりセンターの中にある福祉の相談窓口でできることは、一定の周知が図られています。

もう1つ、ネウボラという育児支援を昨年4月から始めています。90万人時代の仕事の多くが、区民の福祉ニーズを受け止め、縁結人ということが興梠さんからありましたが、1人の区民が抱える課題は、決して1つではありません。高齢、介護の問題と障害福祉の問題を同時に抱えていることも結構多いのが、この間で分かりました。まちづくりセンターに社会福祉協議会とあんしんすこやかセンターにも入ってもらい、世田谷型の地域包括ケアの準備をしてもらいました。

厚生労働省が昨年7月に、「我が事・丸ごと」地域共生社会と言い出し、あと2年間をベルトかわりとして、地域の福祉窓口の一元化を政策化しています。政策づくりの

方々にお会いしたら、世田谷でやってることも参考にさせていただいたと言われていました。窓口はできましたので、住民の皆さんから活用し、互いが足場にしながらつなぎ、さらに楽しい、生きがいのある地域社会をつくっていくことが、まさにこれからだと思います。一番のつなぎめが今日のせたがや福社区民学会だろうということで、是非今後、そういった 27 地区でスタートした相談窓口とつなぎながら、新しい時代を皆様とともに拓いていきたいと思っています。

今日は、開催おめでとうございます。



「市民性を育む ～世田谷からの発信」

昭和女子大学グローバルビジネス学部特任教授
コミュニティサービスラーニングセンター長
興 梶 寛

世田谷の市民社会の扉を開いた3人の人物

興梶(こうろき)と申します。この会場には、私と一緒に地域で活動している方や、日頃からお世話になっている、福祉施設や市民活動関係の方、世田谷区の行政の方や、ともに教壇に立っている昭和女子大学の先生もいらっしゃいます。ですから、今日は正直やりづらいなと思っております。なんで私が…、と思いながらお引き受けをしました。

今日の話は、どちらかという、私自身が30数年にわたって世田谷をベースに市民活動に参加し、また一方で、世田谷の様々な市民ボランティア活動を応援するような、ボランティアセンターの仕組みづくりや、市民の手で運営する福祉事業をはじめたことのお話をさせていただこうと思います。

私は現在、当大学のグローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科という、カタカナの多いところで、教員をやるかたわら、国公立の大学などで教鞭をとっています。日頃は、優しいおじいさんということで、なるべく優しく、しかし、大学院では、憎い鬼のような先生になって、研究者はつねに生活者の立場から考え、草の根ベースの活動をとおして学ぶように指導しているところです。

そこで、本日は、大学教師として教鞭をとっている立場ではなく、ひとりの活動者として教えられる立場から、お話をしたいと思えます。

私自身は、この仕事は3つめの職業です。大学を出て新聞記者になり、「過疎の村から」「福祉の谷間から」という取材などもしたことがあります。また、駆け出しの頃には、たまたまバングラデシュの国の独立後の社会を訪ねたことがきっかけで、今年で設立45周年目になる海外協力NGO『シャプラニール市民による海外協力の会』の設立にも参加しました。若い時代は、渋谷区神宮前にある妻の実家に居候して、妻も子どももほったらかしにして仕事をするという、典型的なシゴト人間でした。



私の子どもが小学校に入るということで、いつまでも妻の実家に世話になるのは申し訳ないと考え、ボランティア活動で知り合った、世田谷の活動家の澤畑勉さんに相談したら、不動産屋さんを知っているからマンションを借りてあげると言われて、世田谷の経堂駅の近く、赤堤小学校の裏側に引っ越しました。実はそれが地獄の1丁目と言いますか、別の言葉で言えば、幸運な世田谷での生

活のはじまりとなりました。

お手元の資料にあります。私が学ばせていただいた、世田谷の市民社会の扉を開いた尊敬する人物の3人をご紹介しますと思います。

「子どもに選んでもらえる大人になりたい」(澤畑勉さん)

まず、私を世田谷でのボランティア活動に参加するきっかけをあたえてくれた人物、澤畑勉(さわはたつとむ)さんのお話をします。本人は、ここで私がこの話をしていくことは知りません。澤畑さんは、子ども達からは、「ヒゲ」というあだ名をつけられています。定年の時期の直前まで、長い間世田谷区内の児童館で仕事をしていました。いつも、「子どもに選んでもらえる大人でありたい」というのが口癖で、児童福祉の現場のプロフェッショナルです。退職後には、昭和女子大学でも非常勤で教鞭をとっておられました。

たぶん彼に関しては様々な人物論があると思います。私の独断ですが、勤務先の世田谷区役所にとってみると、あまり好ましくない職員。上司の言うことを聞かないで、とにかく草の根の現場を歩いて、子ども本位の仕事をしていました。また、区内の多彩な市民活動をつなぐ役割をした、行動的ネットワークカーでもあります。私は、とっとも彼を信頼し、尊敬しつづけております。私自身は、若い頃にイギリスで勉強をしましたが、教えをいただいた先生も含めて、もし尊敬する10人の人物を挙げよと言われると、私はそのひとりに澤畑勉さんを挙げます、それぐらい尊敬しております。

澤畑さんは、徹底的に当事者の立場から考えて仕事をし、とくに社会的弱者やマイノリティのために人生を捧げるという視点を持ち続け、その姿勢はけっしてブレません。いつも彼は、「雑居まつり」と書かれたエプロンをつけて仕事をし、また生活をしています。以前に私は、区役所の課長さんに相談されたことがあります。「澤畑くんのエプロンは、何とかありませんか」「ネクタイをしめて仕事をしてもらおうと、もっと出世すると思いますけれど」って。私はそれにこう冗談で答えました。「彼のエプロンを無理やり剥がすと血が出ちゃうんです。お風呂でも、ベッドに入るときもエプロンを着けて寝ています」なんて。

彼は、若い時代の1970年代から、世田谷区内の障害のある人たちと一緒に、区内のボランティアネットワーク組織『世田谷ボランティア連絡協議会』をつくり、これまで世田谷区内の約200団体をつないでいます。協議会が主催する、年に一度の多様な活動者たちのネットワーク・イベント『雑居まつり』は、「地域の問題は地域住民の手で」を合言葉に羽根木公園をベースに毎年行われ、今年の第42回目は10月8日に開かれます。世田谷区内の生活者、活動者、つながる様々なNPO、行政関係者も1年に1回、ともに集い顔が見える人間関係を構築しています。澤畑さんのよきネットワークカーとしての活動です。

一方、児童館職員としては、つねに子どもたちの心に寄り添い、小学校高学年や中学生くらいの思春期を迎えてくる子どもたちに対して、とにかく勤務時間を超えて、あるときは朝まで児童館を開いて話を聴き、また保護者の子育ての悩みなどの相談対応にあたってきました。今では、そんな超過勤務は大変なことになると思います。

私も澤畑さんを信頼する子どもの話を聴いたことがあります。小学校4年生のときにいろいろな課題を抱えていたが、中学生になり暴走族の一員になって世田谷区内を

走り回り、何度も補導される。なぜかその少年たちが、「ヒゲさん」だけは信頼できると言います。どうして信頼できるのか？と私が尋ねると、「ヒゲは絶対にチクらないから。いつも俺たちのことを待っていてくれる。そんな大人はヒゲの外にはいない」と言うのです。彼は、児童館以外でも、夜中の2時になっても3時になっても、朝になっても彼らを待っていて、いまでも若者たちの思いのたけを聴き続けています。

また、澤畑さんたちが生んだ『雑居まつり』は世田谷のまちづくりの原点として、全国に誇ってもいいくらいのネットワークキングであり、それが市民による市民のための民間ボランティアセンター『世田谷ボランティア協会』の設立につながりました。

「自分の責任で自由に遊ぶ」(大村虔一さん)

2人目は大村虔一（おおむらけんいち）さんです。残念ですが、もうお亡くなりになりました。大村さんは、市民社会の創造性と可能性をひらくコミュニティデザイナーだと表現したいと思います。羽根木公園から生まれた、全国に広がった『冒険遊び場プレーパーク』を創設した人です。はじめは、大村さんのお住いの近く、経堂の緑道跡地で、2か月間だけ『こども天国』という遊び場をご近所の若い親たちと開設したことから始まります。それは、子どもたちは、自ずと潜在的に遊ぶ力や創造力を持っていて、その可能性はむしろ大人社会が狭めてしまっているのではないか、という問題意識からはじまりました。

大村さんは、奥様の璋子（しょうこ）さんと、ヨーロッパの冒険遊び場を見たことがきっかけになりました。第一次世界大戦直後に生まれた、スウェーデンやデンマークの「廃材遊び場」からはじまり、その後、第二次世界大戦以降に、イギリスで『アドベンチャー・プレイ・グラウンド』（冒険遊び場）として発展したプレーパークを参考にして、世田谷ならではの冒険遊び場をつくりました。

『冒険遊び場プレーパーク』のモットーは、「自分の責任で自由に遊ぶ」です。こどもにより創造的に自由に遊ぶ空間が必要だ。その自由を大切にするためには、子どもも応援する市民も一人一人が自律して責任を持つ。親たちもそうである。同じように、市民活動も、世田谷区のコミュニティをベースにするなら、一人一人は自分たちが律し責任をもって地域をよりよく変えていく。また、行政は地域の住民に政策を押しつけるのではなく、市民が自分の責任で、自由に活動できるようにサポートする。そういう市民社会の考え方を、大村さんは自ら実践することで、私たちに教えてくれた方です。そうです、ボランティア活動は「自分の責任で自由に」行動する私たちの権利です。

大村さんは様々な市民が参画する都市計画にも参加し、その後、東北大学の教授、宮城大学の副学長になり、宮城県の教育委員長も務められました。また、奥様の璋子さん（故人）とともに、世界の冒険遊び場づくり活動家と交流しながら、プレーパークの精神を全国に広めました。

「欧米の市民社会の息吹を世田谷に」(中田幸子さん)

それから、3人目は中田幸子さんです。私にとっては、「世田谷のおっかさん」のような存在です。現在の『世田谷ボランティア協会』を創った人です。私自身は、澤畑勉さんに転居先を相談した後、渋谷区から世田谷区に引っ越してきた。なぜか当時の

大場区長さんが唱えた「ヒューマン都市世田谷構想」の一環で、世田谷区内に市民によるボランティア活動を支援していこうという検討委員会の一人に選ばれました。たぶんそれも、澤畑勉さんに上手に騙されたのかもしれませんが、引っ越したばかりの私が、欧米の状況に詳しい若者ということで、ボランティア活動を推進するための構想づくりの委員にさせられました。その時にお会いした世田谷区検討委員会の委員長が中田幸子さんでした。専修大学の教授で、法学の専門家。中田先生はイギリスに留学して、いち早くヨーロッパの市民社会に目を向けていた造詣の深い人です。中田さんは、ボランティア活動は「善意の奉仕」ではなく、「市民活動」だという考えでした。

私は、世田谷区に引っ越す前に、取材で中田先生にインタビューしたことがありました。その際に、イギリスの市民社会の話伺いました。ボランティアを「善意」という言葉に歪曲化している日本の風潮や、おたがいにイギリスの市民教育に興味を持ち、意気投合したことがありました。まだ、私の年齢は30歳そこそこ、中田先生はお母さんの年代でした。なぜか、その副委員長は大村虔一さんと私になったのです。

世田谷区はその委員会の答申を受けて、世田谷区に市民が運営するボランティアセンターをつくり、区が側面的に応援するという政策を発表しました。なぜか委員長が初代理事長、副委員長がそのまま副理事長になりました。

世田谷区役所は、設立にあたり1人だけコーディネーター（相談員）職員の人件費を補助してくれました。また、千歳船橋駅近くの商店街の中の小さなマンションの一室を借りてあげましょう。あとは事業費も運営も自分たちでやるんですよ、と。私たちは大喜びしました。市民一人一人が参加して直接運営できる、自分たちの活動拠点ができるのはいいということで、市民参加のボランティアセンターが1981年にオープンしたのです。

その当時、私の取材では、イギリスには全国各地に400のボランティアセンターがありました。イギリスは、ボランティアセンターの発祥の地です。アメリカには50のボランティアセンターがありました。それは、すべてボランティアのネットワークによる市民の手によって運営されていました。多様な個人・団体がネットワークをつくり、市民の発想で事業計画をつくり、マネジメントもすべて市民によって運営されていました。私も中田さんも同じ考えでした。

スタートすると、私たちは開所時間を朝の10時から夜の10時までにししました。月曜日はお休みですが、土・日も開所する。会議室の使用は無料。仕事帰りに、学校帰りでも、夜でも土・日でもボランティア相談ができる。そこにボランティアコーディネーターという専門職員がいて、自分の持っているものが役に立つのか、という人たちの思いを受けとめるとともに、ボランティアを必要としている人びとや組織・施設のニーズを受けとめて、社会の需要と提供をつなげマッチングする。そうした、助けあいささえあいの拠点が始動しました。

その当時のたった一人のスタッフは不安だったと思います。みんなボランティアで運営するのですから。自分の給料は大丈夫だろうか、どうやって活動費を生むのか。僕は火曜日から日曜日まで仕事をしていたら死んじゃうと考えたことでしょう。

私たち運営するボランティアは、仕事帰りに夜に集まり、事業計画を検討し、プログラムづくりを行い、ボランティア相談や部屋のお掃除もする。私も経堂の自宅から自転車で、大村さんは下駄を鳴らしながら経堂から歩いていく。帰りはちょっと一杯

なんて、楽しくもあり大変さもあるマネジメントぶりでした。たくさんの街の人との出会いがあり、楽しい思い出です。心残りなのは、創設者の中田幸子さんは、設立の3年後に故人となられ、その志は私たち若者たちに引き継がれたのです。今では、『世田谷ボランティア協会』は社会福祉法人化されて、区内でも大きな事業組織になりました。私も2代目の理事長、牟田悌三さんの後を引き継ぎ、長い間3代目の理事長をつとめさせていただき、ようやく今年の6月に後任の理事にバトンタッチをお願いすることができました。いま、ホッとしているところです。

「風」と「土」とが結ばれて世田谷の福祉の風土が耕されていく

これまでご紹介した世田谷のネットワークを、私は「縁結人」（えんむすびと）と名づけたと思います。まちづくりを原点に不思議な「縁」によって結ばれている3人ですが、その3人に共通するものを挙げてみたいと思います。

1つは、3人とも「リゾーム型市民社会」をめざした。ピラミッド型の上から下の組織ではなく、生活者や問題をかかえる当事者の立場からものを考え、ボランティア活動をとおして、それをヨコ型の社会のシステムに変えていくという働きかけをしていった人びとだということです。

2つめは、オルタナティブな組織をめざしたということです。E・シューマッハというイギリスの経済学者が言った「スモール・イズ・ビューティフル」という言葉に象徴される言葉ですが、「身の丈に合った活動・組織」という意味です。身近なところで、小さな一歩から。私たちの暮らしや生活の身近なところから考えて、社会を変えていこうとする人たちです。

3つめは、この指とまれのゆるやかなネットワークをめぐらしたこと。誰も排除したりしない、考えの違い、立場の違いなどを超えた「多事争論」の場をつくり、「こんなことをやりたい人この指とまれ」と呼びかける。

4つ目は、自分は表に出ないで、みんなを主役にしようとする。自分は出会いと絆を結ぶ場づくりの役を淡々とすすめて「黒子」（くろこ）に徹します。「縁結人」（えんむすびと）になる。

そうしたネットワークに徹したところが、多くの区民に愛され、人と人をつなぎ、人と社会をつなぎ、社会課題の解決のヒントを生み出す役割を持てた秘訣なのではないかと思います。

私は、世田谷のまちでこんなことをイメージしています。柳田國男の民俗学の世界で表現してみましよう。私は「風」です。よそから移り住んできた「風」です。大村さんも同じように「風」です。中田さんは、「風」になってイギリスに学びました。

「風」はこれまでの世田谷になかった、新たな情報や価値を運んできました。

大村さんは、世田谷で古くから住んでいる「土」と出会い、子どもたちのために画期的な冒険遊び場を生みました。澤畑さんは世田谷生まれの「土」の人です。多くの「風」を寛容な心と好奇心で受けとめてくれました。90万都市の世田谷は、民俗学的にいうと、「風」と「土」との織りなす世界です。新しく移り住んだ人と、地域で暮らしていた人たちとがダイナミックに結ばれて、新たな価値を生み出す。誰も排除したりしないまちづくりをすすめる。そうして、新しい時代の「風土」が生み出されていく。皆さんのめざす「福祉コミュニティづくり」は、風と土が織りなして「福祉の風

土」を創出している世界ではないかと思います。

最後に教育の話をしたのですが、時間がないので簡単にお話をします。

私は教育社会学が専門ですが、1996年、国連機関ユネスコ『21世紀教育国際委員会』は、21世紀の教育について提案しました。20世紀までの教育は、①「Learning to know」（知るための学び）、②「Learning to do」（為すための学び）を基本としていた。しかし、知識を吸収する職能教育にとどまらず、21世はさらに次の2つの教育的要素を加えていこう。それは、③「Learning to live with others」（他者とともに生きるための学び）、④「Learning to be」（在るための学び）である。

多様な個性や文化を受け入れ、他者とともに生きることの大切さを学ぶ教育。そして、一人一人がなりたい人間になるために多様な学びを等しく進めることができる社会をめざそう。ユネスコは、教育をこのように変えていこうと提案したのです。

これが『OECD』の学力観の基礎となりました。その学力観をもとに世界各国で「学力テスト」を行った。かつての従来型の学力テストでは、日本の子どもの知識の量を測ってみれば成績はどこ国にも負けないくらいでした。しかし、『OECD』の「キーコンピテンシー」という学力観を元にテストをしてみたら、危機的な状況であることがわかりました。日本は応用力、クリエイティビティを育てる教育をやっているのか。このままでは将来の社会はどうなるか。そうした大きな危機感があって、現在『学習指導要領』の大改訂が行われています。そうした危機意識が「アクティブラーニング」という教科教授法として唱えられ、いま文部科学省を中心に教育方法の改善が行われています。

ただ、応用力や創造力をつけていくための学びは、先生方は悩みの種でもあります。しかも、アクティブラーニングは、教室の中での取り組みだけではなく、コミュニティが持つ潜在的な教育力を活かして、子どもたちに体験の場を、心を癒す場を、社会の問題に触れて、その解決のために自分も「ひとりの市民」として何ができるかを考え実践してみようという教育がはじまっています。こうした試みは、小・中・高校のみならず、大学教育の教育改革の中心となっています。

いま、全国の大学に「ボランティアセンター」や、「コミュニティサービスラーニングセンター」などが開設され、地域社会をベースにして課題解決的に学んでいく取り組みがすすめられていく。子どもたちが小さな胸を痛めながら、学校というコミュニティの問題をどう解決したらいいのか。学校の問題は、学校周辺のコミュニティの問題とつながっている。子どもたち自身が、学校の周囲の社会の問題につなげながら学ぶ。その学ぶプロセスをとおして、何度もジレンマに陥りつつ、地域の人びとの助言を得ながら克服していく。そんな教育実践が求められています。そういう学びは、ヨーロッパやアメリカでは既に当たり前のように行われていましたが、日本はこれからというところでしょうか。

いま、コミュニティは次世代を育む重要な学びの場であるとも言えます。子どもたちは、若者たちにとっても、生きた社会のキャンパスで学べばもっと楽しい。何かの貢献をすれば、「ありがとう」と感謝してもらえる。そこには、予想もしない発見があります。この写真は、昭和女子大学の学生が東日本大震災の被災地女川町での写真です。被災直後に女川町に開設された『ちゃっこい絵本館』で、学生は子どものために

読み聞かせしようと思いました。ところが、なんと子どものほうが読み聞かせを始めたのです。1冊だけかなと思ったら4冊も。どうしてだろう。学生はボランティアをしてあげたいと思ったのに、子どもがボランティアをしてくれたのです。学生は考えながら、こう私に言いました。「先生、被災地の子どもたちは、ボランティアをされるだけではいやなんですね。自分が誰かのためにボランティアをしたいんですね」と。人は誰でも、自分が必要とされる喜びを求めています。ボランティアには、自分は他者や社会に必要とされている。この世に生まれてきて良かったんだ。生きることには価値があるのだということ、きれいな言葉で言うのではなく、体験を通して感じ、知り、学び取っていく不思議な力があります。そして、未知との世界との出会いがある。こうしたセンターが、どんどん大学にも開設されています。そうした学びには、コミュニティの最前線で、多様な社会課題やまちづくりに取り組んでいらっしゃる皆様のご協力なしにはすすめることはできません。どうか、良き市民、課題解決力や問題意識を培う教育にご協力をお願いします。

最後に、これからの市民社会を開くキーワードを挙げたいと思います。それは、「寛容な社会」「ネットワーキング」「癒しのコミュニティ」「行動的市民を育む」の4つです。

だれも排除したりしない「寛容な社会」。多様な人びとが目的や価値を共有することができる緩やかな「ネットワーキング」。それをつなぐ街の「縁結人」たち。そして、「癒しのコミュニティ」。会場におられる医師、長谷川幹さんが言うように、人びとの心を癒しコミュニティ全体の治癒力で福祉をすすめていく。最後に「行動的市民を育む」です。四角い黒板の中だけでは、子どもたちは育たない。コミュニティ全員の参加で次世代の子ども・若者を育てていく。

なかでも大切なことは「寛容な社会」づくりです。社会の多様性を尊重することです。様々な個性や社会的背景の違う人びとが一緒に暮らすには、もっともっと私たちのコミュニティが寛容になっていかなければいけない。寛容な社会があってはじめて、「互恵的協働社会」が生まれていきます。

2030年を目標とした、国連と世界のNGOが一緒につくった「持続可能な社会開発目標」(SDGs)が一昨年の暮れに提案されました。日本のNGOもそれを目指して活動していますが、2030年をゴールに、少しでも問題解決に取り組もうと国連と世界のNGOが17分野169の行動目標を掲げて活動しています。貧困の問題を解消しよう、健康な生活と福祉を進めよう、争いのない社会をつくろうなどの17の目標です。私たち世田谷の地域の課題もすべてこの目標とつながっています。これらの目標と行動計画を世田谷のコミュニティに置き換えて、ともに学びともに行動することを、最後に提案します。

ご静聴、ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。

質疑応答の時間をもうけたいと思います。挙手をお願いします。

会場／岡野と申します。

児童館とか、子どもの成長を育むというの、確かに視点としてありますが、私は以前、世田谷区の船橋に住んでいました。駒井澄子さんと出会いましたが、彼女は去年

亡くなりました。子どもを育む地域に親が参加するのは非常に難しい。中間層をどう地域に取り込むかが課題だったような気がします。参加するのは高齢者と児童。両親が働いて忙しく、参加がなかなか難しかったんですが、それをどう地域の中に溶け込ませるかが、私にとっていつも課題でした。先生のお立場で、どう、そのミドル世代を取り込まれたのか（お聞かせください）。

興梠／私もとても関心のあるテーマです。今年の夏の2か月間で、学生たちをタイ・ミャンマー・ラオスの国境地帯、被災地・女川町、過疎の問題をかかえる長野県の伊那市、熊本などに学生を引率して、国内外の4カ所くらいでボランティアをしています。また、学校教育ということに地域住民が協働して、学校教育や放課後の子どもたちの学びをすすめるシステムづくりにも取り組んでいます。

私は千葉県の木更津市のシステムづくりに参加しました。地域の人たちが、教員の教育実践に問題提起をするばかりではなく、自分たちも参画して責任を果そうという試みです。市内のすべての小・中学校で、市民に「ボランティアコーディネーター」をお願いする。すべての学校にボランティアルームをつくって、市民参加の居場所をつくる。同時に、ボランティアを希望する市民には、誰にでもできるという思いがけないプログラムをたくさんつくってハードルを低くしている。例えば、朝の登下校で高齢者たちが登校してくる子どもたちに挨拶をする。「おはよう、今日も元気でね」と声をかけて、30分でボランティアが終わります。これなら誰にでもできますね。地域の人たちと一緒にご飯を食べる。お昼ご飯と一緒に食べるボランティアなら、誰でもできる。あるお年寄りはとっても楽しみにしています。近くの中学では、小学校に行き掃除を教えます。お兄さん、お姉さんが来て、一緒に掃除をしてくれます。次に、小学生が中学校に行き掃除をすると、今度は中学生が熱心に掃除をするようになります。自分にできることはたくさんあるという意識をもってもらうことが大切です。

会場／コーディネーターは一般の人から？

興梠／そうです。校区内の近くの人が活動することが条件で、交通費も出ません。まったくのボランティアです。すべての小中学校で、毎日2～3人のコーディネーターが活動しています。

司会／以上で基調講演を終了します。皆様、もう一度拍手をお願いします。



実践研究発表



分科会(ポスター)発表一覧

第1会場 (4階 4S03教室)			
【コアタイム】 13:50～14:40		助言者 田邊 仁重 (世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長) 辻本 きく夫 (世田谷区介護サービスネットワーク) 中原 ひとみ (特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長)	
	発表者	所属	発表概要
1	高山 都規子	在宅介護家族会「かたよせ会」	在宅介護者に必要な情報
2	鈴木 浩二	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の取り組み
3	稲田 順一	三井住友海上ケアネット株式会社 介護付有料老人ホームゆうらいふ世田谷 公益社団法人全国有料老人ホーム協会	「介護」や「有料老人ホーム」についてもっと知って いただくために - 世田谷区内での取り組み -
4	星 有美 所 順子 落合 謙一	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	デイホーム池尻の実践事例
5	小塚 秀忠	地域共生のいえ 椎の木サポーター	地域共生のいえ「椎の木」と特別養護老人ホームとの7年間の活動報告
6	石井 琢也	世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケアマネ ジャー部会	世田谷区にある高齢者施設 お役立ちガイド ～世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケアマネ ジャー部会」からの発信～
7	坂本 晋二	あけぼのデイサービス まごころ館豪徳寺	ノートとペンだけでできるモチベーションUP方法 マイナス現象を宝に変える。
8	福永 省吾 杖野 公祐	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係	世田谷区介護職員合同入職式 実践報告

第2会場 (4階 4S04教室)			
【コアタイム】 14:50～15:40		助言者 宮崎 紘子 (世田谷ボランティア協会ボランティア・市民活動推進部次長) 加藤 美枝 (世田谷区老人問題研究会理事) 園田 巖 (東京都市大学人間科学部児童学科講師)	
	発表者	所属	発表概要
1	横井 美代子	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会	失語症カフェ - 失語症への理解と失語症会話パートナーの活 動を広げたい -
2	三澤 正紀	世田谷区保護司会	「更生保護」って何だろう? - 立ち直りを支え、犯罪を防止する -
3	古屋 敬子 梶原 裕美 三武 絢子	社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション	配食サービスから地域高齢者を見守るために
4	高堀 真紀子 富松 里佳子 堀 礼佳	橋本 沙耶華 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科
5	瀧村 悦久 大関 奈津子	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	認知症デイサービスにおける認知症ケアを考える
6	齊藤 友也 鈴木 麻由 中土 優佳	中村 美月 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科
7	新城 睦月 高橋 奈瑠海 田邊 晴葵 野崎 竣也	佐藤 祐子 宮路 茜 峰村 貴央 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科
8	藤井 愛 木尾 直子	社会福祉法人福音寮 ぽっぽちゃんひろば	地域とつながり、育ち合う子育て - ぽっぽちゃんひろばの活動を通して -

※コアタイムは、発表者が説明および質疑応答に対応します。(それ以外の発表者の待機時間は掲示場所でご確認ください)
ポスター会場は、12時～16時25分まで自由にご覧いただくことができます。

分科会(口頭)発表一覧

第1分科会 高齢福祉 (4階 4S05教室)

進行役・助言者 村田 幸子(福祉ジャーナリスト)
中土 純子(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	柴田 佳代子 平田 眞智子	世田谷区老人問題研究会 ひこばえ広場たまごの家	ひこばえ広場「たまごの家」の実践から	13:30
2	山内 吉尚	社会福祉法人フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬	サービス導入が困難な方への関わり	13:55
3	石井 睦夫 小松 さやか	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	小規模多機能ホーム三宿の実践事例 ー在宅で高齢者を支えるにはー	14:20
4	保坂 和美	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	食べることを忘れてしまった利用者様への 食事ケア	14:50
5	田野 和枝 松岡 美咲	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻	タクティールケアによる不安の軽減の取り組み	15:15
6	常盤 迪臣 三島 祐香子	(株)ベネッセスタイルケアくらら用賀	センサーマットの見直しから 気づかされたその方を知る大切さ	15:40
7	日比 理恵 竹内 洋子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス	在宅介護における本人、家族、介護スタッフのあきらめない経口摂取の取り組み	16:05

第2分科会 高齢福祉／障がい児・者／医療・保健・福祉 (4階 4S06教室)

進行役・助言者 今井 康明(株式会社すずらん代表取締役)
吉田 光爾(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	渡邊 久子	社会福祉法人フレンズ奉仕団 特別養護老人ホームフレンズホーム 生活介護課	介護施設を特殊な場所にしない「自立支援研修センター」の取り組み	13:30
2	中谷 紘子 笠原 俊介 伊藤 梢	特別養護老人ホーム 久我山園 ボランティア・久我山園職員	利用者の気持ちに寄り添ったボランティア活動を めざして	13:55
3	三浦 凌 阿部 裕香	医療法人社団はなまる会 グループホームももちゃん	ももちゃんにおける若年性認知症とは？	14:20
4	高本 美紀	一社団法人はびなす こどもデイケア	重症心身障害児と、こどもデイケアの活動紹介 ー愛と希望のある未来のためにー	14:50
5	加藤 さくら	NPO法人Ubdobe(ウブドベ)	踊るだけでなく学べるイベント “SOCIAL FUNK!”	15:15
6	番本 鷹也	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	入所前の生活環境を知ることで見えてきたこと	15:40
7	鈴木 清之 西尾 佳子 鬼塚 正徳 吉田 周平	けやき学級 世田谷区教育委員会事務局生涯学習・地域学校連携課	けやき学級の障がいのあるメンバーと仲間たちの活動 ー障がいのあるメンバーを中心に、ともに学び、遊び、ともに生きる仲間を創るー	16:05

第3分科会 障がい児・者 (4階 4S07教室)

進行役・助言者 山崎 順子(東京都発達障害者支援センター長)
佐藤 千晶(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	梶 由香里	社会福祉法人せたがや榎の木会上町工房	Aさんに関心をよせたことでAさんが見せた変化	13:30
2	萩野 直人 和田 徹太郎	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所	行動障害の理解と支援に必要なこと	13:55
3	手塚 由美	一般社団法人輝水会	障がい者の主体性を引き出す「リハ・スポーツ」	14:20
4	牧野 友美 宿田 侑希 松永 春子	昭和女子大学人間社会学部 福祉社会学科2年	障がいを持つ子供たちとのプログラムを通じた関わりープレイ&リズム希望丘でのソーシャルワークプロジェクト活動を通してー	14:50
5	甲斐 実	社会福祉法人せたがや榎の木会 喜多見夢工房分室	主体性を発揮する暮らしぶりに向けて	15:15
6	田中 千絵	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	分かりやすい！伝わる！個別支援計画	15:40
7	結城 尚子 八田 晋一郎 石切山 美帆	社会福祉法人はる グループホームはるの邑	本人の想いに添う支援ーセルフ5ピクチャーズから見えてきたものー	16:05

第4分科会 障がい児・者 (3階 3S03教室)

進行役・助言者 佐藤 光正(駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授)
根本 治代(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	高見 佳乃子	駒澤大学文学部社会学科 社会福祉学専攻3年	大原福祉作業所での実習を通して、支援のあり方を考える	13:30
2	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや榎の木会上町工房	『主体性』の発揮を意図して ～「自由発表」の時間から思うこと～	13:55
3	安藤 亜由美	社会福祉法人はる 社会就労センターパイ焼き窯	「ストレングス」に基づく利用者支援 ～パイ焼き窯での就労支援の取り組み～	14:20
4	湊 英輔	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所めばえ学園	不安感や自信のなさがあるAくんと の関わりについて	14:50
5	中田 順子	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所おおらか学園	園外活動を介して利用者との関係性を発展させる ー過敏性の強いAさんのケースを通じてー	15:15
6	佐藤 明子 及川 舞子	社会福祉法人友愛十字会 友愛デイサービスセンター	利用者支援の実践報告	15:40
7	長見 亮太	社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房	障害のある方の「自分らしさ」の発揮を考える	16:05

第5分科会 子ども・若者／国際／医療・保健・福祉(3階 3S04教室)

進行役・助言者 牧野 まゆみ(日本放送協会学園高等学校教諭)
原 史子(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	塩崎 晃人 木村 果央 内藤 夏美 三橋 成美 吉永 有希	東京都市大学人間科学部児童学科3年	自然遊びの大切さ	13:30
2	小堀 勇士 伊藤 真理子 伊藤 璃香 永井 きみ江 坂田 朗	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園	主体性を育む幼児保育	13:55
3	酒井 七海 鈴木 ちひろ 新山 瑞姫 山崎 寿々桜 吉野 真希	東京都市大学人間科学部児童学科3年	人との関わりで育まれる心	14:20
4	内田 朝代	特定非営利活動法人 若者の自立支援すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェアハウス運営 安心して住むことの出来る居場所の必要性	14:50
5	佐藤 彩子 松尾 直美	世田谷区在宅医療電話相談センター	『療養しながら地域で暮らす』～世田谷区在宅医療電話相談センター10年の実践をとおして～	15:15
6	木村 徹	三軒茶屋珈琲 red-clover コーヒー農園経営	コーヒー生産国の労働者 コーヒー生産国と消費国の関係とコーヒー生産者の労働条件	15:40
7	五十嵐 まりも他 11名	昭和女子大学附属昭和高等学校 LOBO4	途上国女性の社会進出課題	16:05

第6分科会 地域福祉 (3階 3S05教室)

進行役・助言者 中澤 まゆみ(ノンフィクションライター)
野坂 洋子(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	進藤 義夫	世田谷セレ部	世田谷セレ部 活動報告	13:30
2	柳下 記子 野村 一恵	特定非営利活動法人ソラマ	誰もが普通に生きられる つながるやさしい街づくり ー医療的ケアの必要な重度身体障害者のグループホーム設立を目指してー	13:55
3	宮川 英子 比留間 香代子 秋友 史衣 酒井 美知子	世田谷区介護サービスネットワーク 烏山地域部会	烏山ファースト ー多職種連携からみえてきた地域連携における課題と烏山地域部会の取り組みー	14:20
4	秋山 由美子 百瀬 智彦 安藤 秀彦 菅佐原 浩晴	砧地域ご近所フォーラム2018実行委員会	砧地域ご近所フォーラムの取組み ～ひろげようご近所フォーラムのわ～	14:50
5	石黒 真貴子 泉谷 一美 鬼塚 正徳	世田谷区福祉移動支援センター (そとでる)	世田谷区福祉移動支援センター(そとでる)の活動 ー誰もが自由におでかけできる世田谷を目指すそとでるの活動ー	15:15
6	齋藤 隆弘	社会福祉法人敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑	地域とともにある施設を目指して～地域公益への取り組み～	15:40
7	小泉 絵美	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻	若年性認知症コース「ともに」の活動報告	16:05

第7分科会 高齢福祉／地域福祉／医療・保健・福祉(3階 3S06教室)

進行役・助言者 長谷川 幹(三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長)
李 恩心(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師)

	発表者	所属	発表概要	開始時間
1	金子 広志	世田谷福祉専門学校	eラーニングによる実務者研修 ーいつでも何処でもできる研修資格へー	13:30
2	明石 眞弓	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	おでかけひろばの「食」がつなく、地域のつながり	13:55
3	高木 照子 中尾 有紀子	下馬地区社会福祉協議会	都営アパートのコミュニティ再生「サロン下馬和楽」	14:20
4	富沢 優 樋口 わかな 吉田 彩花	日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン	日大さくらサロン～学生主催サロンにおける活動 の継続と新たな挑戦～	14:50
5	真行寺 ひろ子 中田 成子	桜香苑 太子堂あんしんすこやかセンター	区民向け在宅医療連続講座を 開催してわかったこと	15:15
6	河合 信吾 鈴木 一夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」高齢者なんでも相談室の 相談内容について	15:40
7	徳永 宣行	世田谷区介護サービスネットワーク	地域のインフラとしての可能性ー世田谷区介護 サービスネットワーク地域部会の活動ー	16:05

企画分科会①

◆ テーマ

「コミュニケーションの発達支援」

◆ シンポジスト

小児科医の立場から： どんぐり発達クリニック院長 宮尾益知氏

発達心理学の立場から：昭和女子大学人間社会学部心理学科教授

藤崎春代氏

言語聴覚士の立場から：同大学 同学部 福祉社会学科 進藤美津子氏

◆ コーディネーター

進藤美津子氏 （昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 特命教授）

◆ 企画の趣旨・内容

世田谷区は 23 区内で最も人口が多く、総人口、児童人口ともに増加傾向にあり、特に乳幼児（0 歳～5 歳）の増加が著しいとされています。

子どもの発達には個人差がありますが、ご両親から見て発達の気になるお子さんについて、区の関連施設で発達相談が行われております。ところが相談希望件数が多く、すぐには相談が受けられない状況もみられています。

今回の企画分科会では、上記のような現状を踏まえ、“子どものコミュニケーション”について気になる問題とその支援に焦点を当てて、それぞれの専門家の方々にお話と討論をして頂きます。

【各専門家の方々のご紹介】

*宮尾益知氏：発達障害の診療や研究の第一人者であり、区内千歳烏山でどんぐり発達クリニック院長として、多くの発達障害児者やご家族の支援に活躍されています。

*藤崎春代氏：発達心理学、臨床発達心理学の専門家であり、昭和女子大学生活心理研究所内の子育てステーション世田谷発達相談でも活躍されています。

*進藤美津子氏：今春よりスタートした本学福祉社会学科内のことばの相談室で、区内および近隣地域の気になることばのトラブルがある幼児・児童のことばの相談・支援を担当しています。

企画分科会②

◆ **テーマ** 「社会問題に挑戦する実践：かべ、境界、を乗り越え新しいコミュニティ創造の戦略」

◆ **問題提起**

高橋学氏（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 教授）

◆ **指定報告**

「世田谷全区に支援者のネットワークをつくるための戦略」

「若者就労支援の現場から見えた地域連携・協同の可能性」

「若者の労働・貧困問題の実態」

「精神疾患を抱える患者の地域移行に向けて組織と地域を動かす戦略」

◆ **シンポジスト**

渡邊裕司氏：世田谷区社会福祉協議会自立生活支援課課長、世田谷区生活困窮者自立相談支援センター（ぷらっとホーム世田谷）

篠原健太郎氏：特定非営利活動法人ワーカーズユープ東京中央事業本部事務局次長、世田谷エリアマネージャー

渡辺寛人氏：特定非営利活動法人 POSSE 事務局長、社会福祉士

岡佑美氏：精神保健福祉士

◆ **コーディネーター**

伊藤純氏（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 准教授）

◆ **企画の趣旨・内容**

社会変動の激しさと閉塞感のあるなかで、しきりに革新、イノベーションなる言葉が叫ばれる現代社会である。コミュニティや社会の複雑化に伴い、その中心的なモチーフとなる実践は、人々の多様なニーズに積極的に応答できるような、インクルーシブ(包括的な)活動システムを新たにデザインすることにあるのではないだろうか。

地域包括ケアをはじめとしてチーム論や連携・協働論が述べられているが、医療や福祉は組織や部門や専門性や専門職、非専門職間の境界を越え、異なる声を共振させて組織変革や地域変革、そして知識創造を引き起こしていく必要がある。ある共通のテーマを下に、多様な人々が公的、非公式的につながり、多種の文脈を横断しながら実践する戦略が求められるのである。それは実践する一人一人が変化し発達していくことでもある。

しかし、コミュニティには様々な壁、境界が存在する。本分科会で、越境する実践として、異なる部署や集団の成員が同じ対話の場に集まり、何らかの境界の問題の乗り越えをはかるべく、情報交換やアイデアを出し合い、新しい知識やツールやコミュニティ間のつながりを協働で創造する実践や戦略を明らかにするものである。また、鍵となるのは、実践者たちが自ら生みだしてく「学び合い」と「育ち合い」にあると考える。

ポスター発表 第1会場

助言者

田邊 仁重（世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長）

辻本 きく夫（世田谷区介護サービスネットワーク）

中原 ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

	発表者	所属	テーマ
1	高山 都規子	在宅介護家族会「かたよせ会」	在宅介護者に必要な情報
2	鈴木 浩二	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の 取り組み
3	稲田 順一	三井住友海上ケアネット株式会社 介護付有料老人ホームゆうらいふ 世田谷 公益社団法人全国有料老人ホーム 協会	「介護」や「有料老人ホーム」について もっと知っていただくために ー世田谷区内での取り組みー
4	星 有美 所 順子 落合 謙一	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	デイホーム池尻の実践事例
5	小塚 秀忠	地域共生のいえ 椎の木サポーター	地域共生のいえ「椎の木」と特別養護老 人ホームとの7年間の活動報告
6	石井 琢也	世田谷ケアマネジャー連絡会 施設ケアマネジャー部会	世田谷区にある高齢者施設 お役立ち ガイド ～世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケ アマネジャー部会」からの発信～
7	坂本 晋二	あけぼのデイサービス まごころ館豪徳寺	ノートとペンだけでできるモチベーシ ョンUP方法 マイナス現象を宝に変える。
8	福永 省吾 杖野 公祐	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課 管理係	世田谷区介護職員合同入職式 実践報告

在宅介護者に必要な情報

在宅介護家族会 かたよせ会
高山 都規子

(生きがい 交流)

1. 目的

平成6年私が60才になった時、主人が多発性脳梗塞で倒れ脊椎圧迫骨折で寝たきりになり突然介護をする身になる。当時、社会福祉協議会主催で介護者リフレッシュ泊旅行があり、その時知り合った12名で平成9年11月に会を立ち上げ、情報交換や癒しの目的で主人の命名による「かたよせ会」をつくった。

2. 実績内容

発足当時は会場さがしが大変だったが、今は「上北沢ふれあいの家」で毎月第3木曜日の12時30分から16時まで活動している。会員は38名、年会費1500円、参加の時、200円、催事のみは300円、介護現役の方が少なくなったが看とられた方や一人住まいの方達で介護経験者が多く、これから介護する身になるかもしれない少し若い方々に情報交換が出来る。毎年6月には九段下のホテルで「ありがとう介護研究会」の医療専門の講師の講演があり、会員は毎度参加している。あんしんすこやかセンターから認知症のDVDや寸劇など理解する勉強をしている。会の特徴としてイベントが多く、落語、ラテンコンサート、12回目のファッションショー、男の台所の出前シェフ、フリーマーケット、クリスマスパーティー、新年会などがあり時間がある時には手工芸をし、保健センターの指導の先生による健康体操や認知症予防の体操もしている。

3. 結果

高齢者の方は病気になったり老人ホームに入所したりしているが、毎月楽しみに元気に参加している。大勢の人と会話をしたり、歌をうたったり笑ったりで認知症の予防に役立っている。

4. 今後の課題と考察

介護現役の方はなかなか時間がなく参加できない状態。行政も出来るだけ在宅で介護をすすめているが、医療、看護師、PT、ST、ケアマネジャーなど連携を良くとって下さること。最近在宅医療専門の先生もいるが絶対数が少ない。今、私は世田谷区地域保健福祉審議会の委員として会議に出席しているが、区民が住みなれた土地で安心して元気に過ごせるよう、その為に正しい情報が素早く伝達出来るよう人材システムを考えてほしい。

私の信念「介護しない介護されない」と思っている。

<質疑応答>

Q：運営されているメンバーは。

A：発表者とリーダーと、サブリーダーが中心となり、翌月の活動について相談しています。会員は現在 38 名おり、3 班に分かれて当番制で運営しております。

Q：準備は大変ですか。

A：そうですね。上北沢ホームで開催している認知症カフェなどへの参加もしているので。

Q：21 年続いている秘訣は。

A：活動していても浮き沈みはあります。在宅介護をしている人は忙しくて来られないことも多くあります。介護の経験がある方が多いので、相談相手になっています。

<助言者コメント>

- ・かたよせ会の活動は 21 年も続いており、素晴らしいです。課題としては、今、介護をされている方が参加できないということがありますが、うまくサービスを組み合わせて利用できるようにしていけばよいのではないのでしょうか。これからも地域で長く活動を続けられればと思います。



歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」の取り組み

社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム

鈴木 浩二

(歩行訓練 他職種連携 通所介護)

《1. 問題と目的》

平成21年3月に歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて9年目。登録数約80名、一日数メートル歩くことを目指す方も、数キロを目標に歩いている方もいれば、歩き方がテーマの方もいらっしゃいます。参加目的は登録者一人一人さまざまですが、歩行訓練が在宅生活にどのように役立っているのか・・・チームを作って取組み、「在宅生活サポートデイ」における歩行プログラムの可能性を考えました。

《2. 方法》

平成29年度の試みとして下記のテーマに添った訓練により在宅生活が継続できることを成果と仮定しました。

- ① 施設の大きさを活かした個別歩行訓練
- ② 作品作りプログラムを通じた利用者様の関わり
- ③ お買い物プログラムを通じた生活リハビリ訓練
- ④ 理学療法士という専門職を通じた個別訓練
- ⑤ リハビリのノウハウを近隣住民に提供する地域貢献

★対象者：歩行訓練目的別テーマより研究対象者として選定。

★取組みの手順：目的の設定・訓練実施と記録・成果確認

★取組み時間や期間：一回約20～30分、週1回～週4回（対象者により異なる）

★取組んだ職員数や構成

訓練は全職員（介護職11人 看護師1人 理学療法士2人）にて実施

効果検証はチームにて実施（チーム員：生活相談員2、介護職2、理学療法士2）

★活動の成果を出すポイントになった点

- ・歩行訓練継続の意欲向上施策
遊歩カード 定期的な表彰式実施 ホームページ活用

《3. 結果》

- ・事例1：娘の結婚式でヒールを履いて一緒に歩きたい。
⇒無事結婚式終了、転倒することなく結婚式に参加出来た。
- ・事例2：生活動作の中での歩行訓練の実施、PTとの関わり。
⇒1人で出来なかったお買い物が継続してできるようになった。
- ・事例3：平成29年度実施している日曜事業（介護予防体操の実施）
⇒初回開催した介護予防体操で地域の方との交流が出来た。

《4. 考察》

この取り組みにて活用した歩行訓練のテーマは、研究対象者においては概ね達成したと考えます。今後は比較的重度なご利用者様にも同じような展開が出来、事業所として在宅生活サポートデイという大きな目標に向かって取組んでまいります。

<質疑応答>

Q：事例2の方はなぜ、要介護3まで低下したのですか。

A：転落によるケガが原因です。現在では、リハビリのおかげもあり、自宅で一人でも入浴できるようになりました。

<助言者コメント>

- ・大きな建物の中にある廊下を利用した歩行訓練や日曜日にフロアを開放していることなど、これからもボランティア的な活動を求められると思う。ぜひ、続けていって欲しいです。



「介護」や「有料老人ホーム」についてもっと知っていただくために

－世田谷区内での取り組み－

三井住友海上ケアネット株式会社 介護付有料老人ホーム「ゆうらいふ世田谷」

代表発表：公益社団法人全国有料老人ホーム協会 稲田 順一

(有料老人ホーム 業界団体の社会貢献)

1. 問題と目的（はじめに）

高齢期をどこでどう暮らすかは、誰もが直面する問題となっています。国も自宅で暮らし続けられるよう「地域包括ケア」等の施策を実施していますが、様々な理由から最期まで自宅で暮らし続けることは難しく、65歳以上の要介護者の約3割の方々は、何らかの施設を利用して生活しています。にもかかわらず、高齢者向け住まいには様々なものがあり、ご自分ではどのような生活を送ればよいのか判断することが難しくなっています。公益社団法人全国有料老人ホーム協会（有老協）では、「有料老人ホーム」をもっと知っていただくべく活動を行っています。

今回は、協会が斡旋・実施した世田谷区内での取り組みについてご報告します。

2. 実施内容

①（社福）東京都社会福祉協議会から同協議会事業「平成29年度フクシを知ろう！なんでもセミナー」への講師派遣依頼について、有老協に相談があり、三井住友海上ケアネット株式会社 介護付有料老人ホーム「ゆうらいふ世田谷」をご紹介します。

7/10に都立世田谷総合高等学校にて高校2・3年生の「生活と福祉」選択者22名に対し「ゆうらいふ世田谷」介護部門責任者中山氏が講演を行い、ご好評をいただきました。

講演内容：高齢者施設について・「ゆうらいふ世田谷」での生活について

②有老協にて実施している講師派遣事業に、若林あんしんすこやかセンターから応募があり、7/19三茶しゃれなあどにて区民20名に対し、講演を行い、ご好評をいただきました。

講演内容：高齢者の住まいの種類と選び方のポイント

3. 結果・考察

ご参加いただいた方からは、おおむねご好評をいただいているが、ごく一部の方にご説明させていただいたに過ぎません。「介護」や「高齢期の住まい」については、「できるだけ関わりたくないもの」と敬遠され、実際に困ってから初めてバタバタと介護サービスや住まいを決定する例も散見され、様々な苦情につながっています。

4. その他

有老協では、「有料老人ホーム・高齢期の住まい」についてご理解をいただけるよう活動しています。老人クラブや町会などへの講師の派遣・一般消費者からの高齢期の住まいの個別相談なども承っております。講師派遣の依頼はもとより、「有料老人ホーム」に関する、ご相談・苦情等があれば、お気軽に有老協までご連絡ください。

公益社団法人全国有料老人ホーム協会 03-3548-1077

<質疑応答>

Q：首都圏と地方では高齢者の住まいに違いはありますか。

A：エリアでの違いより、民間のサービスなので、運営会社による違いのほうが大きい。ホームによって、規模や提供するサービスにも大きな違いがあります。

Q：単身者が増えていますが、保証人は、なぜ必要ですか。

A：保証人の役割として、債務保証はもちろんだが、もしもの時の医療的な判断が挙げられるため。

Q：(保証人がいない場合は) 今後増えると思いますが、保証人等がいない場合は入居できないのでしょうか。

A：対応はホームによって異なるが、いない場合は、ホームにご相談ください。保証人の役割をどのように担うかが課題。

Q：有料老人ホームは、高額なイメージですが、安くてよいホームはありますか。

A：人によって求めるものが異なるため、一概には言えない。高額なホームはそれなりのハードスペックがあり、人員配置も手厚いことが多い。希望エリアやご予算を伺えば、協会でも紹介させていただくことは可能。お気軽にご相談ください。

Q：「高齢者の住まいの選び方」について講師を呼びたいが、条件はありますか。

A：基本的なルールはあるが、予算や規模はかなり臨機応変に対応し、できる限りご要望にこたえたいと考えている。まずは、協会までご相談ください。

<助言者コメント>

- ・近年では様々な老人ホームが増加し、どれを紹介するかも重要になっています。人々が選びやすい工夫を今後していく必要があります。



デイホーム池尻の実践事例

社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻

発表者： 星有美、所順子、落合謙一

共同研究者： 中澤真美、金恩珠

(高齢福祉 通所デイ)

1. 目的

高齢者が、住み慣れた地域で安心して楽しみながら、生きがいのある生活を送るためにはどのような支援が必要なのか、様々な活動（外出、レクリエーション、地域交流、リハビリなど）を行っている通所サービスでの実践事例を通して考える。

2. 実践内容

①「デイホーム池尻 生きがい再発見！インタビュー」

利用前の通所目的から利用されていく中での心身の変化をご本人（家族）と一緒に振り返り評価。

②「生き生き健康プログラム！」

棒体操、ダンベル、パワーリハビリテーション、レクリエーション、地域・多世代交流、季節の外出行事、デイ万歩計チャレンジ等の様々なプログラムを活用。

3. 実践結果

インタビューに参加された方は、以前の自分と比較するきっかけとなり、通所目的にあわせてプラスの楽しみが増えたり、その方の生活が豊かになり生きがいつくりの意欲がもて、元気になったことを実感することができた。職員が一人一人の気持ちを尊重し寄り添うことで、信頼関係を築くことができた。利用者が体操やパワーリハビリ、万歩計に取り組むことで「以前より歩けるようになった」「入浴が楽にできるようになった」という身体的回復や「もっと歩けるようになりたい」「自信がついて外出が増えた」という意欲の向上がみられた。なかでもデイの万歩計チャレンジの数値を明確にし評価することで、これからの目標や自立に向けた気持ちを引き出す結果となった。

4. 今後の課題と考察

変化する心身状況の観察は日々のコミュニケーションが基本となる。一人一人の「個」を大切にしながら、心身状況を理解する。アセスメント評価によって定期的にプログラムの検討をすることが大切である。その方にとって必要な支援や意欲の引き出し方は職員の見抜く力も必要となる。ケアの質の向上を図りながら多様なニーズに応じ、元気な高齢者づくりを大切に地域に発信していくことが課題となる。

<質疑応答>

Q：地域のサービスはどのような取組みをしているのですか。

A：普段、自分の足で買い物に行くことが難しい地域住民の方をデイサービス送迎車の空き時間を活用し月1回、地域のボランティアと一緒に、お出かけサポートを行っています。

<助言者コメント>

- ・発足から16年が経ち、長年地域に根付いた活動をしていらっしゃるのので、これからも地域に密着した活動を続けてください。



地域共生のいえ「椎の木」と特別養護老人ホームとの7年間の活動報告

発表者 地域共生のいえ「椎の木」サポーター：小塚 秀忠
協力者 地域共生のいえ「椎の木」オーナー：谷本 晶子
(社会福祉法人 近隣大学 地域ボランティア)

1. 目的

一般社団法人 世田谷トラストまちづくり が支援する「地域共生のいえ」として活動している「椎の木」は、自宅に上北沢ホームの職員や実習生、利用者の方を数名お招きし、季節に合った小さなイベントでお迎えする活動をしてきた。月に1回の活動だが、7年間の活動記録ノートの整理と活動内容を多くの方々に知っていただくために、昨年度、「公益信託まちづくりファンド」の助成を受け、「椎の木の活動記録」と「椎の木の四季」という2種類の冊子を発刊することを目的とした。

2. 実践内容

オーナー、日本大学の教授と学生、サポーターが、季節に合ったイベントを考え、準備して、利用者の方と一緒に1時間ほどを過ごしている。「こいのぼり」「ちぎり絵」「七夕の短冊」「かき氷」「ところてん」「お月見」「干し柿」「クリスマス飾り」「双六」「雛人形」「お花見」などを実践してきた。7年間の「活動記録ノート」を付けてきた。ノートには、「記録写真」も添付している。「活動記録ノート」は、Wordで整理し、「椎の木の活動記録」という内部共有資料の冊子を作った。また、年間の活動記録として「椎の木の四季」という冊子を発刊した。これは、広く、多くの方々に見ていただき、活用を期待し、作成した。

3. 結果

「椎の木の活動記録」は、内部共有資料として、10部だけを作成した。

「椎の木の四季」は、300部を印刷した。類似の活動をされている方々の何かのヒントとなればと、各月のページに「豆知識」「今月の植物」「当日の様子」「感想」などを配し、多くの写真を用いて構成した。他の「地域共生のいえ」などに配布をし始めた。配布先では、好評を得ている。



4. 今後の課題と考察

今後の課題としては、オーナー、サポーターの高齢化である。いつまで活動を続けられるか、また、サポーターの若返りが図れる人材確保が可能かどうかである。

これまで、日本大学の「日大パレット」の学生が後輩へと引き継ぎながら続けてきた。今後の課題として、活動参加人数の安定と活動への意識を向上させることが求められる。認知症や施設の生活について日頃の学びを活かしながら意見交換をする場にあて、自ら学ぶ姿勢の中で、ボランティアについて意義を見出し、今後の活動を有意義なものにしたい。

<質疑応答>

Q：入所されている方がちょっとしたお出かけとして利用されているのですか。

A：そうです。1時間程度利用します。特養にずっと入っている方がいらしています。特養にいる時より、利用者の口数が増えていて、施設の方も知らない姿を見ることができます。

Q：距離感は。

A：とても近いです。学生ボランティアさんも近い距離でお話しています。

Q：学生の活動期間は。就活とかもあるのでは。

A：活動が月1回なので、学生の中で行ける人が予定を合わせて、常に人を絶やさないように調整しています。

Q：季節毎の活動とはどのような活動がありますか。

A：庭の柿の収穫や皮むきなどをしています。

代表、オーナー、学生と連絡を取り、どのような活動をするのか決めています。

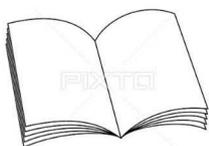
<助言者コメント>

- ・7年間活動されていますが、地域のサポーターの他に学生さんがボランティアをしており、とてもバランスがとれています。利用者の方も口数が増えていることで、そうした環境になっているのが良いです。地域のサポーターさんが高齢化されているということなので、社会福祉協議会が協力できるといいと思います。これからも活動を続けていってください。



世田谷区にある高齢者施設 お役立ちガイド

～世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケアマネジャー部会」からの発信～



世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケアマネジャー部会

グループホーム成城さくらそう 石井 琢也

(情報の発信 高齢者施設の活用)

1 世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケアマネジャー部会」とは

世田谷区内在住のケアマネジャー有資格者で構成する任意団体である「世田谷ケアマネジャー連絡会」の部会組織の一つです。施設ケアマネジャー部会では、世田谷区にある施設に勤務するケアマネジャー有志が月1回集まり、事例検討や研究、交流などを積み重ねています。

2 課題と目的

「年齢を重ねるうち、身の周りのことが自分では難しくなってきた」

「介護を頼める家族がない」

「介護が必要になっても安心して暮らしたい」・・・

このようなとき、自宅以外の暮らしの場所として、『施設』が選択肢のひとつとして浮かぶこともあるかと思います。

しかし、いざ『施設』といっても多くの種類があり、「何をどのように選んだらよいかかわからない」といった声を、よくお聞きします。また、苦勞して入所しても「こんな筈ではなかった」と途方に暮れる方々をお見受けします。

そこで、私たち施設ケアマネジャー部会では、区民や、その方々を支援するケアマネジャーなど、さまざまな立場の方々に、

(1) 世田谷区にある高齢者施設のことをお知らせしたい

(2) 入所を希望する方やその家族が、希望に合った施設を適切に選べるように、役に立ちたいという願いをこめて、このたび『せたがやの高齢者施設 お役立ちガイド』を作成しました。

3 方法 発信媒体としての「せたがやの高齢者施設 お役立ちガイド」

私たち施設ケアマネジャーは、入所者や入所希望者等からの相談に日々対応しています。

「せたがやの高齢者施設 お役立ちガイド」の作成にあたっては、その実践を生かして、施設を利用する人（利用したい人）の視点で、特に、次のページづくりに注力しました。

(1) 施設の種類は？ →費用と要介護度で分類した場合の高齢者施設体系のイメージ

(2) 施設に希望することは？ →施設への希望や条件等を書き出せるシート

(3) 施設の特徴は？ →申し込み方法や費用の目安などが、施設種別ごとにわかるページ

4 施設ケアマネジャー部会からの願い

高齢者施設を様々な目的で活用していただきながら、住み慣れた世田谷区で、いつまでも安心していきいき暮らしていただけることが、私たち施設ケアマネジャー部会の願いです。

このガイドをご覧になった方からの、率直なご意見などを、ぜひお聞かせください。

今後とも、ご指導ご支援よろしくお願いたします。

世田谷ケアマネジャー連絡会「施設ケアマネジャー部会」 担当：斉藤、森川

電話03-5450-3481 FAX03-5450-8919

<質疑応答>

Q：サービス付き高齢者向け住宅に対する、区民やケアマネジャーの理解が十分でないことが気になっています。特に、この住宅の中に全てのサービスがあるわけではないという理解を広げていく必要があると思いますが、この「せたがやの高齢者施設お役立ちガイド」を作成する上で重視したことは何ですか。

A：施設ケアマネジャー部会では、このガイド作成にあたり、高齢者施設について「どのような人が対象で」「どのようなサービスを受けることができるのか」「どのような手続きをすれば利用できるのか」「利用料金はどのくらいか」といったことを、できるだけ端的に伝えることに主眼を置きました。

サービス付き高齢者向け住宅についても、同様の内容で整理してみたほか、体系図などを作成し、視覚的にも確認しやすいように工夫しました。

<助言者コメント>

- ・老人ホームを選ぶ上での注意点など、シートを作っていたことで、相談者に見やすく分かりやすかったです。同じ職場で働くケアマネジャーにも薦めたいと思います。

* 「せたがやの高齢者施設 お役立ちガイド」を来場者のみなさまへ計 125 部配布した。



ノートとペンだけでできるモチベーションUP方法

マイナス現象を宝に変える。

あけぼのデイサービスまごころ館豪徳寺

坂本 晋二

(困難は宝の山 ストレス ノートとペン)

1. 問題と目的（はじめに）

研究目的 困難をどうやって宝に変えていくか。

私は介護業界に入って5年目になりますが、その中では、なかなか苦手な人には出会いませんでした。しかし、ある会社で、とうとう出会ってしまったのです。会社に行けばその人がいる。その状況を克服するために、ある社長から教わった「あらゆる出来事を宝に変える方法」を毎朝30分実践しました、すると、その人への苦手意識が消えました。

2. 方法（対象と手続き）

この方法は、なんととっても高額なお金は必要ありませんし、ノートとペンだけで実践できます。そして、朝に実行すれば、前向きな姿勢で1日を始めることができます。

朝の気分がすぐれない。自分で自分を奮い立たせたい。前向きに1日をスタートしたい。そんな方にお勧めです。

ノートを開き、左の上には事項をその下にはその関連の困ったことや、腹が立つことを書いていく。そして、右のページにはそのことを乗り越えたときに、どんな自分に出会えるか記入していき、さらにその右には具体的に行動を記入する。

3. 結果（経過）

結果として、嫌だと感じていた人の中に、その人の好きを発見することができるようになる。自分に都合が悪い（発酵と腐敗のようなもの）出来事の中にも宝を発見することができる。自分の中にある宝を発見することができる。

4. 考察

先月、ストレスが体内での死亡要因を誘発する、という記事が出たが、私たちは困難をストレス、と感ずることもできるし、成長の機会ともとらえることができる。この方法は気軽にできるので、繰り返し行うことで自分の成長を促進できる。是非トライしてみたいかだろうか。

<質疑応答>

Q：このモチベーションアップ方法はどこからアイデアを得たのですか。

A：知人から教えてもらいました。スポーツ選手にもやっている人が多く、そこからもヒントを得ました。

<助言者コメント>

- ・題名を見た時に、不思議に思い、興味を持ちました。1日をいかにポジティブに過ごすか、自分にとってマイナスなことが起きた時にポジティブなことを探すことで毎日を楽しく過ごせます。とても興味深かったです。



世田谷区介護職員合同入職式 実践報告

世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係
福永省吾、杖野公祐

(介護人材の確保 育成 定着支援)

1. 目的

新たに区内の介護保険サービス施設・事業所で働き始めた職員の方に、これからも仕事に対する誇りと意欲を持ち続け、施設・事業所を越えた仲間との交流を深めてもらうことを目的として、実施を行った。

2. 実践内容

(1) 日時：平成29年5月26日（金）13時～16時30分

(2) 会場：世田谷区民会館集会室

(3) プログラム：第1部・式典 1. 区長よりメッセージカードの授与
2. 先輩職員激励のことば
3. 新人職員誓いのことば
4. 記念撮影 など

第2部・記念講演（講師：NPO法人Ubdobe 理事 中浜 崇之 氏）

第3部・ワークショップ（兼交流会）

3. 結果

今年度より開始した本事業の参加者は40名であった。第1部の「先輩職員激励のことば」や第2部の「記念講演」では、これから働く方へのアドバイスや介護の仕事のやりがい、実体験に基づく内容を盛り込んでいただいた。参加者のアンケートでは、「介護へのおもいを新たにすることができた」「明日からの仕事への意識が変わりそうだ」等の声が寄せられた。

第3部の「ワークショップ（兼交流会）」では8人1グループになり、お菓子やジュースを飲みながら意見交換を行った。参加者同士が徐々に打ち解け合う姿も見られ、事業所の枠を越えた交流を図ることができた。参加者からは「他の職場の同期の人と話し、交流ができてよかった」「区長からの言葉やメッセージカードが嬉しかった」「これから世田谷区で頑張りたい」という声も聞こえ、参加者のモチベーションの向上と、交流に寄与することができた。

4. 今後の課題と考察

開催初年度、PR不足ということもあり、予想よりは少ない参加人数となった。「参加してよかった」「参加させてよかった」と言っていていただけるような内容を、次年度以降の開催に向け検討していく。3年以内の離職率が高いと言われている中、今後はフォローアップ研修を行う等、さらなる若手職員の定着支援の取り組みを検討していく。

<質疑応答>

Q：離職率 67.2%（介護職離職者のうちの入職3年以内離職率）をどのように改善していきますか。

A：様々な施策を展開する必要があると考えています。今回の合同入職式だけで離職率が改善するとは思っておりません。しかし、この合同入職式をきっかけに、事業所の垣根を越えて交流することで交友関係構築のきっかけをつくることにより、離職防止に寄与できればよいと考えています。

Q：参加した年齢層を教えてください。

A：20代の方が半数程度でしたが、10代の方や40代の方の参加もありました。

(参考) 10代…5% 20代…47% 30代…27% 40代…13% 50代…8%

Q：新卒の方にむけての入職式ですか。

A：新卒に限ってはならず、新任の方を対象としています。

<助言者コメント>

- ・介護士不足の現状だが、どのように改善していくか、関心を持ってもらえるか、今後のPR活動をこれからもがんばってください。



ポスター発表 第1会場 助言者



田邊 仁重（世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長）



辻本 きく夫（世田谷区介護サービスネットワーク）



中原 ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

ポスター発表 第2会場

助言者

宮崎 紘子（世田谷ボランティア協会ボランティア・市民活動推進部次長）

加藤 美枝（世田谷区老人問題研究会理事）

園田 巖（東京都市大学人間科学部児童学科講師）

	発表者	所属	テーマ
1	横井 美代子	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会	失語症カフェ ー失語症への理解と失語症会話パートナーの活動を広げたいー
2	三澤 正紀	世田谷区保護司会	「更生保護」って何だろう？ ー立ち直りを支え、犯罪を防止するー
3	古屋 敬子 梶原 裕美 三武 絢子	社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション	配食サービスから地域高齢者を見守るために
4	高堀 真紀子 橋本 沙耶華 富松 里佳子 峰村 貴央 堀 礼佳 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供 2017
5	瀧村 悦久 大岡 奈津子	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	認知症デイサービスにおける認知症ケアを考える
6	齊藤 友也 中村 美月 鈴木 麻由 峰村 貴央 中土 優佳 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	スマートライフプロジェクト～やめよう歩きたばこ
7	新城 睦月 佐藤 祐子 高橋 奈瑠海 宮路 茜 田邊 晴葵 峰村 貴央 野崎 竣也 鈴木 礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	健康を招き入れよう！豪徳寺ウォーキング！！
8	藤井 愛 木尾 直子	社会福祉法人福音寮 ぽっぽちゃんひろば	地域とつながり、育ち合う子育てーぽっぽちゃんひろばの活動を通してー

失語症カフェ

—— 失語症への理解と失語症会話パートナーの活動を広げたい ——

社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 横井美代子

(失語症 失語症会話パートナー 失語症カフェ)

1. 問題と目的（はじめに）

「失語症」は、脳卒中や脳外傷により脳の言語中枢が傷ついた時に発症する言語障害であり、高次脳機能障害の1つに数えられる。人間のコミュニケーション能力が奪われる重い障害だが、社会での認知度が低く、失語症者の社会復帰を阻んでいる。「失語症会話パートナー」は、失語症者のコミュニケーションを支援するボランティアとして、有志の言語聴覚士が2000年から養成を開始。世田谷区でも区が13年に亘り、120名余の失語症会話パートナーを養成した。失語症に対する認知度を高め、失語症会話パートナーの活動の幅を広げることが目的として、「失語症カフェ」を企画し、先日、5月26日に第1回を開催した。

2. 方法（対象と手続き）

「失語症カフェ」は、世田谷ボランティア協会・梅丘ボランティアビューローの事業として、平成29年度に3回（5月、9月、1月）開催することとした。第1回は、5月26日（金）午後1時半～3時半、梅丘ボランティアビューローの集会室にて開催。広報は、区広報板地域コーナーにチラシ掲示のほか、区民センターなどの施設でチラシ配布を行なった。さらに、世田谷区養成の失語症会話パートナーの任意団体である失語症会話パートナー世田谷連絡会（通称：世パネット）の協力を得て、失語症会話パートナーにも参加を呼び掛けた。また、有志の失語症会話パートナーが、区内の高次脳機能障害受け入れ施設12ヶ所にチラシ配布を直接依頼した。（失語症カフェ第2回は、9月22日（金）に開催予定。）

3. 結果（経過）

失語症カフェ第1回の参加者は、失語症会話パートナー14名、失語症当事者5名、当事者家族2名、デイサービス職員1名、高校生（言語聴覚士志望）1名と母親の、計24名であった。（失語症当事者のうち3名は、総合福祉センターで活動する失語症当事者の自主グループ「かぐやひめ」のメンバー。）リハビリ情報を求めて参加された失語症当事者のAさん、失語症当事者のご家族Bさん、失語症を知りたいと参加されたデイサービス職員のCさん、言語聴覚士を志望する高校生のDさんを囲んで、失語症会話パートナーがフランクな会話で情報提供を行い、第1回としては盛況な「カフェ」となった。

4. 考察（まとめと課題）

失語症カフェ第2回（9月22日）、第3回（1月12日）も第1回同様、多くの参加者を集めたい。さらに、「失語症カフェ」の試みが区内に広がることを期待している。

<質疑応答>

Q：失語症の患者の人数について教えてください。

A：失語症の方は、全国で50万人いると言われており、視覚障害者よりも多いと
のことです。失語症の方は、高齢の男性に多く、家族の助けがあれば何とか日
常生活が送れるため、他の人からはわかりにくい障害と言われています。

<助言者コメント>

- ・最近はじめた活動ということですね。今後の活躍を楽しみにしています。



「更生保護」って何だろう？
－立ち直りを支え、犯罪を防止する－

世田谷区保護司会 三澤 正紀

(世田谷区保護司会の取り組み)

1. 問題と目的

「更生保護」とは、犯罪や非行をした人が再び罪を犯すことのないよう、地域社会の中でその立ち直りに向け、指導や支援等を行うこと、犯罪や非行の再発を防止して安全・安心な地域社会をつくるための啓発を行うこと等を言い、更生保護法に基づく活動です。具体的には、保護観察、生活環境調整、犯罪予防活動等があります。私は保護司としてこれらの活動に関わっていますが、地域においては、「更生保護」について知っている人はまだまだ少ないのが現状です。今回の発表では上記の犯罪予防活動の例として“社会を明るくする運動”（以下、社明運動）について述べ、掲示するポスターには保護観察の概要などもご紹介し、来場者の皆さんに少しでも「更生保護」について理解して頂きたいと考えています。

2. 方法

毎年、強調月間である7月の上旬に全国的に実施される法務省主唱の“社明運動”の駅頭広報活動は、第67回となる本年も7月4日朝8時から三軒茶屋駅付近にて「～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～」をスローガンに約1時間行われました。当日は行政・警察署・東京保護観察所の方々を始め、私達世田谷区保護司会を含めた地域の40の団体・約120名によって啓発グッズを通行人に配布しながら、犯罪防止と安心・安全な地域社会をつくることへの協力を呼びかけました。

3. 結果

平成29年7月4日朝、通勤・通学の人々を始め多くの通行人が行き交う三軒茶屋駅地下のコンコースにおいて“社明運動”の駅頭広報活動が開始されました。この運動のシンボルとも言える「幸福の黄色いハンカチ」と更生ペンギンのホゴちゃんとサラちゃんをデザインにしたポスターが人々の目に留まる中、用意した啓発グッズ約4,000個も僅か30分ほどで通行人の方々が受け取って下さいました。地道な活動ですが、行動目標である“犯罪防止”と“犯罪や非行をした人たちの立ち直りを支える”を例年訴えることで地域の人々の関心や理解が少しずつ進んでいるのではと感じています。

4. 考察

犯罪や非行をした人たちは、地域で立ち直りをしていくことを考えれば、一人でも多くの地域の人々が更生保護について理解を深めて頂くことが重要であると考えます。加えて、昨年12月に成立した再犯防止等推進法では7月が再犯防止啓発月間と定められたこともあり、今後は“社明運動”についてさらに多くの方々に賛同・共感して頂き、活動の輪を拡げていけるよう働きかけが必要であると思っています。

<質疑応答>

Q：世田谷区保護司会の課題について教えてください。

A：保護司の充足率が低いことだと思います。保護司の高齢化も進んでいて、毎年定年（75歳）で約10人の方が辞められるのに、同人数以上の補充ができていないのが現状です。

Q：保護司になろうとしたきっかけや、やりがいについて教えてください。

A：社会福祉士の資格を有していたこともあって、更生保護の分野でも相談援助について関わってみたいという思いからまずは保護司にということで始めました。自分が支援をした仮釈放等の人たちが、地域で住まいを得て自立していくのを見届けることに喜びを感じます。過ちを犯した人は地域に戻ってきますが、周りから差別されることなく、ソーシャルインクルージョンの考え方のもと、本人が社会の中で居場所や仕事を得られるように支援をすることが重要と考えています。活動に当たっては、保護観察所等多くの機関との連携も必要であり、一人で抱え込まないようにしています。

<助言者コメント>

- ・元は法務省の管轄ですが、啓発活動をしているのですね。ソーシャルインクルージョンという言葉は、今や障害者分野だけでなく、地域でその人を包みこみ支えていくという意味で、すべての福祉分野で使われるようになっていきます。



配食サービスから地域高齢者を見守るために

社会福祉法人奉優会 等々力の家訪問介護ステーション
古屋敬子、梶原裕美、三武絢子

(関係機関との連携強化 地域生活支援 ボランティアの関わり)

1. 目的

地域高齢者との関わりとして配食事業は高齢者の地域生活の維持と継続を図る役割を持つ孤立予防も目的であり、人とのふれあいに重点を置いたボランティアによる関わりが配食に有効と考えた。認知症の利用者も増加している中、関係機関との連携強化もまた重要であり「関係機関との連携強化」を図ることを目的とした。

2. 実践内容

平成27年度4月より当法人で実施主体が世田谷区である配食事業を導入。

配達時の緊急対応の方法をマニュアル化し、不在時には不在票を入れ、事務所への連絡と、ケアマネジャー、地域包括支援センター、自治体など、関係機関に確認。

配食の現場では、人の介入を受け付けない利用者の場合もあり自治体や地域包括支援センターと一緒に検討し、配食から介護保険サービスの介入を開始することになった。配食サービスは、食事に関わるサービスであり介入方法として、利用者に対して精神的な負担が比較的軽いと考えた。地域包括支援センターでは、サービス導入のきっかけとして配食サービスを重要視している現状も確認できた。

3. 結果

高齢者において在宅生活の継続は、介護保険制度が提供するサービスだけではなく、生活の維持と継続を図る役割を持つサービスの一つとして「配食サービス」も重要であった。また、「関係機関との連携強化」「地域生活支援」「ボランティアの関わり」が必要であり、配食サービスとしてお弁当を配達する際に1番大切なことは、「まずは、利用者の変化に気づくこと」と考えた。

4. 今後の課題と考察

利用者の生活実態の把握とともに、適切に高齢期にある方々の生活保障が実現できるよう関係機関と連携強化が必要である。配食でのご利用者様との関わりは短時間だが、“モニタリング力の強化”が必要性であると考えられた。

<質疑応答>

Q：事例として紹介されていたA様の配食サービス利用について教えてください。

A：もともと配食サービスから関わり始めた方でした。A様は、ご自分で何でもできると考えていたために、福祉サービス利用を拒否していました。配食サービスで関わりはじめると、次第に家がゴミ屋敷状態であることや、引きこもりがちであることがわかりました。

Q：初期の課題がある状況から、どれくらいで良い方向へ向かいましたか。

A：早かったです。利用者から出てくる問題を次々につなげていきました。職員も早い支援が必要と考えて、支援をしていました。

<助言者コメント>

- ・変化に気づくことはささいなことですが、とても必要なことです。さりげなく、自然にかかわることで、利用者が抱えているニーズを発見しており、きめ細かい気遣いに感銘を受けました。



玉川ボランティアビューローでのバザーにおける軽食提供 2017

東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科

橋本 沙耶華、高堀 真紀子、富松 里佳子、堀 礼佳、峰村 貴央、鈴木 礼子

(ボランティア 軽食提供 ソーシャルキャピタル)

1. 目的

世田谷区の二子玉川にある「玉川ボランティアビューロー」で行われたバザーにおいて、軽食（おにぎり、豚汁、漬物）の提供を行った。この活動は昨年度に引き続き実施し、喫食された方々に「おいしい」と言ってもらえることが嬉しく、今年も活動を実施した。また、昨年度の経験や反省点を活かし、昨年度よりも満足してもらえるように工夫・改善をし、調理・提供を行った。

2. 実施内容

実施日：平成29年2月24日（金）・25日（土）

対象者：バザーを行っているボランティアの方々

実施者：東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科 学生4名、教員2名

提供内容：豚汁、おにぎり、漬物

豚汁は、昆布と鰹節でだしをとり、野菜や肉は食べやすい大きさに切って調理した。おにぎりは、梅干し、鮭、昆布、明太子の4種類の味を用意した。

3. 活動報告

バザーを行っているボランティアの方々に軽食の提供を行い、「温かくておいしい」「具がたくさん入っていてうれしい」「午後も頑張れる」など、声をかけてもらった。食事を通し、地域の方々と交流が持てる場であると実感した。また、学外の方に食事を提供する機会が少ないため、味だけでなく衛生面等、いつも以上に注意をはらい調理を行ったため、実践的な学びとなり良い経験になった。

4. 考察

今年で2回目の参加であったため、昨年よりも効率を考え行動し、時間の短縮につながった。時間短縮することにより、手作りならではの温かいおにぎりを提供できた。また、昨年は仕上がったおにぎりを配膳する段階で、隣同士のおにぎりがかっついてしまっていたが、今年は海苔の巻き方を工夫したため、喫食者にスムーズに提供することができた。

限られた場所、限られた道具で30名以上の食事を作ることは大変であるが、様々な工夫をできるようになり、環境が整っていない災害時などには役に立つと考えられる。バザーを通じた地域の方々の交流により、地域の発展につながると感じた。

<質疑応答>

Q：昨年の反省を今年に活かしたいと話されていましたが、具体的にはどんなことを改善したのですか。

A：昨年は、のりおにぎりを並べて置く際に、隣同士がくっついてしまったことや見た目があまり良くなかったので、今年は、のりをしっかり巻いたり、明太子をおにぎりの上に載せて見栄えをよくしました。

<助言者コメント>

- ・みなさんの取り組みは、ボランティアの方にとってリラックスできるほっとした時間になったのではないのでしょうか。若い人たちの力をボランティアとして貸してもらえることはうれしいことです。今後もぜひ活動을続けてください。



認知症デイサービスにおける認知症ケアを考える

社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿
瀧村悦久、大図奈津子

(認知症ケアの実践)

1. 目的

認知症高齢者が住み慣れた自宅で安心して暮らし続けられるように、「認知症対応型デイサービス」としてどのような支援ができるのか、ケアの内容を検討し質の向上を図ることを目的とした。

2. 実践内容

- ① 認知症の方の生活自立度、心身状況が低下しないように「役割」「仕事」をもってもらう。
- ② 見当識の維持を目的に「外出」「記録（アルバム）」を活用する。

3. 結果

- ① 「役割」についてデイに通所したときは、「テーブルを拭く」「お茶を配る」「食事の盛り付けを手伝う」というように利用者本人に依頼し、意識付けを行った事で、自分の居場所ができ、デイに来る事に対して「仕事をしに来る」というように変化した。
- ② 「外出」を楽しむだけでなく、季節を感じる、以前行った事のあるところを懐かしみ思い出す事が出来る。また、「記録」として写真を撮り、即日印刷して自分専用のアルバムに貼ることで「思い出す」ことができる。また、アルバムを作ることで家族にもデイでの様子を目で見てもらえる事ができ、安心感を得られる結果となった。

4. 今後の課題と考察

登録している利用者 40 数名のアセスメントと評価を定期的に行い、本人の持っている力をどのように生かしていくのか検討することが課題である。利用者一人一人の笑顔が少しでも増え、充実した気持ちを感じてもらえる事が認知症ケアには大切である。我々が行っている認知症ケアについて、もっともっと地域の方に周知していく必要がある。

<質疑応答>

Q：夕食を召し上がる方は、何時頃まで利用されるのですか。

A：18時頃までです。夕食は17時頃から始まり、お帰りの送迎は18時頃から開始します。

Q：お昼寝の時間はありますか。

A：ベッドがあるのでお昼寝はできますが、昼夜逆転をしてしまう可能性があるため、ご家族等からお昼寝をさせないようにしてほしいという要望もあります。

Q：利用者が減ってきている理由は何だと思えますか。

A：一般のデイサービスでも、認知症の高齢者を受け入れることが増えてきたからだと考えています。

<助言者コメント>

- ・とてもカラフルで良い発表でした。細かいサービスが魅力的ですね。



スマートライフプロジェクト～やめよう歩きたばこ

東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科

齊藤 友也、鈴木 麻由、中土 優佳、中村 美月、峰村 貴央、鈴木 礼子

(スマートライフプロジェクト 公衆栄養活動 禁煙)

1. 目的

世田谷区内の条例では、路上喫煙禁止がある。そこで私たちは、厚生労働省が推進する国民運動である「スマートライフプロジェクト」の考えを基に、世田谷区が強化している歩きたばこに視点を向けて活動を企画し実施をした。その中で、歩きたばこをする人や受動喫煙による被害を受ける人を少しでも減らすためにポスターを作成し、世田谷区の「路上喫煙禁止の条例」の認知度を高めると共に、上町周辺の喫煙者の行動変容を促すことを目的とした。

2. 実践内容

- (1) ポスター掲示：歩きたばこを防止啓発するポスターを作成し、東急世田谷線上町駅に掲示した。(平成29年6月23日～平成29年7月31日)
- (2) アンケート調査：東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科の3年生を対象に、ポスターを掲示する前と後、計2回のアンケート調査を実施した。

3. 結果

「東急世田谷線全駅にポスターを掲示してもらおう」という目標に対して、掲示できたのは上町駅のみだった。事前調査で「世田谷区内において歩きたばこが禁止されていることを知っている者の人数」は80人中、知っているが31人、知らないが49人という回答であった。

4. 考察と今後の課題

東急世田谷線全駅にポスターを掲示してもらえなかったのは、駅の掲示板には有料で貼っているものがあるため、上町駅の掲示のみになってしまったと考えられる。

事前アンケートでは、世田谷区で歩きたばこが禁止されていることを知らない学生が60%以上いたため、より認知度を高める活動をしていく必要がある。

今後の課題としては、2020年に東京オリンピックを控えているために禁煙・分煙の徹底をしないといけない。今回は、上町駅にポスターを貼り歩きたばこの禁止を促し、また、アンケートも学内の同学科3年生を対象として行った。今後、この活動を継続的に実施していくのであれば、東急世田谷線全駅だけではなく世田谷区や東京都など幅広く活動していく必要がある。また、アンケートについても同学科同学年を対象とするのではなく、幅広い世代や職種の人にもアンケートを行い啓発する必要がある。

<質疑応答>

Q：スマートライフという言葉について、もう少し聞かせてください。

A：国が健康寿命を伸ばすことを目標に、運動、食生活、禁煙などのテーマを設けて取り組んでいるものです。

Q：歩きたばこは多いのでしょうか。普段よく見かけますが、このような活動を今後も展開していきますか。

A：ポスター掲示をして啓発をしたりするのは、お金がかかかりますので難しい面もあります。

Q：アンケートはどのようにとったのでしょうか。

A：私たちの大学の学生が取りました。

Q：アンケートの結果は想定したものに比べていかがでしたか。

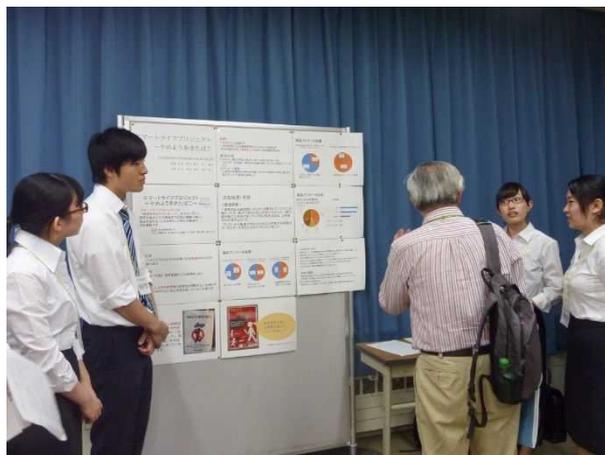
A：歩きたばこ禁止の周知率が低いことには驚きました。

Q：この取り組みを行うのに、何か強い動機づけがあったのですか。

A：喫煙所があるのに、なぜ歩きたばこをしてしまうのかという思いからです。

<助言者コメント>

- ・この取り組みは、周囲に与える影響がものすごく大きいですね。医療保健大学のように健康に関わる学科のある大学よりも一般の大学ならば、もっと周知率が低いアンケート結果だったかもしれませんね。
- ・広く漠然と呼びかけることはできますが、それだと言われた人もピンとこないものです。具体的に、具現化するために進めていくのは良いことです。そしてこの取り組みを次の段階につなげて行って欲しいです。
- ・若い方がこういった取り組み、啓発を行うことに価値があると思います。世代間の歩きたばこの意識の違いもあるでしょうね。



健康を招き入れよう！豪徳寺ウォーキング！！

東京医療保健大学 医療保健学部 医療栄養学科
新城 睦月、高橋 奈瑠海、田邊 晴葵、野崎 竣也
佐藤 祐子、宮路 茜、峰村 貴央、鈴木 礼子

(スマートライフプロジェクト 公衆栄養活動 運動)

1. 目的

健康寿命の延伸を長期目標として、毎日+10分の運動を習慣にしてもらうこと。また、参加者に今回歩いた途中にある世田谷城址公園や豪徳寺、商店街のお店を紹介して、地域活性化に繋げることを目的とした。

2. 実践内容

実施時期：2017年6月30日（金）18時15分～

実施方法：

(1) ウォーキングルートに記載したリーフレットの作成

(2) ウォーキング前に準備運動を行い、リーフレットを基に活動開始

(東京医療保健大学世田谷キャンパス→世田谷城址公園→豪徳寺→豪徳寺駅)

※ウォーキングの途中では、世田谷城址公園・豪徳寺についての土地の説明や建物が建てられた経緯などの説明を行った。豪徳寺での説明は、時間の関係上豪徳寺内へ入ることができなかつたため、写真を用いて説明を行った。

(3) 解散時にアンケートを配布し、一週間以内に回収した。

3. 結果

参加人数は目標(15人)の半分(8人)となった。また、所要時間はほぼ目標(30分)通りだった(35分)。ウォーキングを続けようと思った者の割合、リーフレットをわかりやすいと思った者の割合、所要時間が丁度良いと思った者の割合、満足度、に関してアンケートを行ったところ、いずれも100%であった。

4. 今後の課題と考察

企画立案当初は豪徳寺の敷地内に入って30分の見通しだったが、実施時間の都合上豪徳寺に入ることができなかつた。仮に入ることができても時間が30分を大幅に超えることが予想されるため、豪徳寺内の紹介を直接行う場合目的地の変更などが必要になると言える。また、参加人数が目標の半分とかなり少なくなつてしまった。参加者を増やす場合、他の団体と連携したり、宣伝を強化したりする必要がある。しかし顔馴染みの少人数で歩くことで満足度の向上につながつたとも考えられ、一概に参加者を多くする必要があるとはいえないと考えた。

<質疑応答>

Q：この発表は、地域の人とつながれる良い機会であったのではないのでしょうか。

A：はい。このつながりを大切にしたいと思います。

<助言者コメント>

- ・最後までとても盛り上がっていましたね。できれば、ここでのつながりを1本でも大切に、今後も継続したつながりを保ち、活動に活かしていただきたいです。



地域とつながり、育ち合う子育て
ーぽっぽちゃんひろばの活動を通してー

社会福祉法人ぽっぽちゃんひろば

藤井 愛

(社会福祉法人の社会貢献)

1. はじめに

地域に根差すひろば

福音寮の歴史は74年に渡ります。ここ10数年、地域の子育て支援事業を展開していくなかで、ひろばを通し「児童養護施設」への理解の深まりが出てきたのを実感しています。学童期児童の居場所作りの将来構想については、ぽっぽちゃんひろばのノウハウを生かしたいと考えております。いつでも帰れる場所であり続けることを目標と考えております。

2. 方法

ぽっぽちゃんひろばと地域の繋がり

平成15年からの児童の短期保護事業（ショートステイトワイライトステイ）の受託も世田谷区との顔の見える関係が深まったものと思っております。親子の一時休息の場である「ショートステイ」も子育ての心強い味方になっております。現在では保育園、学童クラブと事業も広まり、各事業で連携を取りつつ子育てを見守る支援が広がりつつあります。

3. 結果

以前、学生の頃や独身時代に福音寮で支援して下さった方々、児童養護の子どもの同級生も親になり、ぽっぽちゃんひろばで“子育て談義”に花を咲かせています。

9年前、開設当初のぽっぽちゃんひろばを支えて下さった親子の皆さんが今でも定期的に会い親交を深めていると伺いました。現在ではひろばを支えるボランティアやスタッフとして活動されています。おでかけひろば「ぽっぽちゃんひろば」の活動と福音寮を活用して頂きながら、ともに育ち合う関係が深まりつつあります。

4. 考察

福音寮のおでかけひろば「ぽっぽちゃんひろば」は9年目を迎え、多くの親子がひろばを巣立っていきました。

安全安心の場所で居続ける「おでかけひろば」は地域の拠点になりつつあります。子育ての多様なニーズに応えつつ、これからも子ども中心の支援者としてあり続けたいと思っております。

<質疑応答>

Q：問題を抱えている人（虐待・生活不安・養育不安など）が利用できない現状はありますか。

A：あります。とても難しい課題だと思っています。来所に繋げるにはこちらから積極的に出向くことに努め、まずはひろばを知って頂く事だと思っています。

Q：職員は子育てを終えた人がやっているのか。一日何組の来所がありますか。

A：子育て経験のある職員で運営しています。1日平均で20組程度です。

Q：児童養護施設のお子さん達は地域の方が来る環境に慣れましたか。

A：一見すると施設の子ども達に酷ではないかと思う方もいらっしゃると思いますが、敢えて施設内にひろばをつくることで、ひろばに来る親子を見て子どもたち自身の将来の姿にしてほしいという思いと、地域の方が施設に遊びに来ることで閉鎖的にならず開かれた施設になり相乗効果があると思っています。

Q：児童養護施設へ入所する原因として一番多いのは虐待ですか。

A：色々な事情を抱えて入所してきます。

Q：保育園との関わりはありますか。

A：保育園と出前保育や保育所体験などの繋がりをつくることで保育園を知ってもらうきっかけにしています。

<助言者コメント>

- ・手遅れになる前の予防としての活動をしている。閉鎖的になりがちな施設でひろばのような取り組み、運営ができていることが素晴らしい。これからも続けて行ってほしい。



ポスター発表 第2会場 助言者



宮崎 紘子（世田谷ボランティア協会ボランティア・市民活動推進部次長）



加藤 美枝（世田谷区老人問題研究会理事）



園田 巖（東京都市大学人間科学部児童学科講師）

口頭発表 第1分科会

進行役・助言者

村田 幸子（福祉ジャーナリスト）

中土 純子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教）

	発表者	所属	テーマ
1	柴田 佳代子 平田 眞智子	世田谷区老人問題研究会 ひこばえ広場たまごの家	ひこばえ広場「たまごの家」の実践から
2	山内 吉尚	社会福祉法人フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬	サービス導入が困難な方への関わり
3	石井 睦夫 小松 さやか	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	小規模多機能ホーム三宿の実践事例 ー在宅で高齢者を支えるにはー
4	保坂 和美	社会福祉法人世田谷区社会福祉 事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	食べることを忘れてしまった利用者様 への食事ケア
5	田野 和枝 松岡 美咲	社会福祉法人世田谷区社会福祉 事業団 デイ・ホーム弦巻	タクティールケアによる不安の軽減の 取り組み
6	常盤 迪臣 三島 祐香子	(株) ベネッセスタイルケア くらら用賀	センサーマットの見直しから 気づかされたその方を知る大切さ
7	日比 理恵 竹内 洋子	社会福祉法人世田谷区社会福祉 事業団 世田谷ホームヘルプサービス	在宅介護における本人、家族、介護スタ ッフのあきらめない経口摂取の取り組 み

ひこばえ広場「たまごの家」の実践から

発表者 たまごの家 柴田佳代子、平田眞智子

協力者 安部成子、佐藤明子

(多世代交流 高齢者力・子ども力 地域共生社会)

「たまごの家」とは

介護予防・日常生活支援総合事業の住民主体型地域デイサービスです。『高齢者の知恵と経験子どもたちに。子どもの活力を高齢者に』を目指した活動の中から「他人の孫も自分の孫も地域の孫」として子どもたちに優しいまなざしをそそぎ温かい言葉をかけていこうという素朴な想いから名づけられた。

「たまごの家」誕生の背景

世田谷区生涯大学・福祉文化コース修了後の自主活動として「ひこばえ広場」は区立世田谷保育園との交流を毎月続けて7年目になる。3年前には就園前の親子を対象に「子育ていきいきサロン」を立ち上げた。

昨年4月から区が新しく始めた総合事業へは、これまでの活動の主旨を生かし、子育て中の親子や小学生から大学生もふくめて皆が共生できる居場所が出来ないかと仲間と議論を重ね区担当課とも相談して立ち上げたものである。昨年6月オープンし、1年4か月が経った。

地域包括ケアシステムについて

高齢者が可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを、人生の最後まで続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が包括的に確保される体制であるが、本年5月「地域包括ケアシステムの強化のための介護保険法等の一部を改正する法律案」が成立した。縦割りや支え手受け手の関係を超えて地域共生社会を目指すことが明文化された。

たまごの家の活動の実際

毎週土曜日、手づくりランチをはさんで、健康体操・参加者の希望や持ち寄りによる多彩なプログラム（折り紙・パズル・草笛・三味線・唱歌など）。1年4か月69回の活動については当日に。

考察と課題

少子高齢社会の進行状況が日本のそれに近いドイツには、「集合住宅としての『多世代の家』」と「コミュニティ・センタ『多世代の家』」が設置されている。連邦政府は、2006年に5年間の第一期モデルプロジェクトを開始し2012年には第二期プロジェクトが始動した。その数は既に目標値の500施設に達している。社会の原点への回帰に繋がるものであるという考え方が、ドイツにおける2つの「多世代の家」への取組を支えているとのこと。日本でも縦割り行政により整ってきたともいえる諸施策ではあるが、長く分断され弊害を生んできた現実がある。地域共生社会への動きは富山の「このゆびと一まれ」（惣万佳代子代表）のような先駆的活動が少しずつ地域共生社会の形を創ってきている。そんな地域を増やしていくことが、「制度も政治も変えられる」という上野千鶴子氏の言う世代を超えてつながる豊かなコミュニティを築くことになるだろう。しかし実際には課題は多い。理想をかかげつつ日々の活動をつみ重ね形に残して共感者協働者を増やしていくことが課題といえようか。超高齢社会の1つのささやかな社会実験と考えている。

未来に向けての展望

厚生労働省 HP 地域包括ケアシステム構築へ向けた取組事例として、世田谷区が第1ページで紹介されている。区独自の取り組みとして、あんしんすこやかセンターの相談支援対象の拡充があげられ、「障害者や子育て家庭等からの身近な一時相談をお受けします」の一文がある。厚生労働省が公表した『地域共生社会』の実現に向けた第一歩であろう。たまごの家の活動はこの取り組みと共にある。

<質疑応答>

Q：参加者の費用はおいくらですか。

A：昼食を共にするので食事代として一人500円です。

Q：行政からの活動費の補助などがありますか。

A：区から、対象者10人まで1回8,500円です。ただし、対象者が天候や体調等の理由で一人も来ない日があり、その際は事前に準備していても活動費の補助は出ません。

Q：活動内容のプログラム準備は、どうされていますか。

A：基本は、対象者やボランティアの方々が、やりたいことや得意にされているものをみんなで楽しめるように準備しています。

Q：参加者の募集方法は何かですか。

A：あんしんすこやかセンターからの紹介が主ですが、ボランティアとして来た方が、その後あんしんすこやかセンターを通じ対象者になる場合もあります。

Q：介護保険を利用していない方は、参加されていますか。

A：ボランティアとして参加してもらおうようにしています。

Q：メンバーの方は、全員ボランティアですか。

A：区が決めたリーダー研修を終えたボランティアです。それに自由参加のボランティアも加わり、人数的に現在は、充足しています。

Q：本当に介護保険サービスを展開しているのですか。

A：要介護ではなく要支援認定者が対象ですが、介護予防の基本チェックリスト該当者も対象者になっています。

<助言者コメント>

- ・介護事業者だけでなく「たまごの家」のように、地域住民が主体となり、ボランティアが活動の中心となって活動をしているグループもあり、大変すばらしいと思いました。



サービス導入が困難な方への関わり

社会福祉法人フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬 山内 吉尚

(職員間の情報共有)

1. 研究の目的

アセスメントを丁寧に行い、利用者ニーズを取り入れた通所介護計画書の精度向上を目指す。

- ① 利用者を知る。
- ② 抵抗感がどこにあるのか。
- ③ チームケアによる情報の共有化

P D C Aサイクルに則り、チームケアで連携を図り取り組んで行く。

2. 研究の視点及び方法

通所意欲の低い利用者が、当事業所の通所に目的を見出せる様な関係性を築き、意欲的に通所を継続してもらいたい。

- ① 来所前のミーティングにて、職員間で現状を共通認識として情報の共有化を図る。
- ② 来所後、若い職員が常に利用者の傍に付き、利用者の話に傾聴する。
- ③ 利用者の情報にて、好まれるプログラムを作成し、無理なく参加できる環境を整える。

3. 現状から見た課題

通所に対する抵抗感がどこにあるのかを知る事が課題と考えた。

- ① 通所する必要性がわからない。
- ② 老化による判断能力の低下
- ③ 楽しくないと言う詮索
- ④ 社会における過去のプライド
- ⑤ デイホーム自体の存在を知らない。

4. 結果及び考察

① 利用者視点に立った支援

ご利用者が何を望まれているのかをアセスメントより導き出し、活動スケジュールを企画立案し、デイ・ホームに対する苦手意識をなくす事。

② 自立（自律）への支援プログラムの立案

A D Lの維持向上を図る為、活動スケジュール企画計画立案の際、興味をそそる様な企画を計画し、達成感を共有する事

③ 利用者へのサポート体制の確立

様々な支援や自立支援プログラムを実践しても、支援の一方通行とならない為にも、実施後の結果検証並びにプロセス管理を、ケアマネ・家族と情報共有し細かな変化に対応する。

<質疑応答>

Q：現状から見た課題は、どうやってわかりましたか。

A：ご利用者への聞き取りやアセスメントで発見しました。

Q：失敗した事例はありますか。

A：あります。例えば、見学して合わなかったり、年齢的に合わなかったりなど、様々な事例があります。

Q：契約をしたのちの失敗事例はありますか。

A：一日だけで来なくなった方や雰囲気が合わなかった方がいらっしゃいます。抵抗感をなくせるよう、今後も成功事例を増やす工夫をしていきます。

<助言者コメント>

- ・高齢者施設は、本人の介護が必要な状況になってから利用を開始する方が多いので、抵抗を無くすために地域のお祭りなどをおして、広く知ってもらおうと良いのではないのでしょうか。



小規模多機能ホーム三宿の実践事例

—在宅で高齢者を支えるには—

社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿

石井睦夫・小松さやか

共同研究者：河野由香・河合靖子

(小規模多機能 認知症介護)

1. 目的

認知症を患った方、一人暮らしの方、家族が日中仕事に行っている方など地域には様々な高齢者が住んでいます。本人、家族が地域で安心して生活するにはどんなサービスが必要なのか、「小規模多機能型居宅介護」というサービスの実践事例を通して、在宅での介護サービス支援を考える。

2. 実践内容

- (1) 小規模多機能ホーム三宿を利用している方の心身状況の変化を観察する。
- (2) 利用する前と比較してみて、どのような変化があったのか。提供した介護サービスの内容を振り返り、本人、家族と共に評価を行う。

3. 実践結果

- (1) 小規模多機能ホーム三宿を利用する前と後の生活について本人、家族と検証した結果、より自立度の高い生活が送られるようになった。認知症状が進行し、家族へ暴言、暴力が出現していたが、サービスを利用し、医療と連携を行うことで徐々に落ち着かれ、家族とも元の関係に戻っていった。その結果、在宅での生活を続けることに、希望が見えることとなった。
- (2) 実際に提供したサービスの内容とその変遷を評価し、その内容が本人、家族にどのような影響を与えることになったのかについて、「通い」「泊まり」をメインに支援を行ったが、家族の介護負担は「夜間の介護」ということが大きいのしかかっていた。「泊まり」を増やして、精神状況が安定するように主治医と常に連携を取り、家族が眠れる時間を作った。本人の険しい表情も眠れるようになったことで以前の本人に戻り、言葉も優しくなり、大きな変化があった。

4. 今後の課題と考察

小規模多機能型居宅介護という介護サービスがあまり周知されていない。デイサービスなどは地域の方でも理解されている。小規模多機能型居宅介護の特性をより知ってもらい、地域の方に安心した在宅生活を送ってもらいたい。「通い」「訪問」「泊まり」「相談」という複合的なサービスを一つの事業所で提供できるということは、認知症の方にとっても、そのご家族にとっても、有効なサービスである。通いなれた場所で、見慣れた職員が介護する、泊まることができる、自宅に訪問してくれる、ということのメリットの大きさをもっと我々はアピールしなければならない。また地域の認知症ケアの相談を受けられるように窓口を広げていく必要がある。

<質疑応答>

Q：小規模多機能ホーム三宿は、どのくらいの規模で、現在の利用人数は何名でしょうか。

A：施設の定員としては、登録定員が25名、通い定員が15名、宿泊定員が5名です。現在当施設は登録定員22名となっています。食事などその方の必要に応じてサービス提供をしています。こういった施設は、世田谷区内に少しずつ増えています。

Q：小規模多機能施設は素晴らしいことがわかりましたが、なぜ増えないのでしょうか。事業者側からの見解はありますか。

A：人間的なところ、環境的なところがあります。人間的な点は人手不足の問題、環境的な点は、家賃の高さの問題があります。また、施設利用料が他のサービスに比べると高いと感じる方が多い点も挙げられます。

Q：仕事にやりがいを感じる時はどんな時ですか。

A：自分自身の仕事のレベルアップを感じられたときです。今は、自分の親を自分が勤めている施設に入れてもいいと感じています。居宅のケアマネジャーと違い、小規模多機能のケアマネジャーは、目の前のスタッフと連携するので、様々な支援を一緒に取り組んでやってみようと思えます。

Q：リフレッシュの方法はありますか。

A：職員個々にあります。職場としては、情報を共有し連携が密にとれるようにしています。

Q：クリニックの上階に開設したのは、意図的な考えがあつてのことですか。

A：狙った意図はありません。たまたまです。

Q：ご利用者の使い勝手はいかがですか

A：特に問題は無いようです。クリニックに通っているご利用者も多数いらっしゃいます。

<助言者コメント>

- ・注目されている良い取り組みだと思います。利用者とスタッフが顔見知りの関係を作ることができるため、利用者が馴染みやすい良い環境を提供できると思います。現在求められているサービスのため、世田谷区内に増えることを願っています。



食べることを忘れてしまった利用者様への食事ケア

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム上北沢ホーム管理栄養士 保坂 和美

(栄養マネジメント 食事ケア)

1. 問題と目的（はじめに）

食べることを忘れてしまった利用者様Y氏の入所から逝去されるまで、多職種と連携した栄養マネジメントを通し、家族とコミュニケーションを取りながら、Y氏らしい食を尊重し「見る」「聴く」「触る」「味わう」「嗅ぐ」の5感を大切に食を楽しんでいただけるような支援を実践していくことを目的に取り組みました。

2. 方法（対象と手続き）

- ① 入所前情報（食事摂取量・BMI・体重変化・アルブミンA1b値・経管栄養や褥瘡の有無）や入所時の聞き取りにより、栄養状態のリスクを判定。初回「栄養ケア計画書」を作成し、計画内容の実施開始。
- ② リスク毎のモニタリング（低リスク：3ヶ月に1回、中リスク：1ヶ月に1回、高リスク：2週間に1回）の実施。Y氏は低リスクだったため、3ヶ月毎ですが、初回ケース会議までの間、ほぼ毎日モニタリングを実施。
- ③ 初回ケース会議の開催。食事摂取量が75%以下だったため、低リスクから中リスクへ変更となり、1ヶ月毎のモニタリングへ変更。どのようにしたら食べられるかを観察し、多職種と検討・実践・評価を繰り返し実施。
- ④ 3ヶ月後の見直しの実施。大幅な体重減少のため、中リスクから高リスクへ変更となり2週間毎のモニタリングへ変更。引き続き、観察・検討・実践・評価を繰り返し継続。

3. 結果（経過）

入所時の「食べることを忘れ、味もわからないようだ」「飲み物は比較的飲めた」「食事介助は拒否」等の情報から、多職種で食事時の観察・検討・実践・評価を繰り返し行い、Y氏の食行動や食べやすい環境や食の楽しみ方が見えてきた。次第に食事摂取量が増え、大幅に減少した体重も回復していった。声かけにより、食べ物への思いを聞き出すこともできた。家族の来所時に、日頃の様子についてこまめに伝えることで信頼関係を築き、退所時に感謝の言葉をいただいた。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

食事の楽しみ方や5感の感じ方は人それぞれであり、栄養マネジメントは栄養状態の維持や向上を目指すことを目的の1つとしていますが、利用者様ご本人にとって「食べること」がどのようなことなのかを理解し、見守り、寄り添い、接しながら、多職種協同でその方に合った支援方法を検討し、実践していくことが大切であると考えます。また、Y氏の事例を参考に他利用者様への支援に役立て、今後も利用者様が抱えるあらゆる食の問題について多職種協同で考え、取り組んでいきたいと思う。

<質疑応答>

Q：病院勤務だが、高齢者施設から誤嚥性肺炎で病院へ入院されるケースが多く、事例の利用者が誤嚥性肺炎にならなくて良かったと思うが、食事形態の工夫や誤嚥性肺炎の予防についてどのように取り組んでいますか。

A：事例の利用者は飲み物もトロミをつけずにそのまま飲める方で、最後まで誤嚥の危険のない方でした。咀嚼や飲み込みの状態、姿勢等、多職種で検討を行い、食事形態を決めていきますが、事例の利用者にも刻み食等、いろいろな形態を試しましたが固形物だと吐き出しが見られ、発表の内容通りになりました。誤嚥性肺炎の予防についても食事形態が合っているか多職種で検討したり、日頃の口腔ケアや歯科衛生士による頸部聴診法で飲み込む音を確認したりしています。

Q：医療従事者の関わりはどのようなものですか。また、食器の淵の色での視覚、スプーンではなく箸を使うなど残存機能や五感を活かすこと等、とても良い取り組みだと思った。実際に香りを楽しむ工夫はどのようにしていますか。

A：医師や看護師など医療従事者と多職種協働で利用者様へのケアに携わっています。香りについては、先日敬老会の際に松茸ご飯をお出ししたところ、食堂中に松茸の美味しい香りがして、経管栄養の方達もまるで味わっているようなとても良い表情だったこともあり、香りの効果はとても大きいものだと思います。五感を活かしたケアに取り組んでいます。

<助言者コメント>

- ・実際にケアに取り組む姿や情景が浮かぶような心のこもった発表でした。



タクティールケアによる不安の軽減の取り組み

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻
田野和枝・松岡美咲

(不安の軽減 安心感 信頼関係の構築)

1. 目的

デイ・ホーム弦巻では認知症コースがあり、その利用者を対象にタクティールケアを通して不安の軽減を図ることを目的とした。

2. 方法

認知症コースの利用者 A さん、B さんを対象にタクティールケアを実施する。タクティールケアは株式会社スウェーデン福祉研究所の登録商標であり、身体に触れることで人の手による心地よさを味わい、穏やかさ・安心感につなげるもので、当日の様子の記録と唾液アミラーゼモニターを使用した数値によるストレスの度合いの比較とする。

3. 結果

事例① A さん 97 歳・女性・要介護度 4・認知症からくる不安の訴え

実施前は不穏で表情が陰しく無口でお茶をお出ししても、「いい。」と飲まず。

実施後はリラックスされ、笑顔で「いつもありがとう。」と何度も言い、お茶を 2 杯飲まれる。

事例② B さん 63 歳・女性・若年性認知症・要介護度 3・不安からか表情が硬くなることが多く、一日の中で気分の波が大きい。

来所時から機嫌悪く表情も陰しい。雨の日で「ズボンが濡れちゃった。」と大声で訴える。

タクティールケア実施後は穏やかになり、過去に右膝半月板損傷したことを告白。

今まで知り得なかった情報を引き出すことができた。

4. 考察

タクティールケアは不穏な気持ち、不安を軽減し、安心感、信頼関係の構築につながることを実感。今後もタクティールケアを継続し利用者との信頼関係を深め、不安の軽減に努めたい。

<質疑応答>

- Q：マッサージで気持ちが和らぐことは職業柄理解していましたが、学術的には知りませんでした。研修などを行ったのでしょうか。
- A：日本スウェーデン福祉協会で2日間の研修を受講し、試験を受けて認定資格を取得しました。
- Q：マッサージの際、押すのではなく包み込むとの事でしたが、具体的にはどのように行うのでしょうか。
- A：両手のひらを密着させて全体的に優しくさすります。背中は10分程度、両手・両足は10分×2回行います。
- Q：ご利用者は、触られることを嫌がったりはしませんでしたか。
- A：タクティールケアは無理強いをしないで、声掛けをしてご本人の状況を確認してから行っています。具体的には、肩や手を触れてみた際の反応で、施術の可否を判断しています。また、ご利用者が落ち着けるよう静かな部屋で実施しています。拒否がある場合は、10分ごとに声掛けをして、様子を見ました。回を重ねていく毎に、施術を受け入れてくださるようになりました。
- Q：タクティールケアによる不安の軽減と、一般的なストレスの軽減の違いはなんのでしょうか。
- A：ツボ押しをするのではなく、体全体を優しくさする点で、違いがあります。安全性が高いです。また、手と足には無香料のオイルを使います。アロマとは違います。
- Q：タクティールケアを選んだ理由はなんのでしょうか。
- A：上司からの勧めもあり、導入しました。
- Q：タクティールケアに、性差はありますか。
- A：特にありません。



センサーマットの見直しから 気づかされたその方を知る大切さ

株式会社ベネッセスタイルケア くらら用賀 常盤 迪臣
株式会社ベネッセスタイルケア くらら用賀 三島 祐香子

(施設ケア 認知症ケア 介護スタッフ)

1. 背景と目的

くらら用賀では、転倒リスクを回避するために、全50名のご入居者のうち19名ものご入居者の居室にセンサーマットを導入していた。そのため、常にセンサーマットのコールが重なり、スタッフはその対応に追われていた。転倒事故が起これば転倒事故を発見した介護職員が自分を責めてしまう状況であり、ご入居者の「その方らしさ」のサポートには至っていなかった。このような状況を打開するため、センサーマット設置の見直しを実施した。

2. 方法

センサーマット導入の背景や、センサー反応時のご本人の反応・声、ご家族の意向、センサーマットの使用状況等を記入する「センサーマットの見直しシート」をご入居者ごとに作成し、課題や次にすべきことを検討していった。

3. 結果

「センサーマットの見直しシート」をもとにスタッフで検討を重ね、コールが鳴ることに不安を感じている方や、現在はセンサーが必要ないと考えられる方から、状況に応じてセンサーマットを外すことにした。外した分、ナースコールを使うようお願いしたり、その方の排泄パターンを細かく把握するようになった。その結果、ナースコールを使って自ら用件を伝えることが増加したり、排泄パターンに合わせた先回りの排泄介助により、夜間のトイレによる覚醒が減少するなどの変化が見られた。また、「スパイが来る」といった被害妄想も減少した。これらの変化は、夜間の良眠と日中の覚醒状態の向上、アクティビティの参加などによる活動量の増加に繋がった。

スタッフもご入居者について「この方は〇〇ができない」といった思い込みを払拭し、ご入居者のできることを再考し、ご入居者の立場で行動の意味を考えるようになった。現在は、センサーマットは8名分にまで減少し、スタッフの精神的・身体的な負担が軽減するとともに、ご入居者がご自分でできることをする機会が増えた。

4. 考察

どのように活用していくかのイメージを持たないまま、転倒リスクを回避するとうい理由のみでセンサーマットを導入することは、現場の混乱を招き、効果も出にくい。そのため、導入の際は、ご入居者を深くアセスメントし、どのような使い方をすることがもっとも「その方らしさ」をサポートしていけるのかを検討することが重要と考える。

<質疑応答>

Q：センサーマットを使うと軽い身体拘束となるというのは、施設の方針としての認識でしょうか。

A：会社の方針としてそのように取り扱っています。その方の人となりを知り、対応していくことが重要と考えているためです。

Q：有料老人ホームは民間企業であるため、企業間の壁があり連携が難しく、効果的な良い取り組みについての情報共有がほとんどないと思われます。そういった取り組みを共有し介護の質を上げるために、学会などを設立してはどうでしょうか。

A：会社に提案してみます。

Q：今回の取り組みについての発表は、何がきっかけで決まったのでしょうか。

A：会社全体として推奨されており、自分たちのスキルアップの為にも参加しました。

Q：ご利用者の転倒については、注意を払っているのでしょうか。

A：当然、注意を払っていますが、中には骨折をして手術をする方がいます。ご家族の判断で、家にも転倒するからと割り切って入居される方はいます。転倒を心配し入居を断念する方もいます。ご家族によって考え方が違うため、思いを確認した結果、センサーマットを導入することもあります。

Q：自分たちで転倒を予防しようとしている家族への対応はどうされていますか。

A：何回も転倒される方もいます。理学療法士とも相談して、マット導入を判断します。

<助言者コメント>

- ・センサーマットを初めて知りました。会社的には身体拘束の対象となるそうですが、人が来ることにより行動拘束につながることを考えると、民間でこの事に気づいて実践に取り入れているのは、素晴らしいと思いました。



在宅介護における本人、家族、介護スタッフのあきらめない経口摂取の取り組み

社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス
日比 理恵、竹内 洋子

(在宅介護 経口摂取)

1. 取り組みのきっかけ

在宅で介護を受けているA氏(90代後半 女性 要介護度5 病歴なし)の食事が徐々に減り、家族は、食事をやわらかく煮たり、栄養補助食品やトロミ剤を使ったりして介護していた。ところが体調不良をきっかけに、食事や水分が摂れなくなった。医師からは胃ろうの提案があった。家族は「胃ろうはしたくない。口からなんとか食べさせたい。でも本人が食べないのであれば、体が要求していないのだから、自然に任せたい。もう終わりかな。でもできることはしたい。」と話された。あきらめそうになりながらも、熱心に介護をしている家族の姿を見て、ヘルパーと管理栄養士で、何かできることはないかと考え、体力の維持・回復を目標に、口から食べる方法を探った。

2. 具体的な取り組みの内容

- ① 平成27年11月 食事・水分摂取量が激減。
⇒寒天を使用し、お茶、経口補水、経腸栄養剤をゆるく固形化。(寒天の量は規定の1/3) 取り組み後、数週間で再び、家族と同じ食事が摂れるようになった。
- ② 平成28年9月 食事・水分摂取量が再び激減。医師から胃ろうの提案と、歯科医師から義歯をはずすよう指示があった。
⇒ゲル化剤を使用し、経口補水、経腸栄養剤をゲル化。食事もゲル化剤を使用することにより徐々に摂取できるようになった。

3. 結果

身体的変化：食事摂取の方法が、ベッドから車椅子上になった。口の開き方が大きく、口の動きが活発になった。

体重の変化：2.2kg増加(平成28年9月から7か月間)

意欲の変化：閉眼して食べていたが、しっかり目を開け、声掛けしなくても自ら口を開けて食べられるようになった。「ふかしいもが食べたい」と話されたり、スプーンを持って食べたり、歌を歌う姿も見られるようになった。

家族の変化：食事介助に1時間がかかっていたが、食事量が増え、30分ほどで食べられるようになったことで家族の介護負担が減った。

4. 課題と考察

在宅介護では施設介護に比べ、食に関する情報が少なく、家族は「どのように食べさせたら良いか」と不安に思いながら介護している。当事業所では、訪問看護師やヘルパーが、管理栄養士に、利用者の食に関する相談をして、毎日の看護や介護に役立てている。今回は、普段の様子をよく知るヘルパーと、管理栄養士が連携して、家族の「口から食べさせたい」という思いを支えることができた。今後、在宅分野で、利用者一人一人の「このように生きたい」、家族の「このように介護したい」という思いを支えるために、管理栄養士への相談がしやすくなるような介護保険制度への発展を期待したい。

<質疑応答>

Q：ゲル化剤は誰でも手に入れる事は出来ますか。

A：現在ドラッグストア等では販売されていませんが、管理栄養士や看護師等の指導のもとで病院等にある治療食のカタログやインターネット通販で購入できます。

Q：価格はトロミ剤と比べてどうですか。

A：トロミ剤の方が安いのですが、用途が異なります。トロミ剤は液体に粘度をつける用途であるのに対し、ゲル化剤は液体を固形化したり常食に混ぜたりすることで、食塊形成がしやすく適度なすべりが出て飲み込みやすくなり、どんな食品にも使うことが出来ます。在宅では食品によって使用する添加物が違うと負担になるため、価格だけではなく使いやすさも大切だと思います。

Q：専門的な知識はどのように得ればよいでしょうか。

A：当事業団では管理栄養士が「食と栄養」の研修を行い、情報を発信していますが、学会や展示会等、また施設の栄養士からも得られると思います。

Q：世田谷区内で、在宅介護に関わる栄養士は多いのですか。

A：非常に少なく、居宅療養管理指導など特定の疾病に対して医師の指示に基づいて訪問指導をしています。「食」は在宅においても重要な要素で、また、食べられないことにより低栄養に陥るケースが多いので、予防という視点でも、多くの栄養士が在宅で活躍できる制度を期待します。

<助言者コメント>

- ・専門知識を持った栄養士等が、講習会で介護関係職員に知識を広めていき、ケアの質を上げることができるようになると良いと思います。



口頭発表 第1分科会 進行役・助言者



村田 幸子（福祉ジャーナリスト）



中土 純子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教）

口頭発表 第2分科会

進行役・助言者

今井 康明（株式会社すずらん代表取締役）

吉田 光爾（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

	発表者	所属	テーマ
1	渡邊 久子	社会福祉法人フレンズ奉仕団 特別養護老人ホームフレンズホ ーム生活介護課	介護施設を特別な場所にしない「自立支 援研修センター」の取り組み
2	中谷 紘子 笠原 俊介 伊藤 梢	特別養護老人ホーム 久我山園 ボランティア・久我山園職員	利用者の気持ちに寄り添ったボランテ ィア活動をめざして
3	三浦 凌 阿部 裕香	医療法人社団はなまる会 グループホームももちゃん	ももちゃんにおける若年性認知症と は？
4	高本 美紀	一般社団法人はびなす こどもデイウイズ	重症心身障害児と、こどもデイウイズの 活動紹介 ー愛と希望のある未来のためにー
5	加藤 さくら	NPO 法人 Ubdobe(ウブドベ)	踊るだけでなく学べるイベント “SOCiAL FUNK!”
6	番本 鷹也	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	入所前の生活環境を知ることで見えて きたこと
7	鈴木 清之 西尾 佳子 鬼塚 正徳 吉田 周平	けやき学級 世田谷区教育委員会事務局生涯 学習・地域学校連携課	けやき学級の障がいのあるメンバーと 仲間たちの活動 ー障がいのあるメンバーを中心にして、 ともに学び、遊び、ともに生きる仲間を 創るー

介護施設を特別な場所にしない
「自立支援研修センター」の取り組み

社会福祉法人 日本フレンズ奉仕団 フレンズホーム
生活介護課 渡邊 久子
生活介護課 池澤 梓
(自立支援)

1. 活動の目的

フレンズ世田谷センターでは今年度より、施設長の発案であらゆる角度から入居者の自立を支援していく、又近隣の高齢者にも生きがい、やりがいを持っていただける活動を目指し「自立支援研修センター」を立ち上げました。

2. 実践内容

初年度の大きな目標は、地域の方々にも開放できる浴室改修です。機械浴のある浴室を改修し、個浴のみとします。ホームの入居者にも特別な浴槽ではなく、普通のお風呂に入って頂きます。完成までに安心して安楽な入浴ができるよう他施設での研修も行っています。浴室が空いている時間帯には地域の方々にも気軽に入浴して頂ける工夫をしていきます。職員の介護技術にも注目し、介護技術検定をケアセンターの職員にも実施し、過介護をせず、少しでも自力でできる事を増やす介護を目指しています。基本的な介助方法を見直すために、基本的介助のビデオを使用し、新人の他、介助に問題のある職員を教育していきます。

3. 結果

浴室の改修は現在進行中で完成は11月になります。浴槽は個浴3槽と下肢の関節が動かせない利用者にも入れる縦長の個浴を用意します。脱衣所の他に入浴休憩室を作り、ゆったりと過ごして頂き、近隣の方にも利用しやすい環境にしていきます。4階に研修室を作り、ビデオ研修終了後に、主任、副主任のアドバイスを受け、自立支援を鑑みた介助を心掛けるよう指導しています。全介助の利用者に対しては、リフト等は導入せず職員全員にスライドシートを使用させ、お互い安楽な方法で腰痛の軽減を図っています。

4. 考察

ディサービスの職員はマナーの点では申し分がありませんが、介護技術の面では未熟な職員が多く、障害によっては危険な場面も見られました。特養職員は入居者に対して慣れの介助が見られ、待つ姿勢がなく過介護がほぼ全員にありました。今後も介護技術検定とビデオ研修を続けていき、施設全体の介護の質を上げていく事が目標です。介護施設だからリフトや機械浴があって当たり前ではなく、工夫や技術力で利用者が安心して生活できる場所を提供していき、日々の生活の中で、「お風呂に入れられる」のではなく、以前に銭湯に入っていたように入浴後は誰かとおしゃべりをし、アイスやジュースを飲むなど、普通の生活が出来るよう支援していくことを目指しています。

今後も従来型特養の利点を活かして、集団で楽しめる事を探し、集団生活でも個別対応できる事を増やし、利用者の自立支援をしていきます。

<質疑応答>

Q：施設の浴室を地域に開放することは新しい試みだと思いましたが、銭湯のような形で開放するのでしょうか。

A：配食等で地域のボランティアの方にお世話になっているので、その方を対象に恩返しのつもりで開放する日をつくりたいと思っています。

Q：地域の方に入浴設備を開放するに当たり、職員間で議論があったと思いますがどのようなものがありましたか。

A：特に職員からの反対は無かったです。入浴委員会も研修に行き、完成を楽しみにしている状態です。



利用者の気持ちに寄り添ったボランティア活動をめざして

社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム 久我山園

ボランティア 中谷 紘子

介護職員 笠原 俊介

伊藤 梢

(一期一会 日常から切り取った時間)

I 利用者とボランティアの実態

1. 久我山園でのボランティア講師による自由参加型のアクティビティ活動への参加利用者の割合は平均6、7割に及ぶ。(但し、複数の活動に参加している人もかなりいる)
2. 活動を提供しているボランティアは個人活動8人、団体活動4団体ある。参加年齢層は70代が多い。概して月2回担当、時間は約1～2時間程度。
3. 今年度の週間ボランティア活動の内容、担当一覧を表にした。(パワーポイントにて表示)

II 発表者の実践報告

1. 名称：「歌とお話しの会」 平均参加者：約30人
2. 構成：①季節の歌 ②世の中のビッグニュース ③紙芝居(ユーモアのある内容) ④歌(浦島太郎などストーリー性のあるもの) ⑤終わりに「青い山脈」「ふるさと」を合唱。
3. 活動にあたって心がけていること
日常から切り取った時間に、一回勝負という気持ちで利用者に向き合っている。

III まとめと今後に向けて

1. 昨年から今年にかけて、「ボランティア意見交換会」を2回開催している。それらによって各々の活動に向ける意欲、利用者への働きかけ方、題材の選定法を知ることができ、共通理解が深まった。
2. ボランティアと利用者の年齢が比較的近いことで、相互に親近感が生まれている。
3. 毎回、利用者に喜びを与えられたらと思い活動を始めるが、終わる頃には逆に、利用者から喜びや癒しをもらっていることに気付く。
4. 一回の活動を通して、利用者の表情が明るくなり、笑いもこぼれ、終わりには拍手を頂くこともあり、やりがいを感じる。
5. 可能な限り工夫をしてより充実した1時間をめざして活動を続けたい。ボランティアをやってみたいが渋っている方々が居られる。「一期一会」の気持ちを持って思い切って飛び込み、まず始めてみませんか。

<質疑応答>

Q：実践報告にある2. 構成のうち、㊦歌（浦島太郎などストーリー性のあるもの）を用意されているそうですが、歌詞カード等を用意しているのでしょうか。

A：歌詞を先読みしています。先読みすることで、参加者が歌うことができます。

<助言者コメント>

- ・発表をととても楽しみにしていました。素晴らしい活動だと思いました。



ももちゃんにおける若年性認知症とは？

医療法人社団はなまる会 グループホームももちゃん
三浦 凌、阿部 裕香

(若年性認知症 心のケア 役割)

1. 目的

「若年性認知症とは？」「高齢者と違ったケアはあるのか？」など、身近にいなながらもあまり知られていない若年性認知症の事を1人の入居者を通じて学んできました。

2. 内容

入居から逝去されるまでの間に行ってきたケアやその方の心情など。

3. 結果と課題

高齢者と違い、体力もあり、進行していくと共に心のケアがとても大切になっていました。「役割」を持つことで、その方が救われる部分も沢山あっただろうと考えます。しかし、限られた時間の中で、行えるケアが限られてしまう事が課題となっています。

<質疑応答>

Q：ご家族への支援は、どのような事をされましたか。

A：グループホームに来所された際に、現在の状態や今後について話し合い、不安を和らげるように努めました。また、ホームのイベントや家族会にお誘いし、楽しみを持っていただけるように配慮しました。



重症心身障害児と、こどもデイウイズの活動紹介
—愛と希望のある未来のために—

一般社団法人はぴなす こどもデイウイズ
高本 美紀

(重症心身障害児 医療的ケア 日常生活)

1. 問題と目的（はじめに）

私たちは、世田谷区喜多見で、医療的ケアを伴う重症心身障害児の通所事業を行っています。しかし、これだけの説明では、誰のために何をしている事業所なのかが一般的には伝わりません。それは、日常の中で知的障害や肢体不自由のお子さんを目にする機会があっても、重症心身障害児に出会う機会がほとんどないからではないでしょうか。

そこで、こどもデイウイズの活動紹介を通じて、より多くの方に重症心身障害児の日常や、可愛らしさを知っていただく機会になればと思い、発表させていただきます。

2. 方法（対象と手続き）

医療的ケアを伴う重症心身障害児とは、日常生活に不可欠な生活援助行為として、痰の吸引、経管栄養、導尿、酸素、人工呼吸器などが必要な、重度の知的障害及び重度の肢体不自由が重複している児童と定義されています。

ういずに通所しているお子さんは全員広い意味で重症心身障害児であり、ほとんどが何らかの医療的ケアを必要としています。しかし、お子さんたちを概ね片道30分の範囲で送迎し、ご家族の付き添いなく通所しています。未就学のお子さんは成長・発達・社会性、就学後のお子さんはコミュニケーション・好きな事の追求をベースに、日本人の文化や季節を感じることも大切にしながら活動をしています。

3. 結果（経過）

未就学のお子さんは特に、NICUから在宅へ移行し、初めての社会がういずであることが多く、通所を開始してからの発達はとても大きいです。こちらの働きかけひとつでいかようにも広がる可能性を秘めていると感じるため、その責務を重く受け止めています。

また、通所の時間は保護者もお子さんと離れた時間を持つため、兄弟児との時間や休息、その他の用事に充てることのできることも重要な役割だと思っています。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

私達は、どんなに障害が重くても、住み慣れた地域で家族と共に当たり前の生活を送ることができる支援を目的に活動をしています。それは、子供のうちのことに留まったことではありません。お子さん達が、子供のうちに培ったことをベースにして、社会に出た時、自分らしさを大いに発揮し、社会貢献していける仕組みや繋がりを世田谷で作ること、を見据えています。お子さんたちが世田谷の地域の方と毎日心を通わせて会話し、気軽にどこへでも出かけられる、当たり前だけど希望に満ちた未来を見えています。

<質疑応答>

Q：こどもデイういずを立ち上げたきっかけは、何だったのでしょうか。

A：当時の世田谷区内には、放課後に重症心身障害児が通える施設が無く、そういったお子さんがいる親御さんからのニーズが強かったからです。

Q：高本さん自身は、前職は何をされていらっしゃったのでしょうか。

A：訪問看護の看護師をしていました。当時、重症心身障害者の方を担当しており子ども時代のケアが、成人した後につながることを知りました。

Q：現在の利用者数は何名ですか。

A：現在は34名のお子さんが通っています。待機児が6名います。子ども達の半数は、未就学児です。

Q：施設では現在、どんな職種の方が働いていらっしゃいますか。

A：看護師、保育士、介護福祉士、セラピスト、ヘルパーです。

<助言者コメント>

- ・ケアは大変ですが、丁寧な心遣いをされています。世田谷で初めての試みなのですね。今後、このようなサービスを広げていくために、区民の方にどうして欲しいか、どのように行動してほしいかという事を伝えていただきたい。ニーズを発見し、事業を行う事は、地域福祉の発展につながります。今後のご活躍に期待します。



踊るだけでなく学べるイベント “SOCIAL FUNK!”

NPO 法人 Ubdobe 加藤さくら

(医療福祉 エンターテインメント 知るきっかけ)

1. 目的：「知る、きっかけづくり」

医療福祉に関する情報をいざ自身や家族・近しい人の介護、事故や病気になったときに知るのではなく、日頃から身近に感じ・知る機会をもち、相談できる繋がりをもつことで、直面したときに正しい知識で判断ができる。それが人の命の長さや生活の質に関わる可能性がある。特に医療福祉を縁遠いと感じている人たちに対して「きっかけづくり」をするために、エンターテインメントの力を借り、普段から親しみのあるアートや音楽を入り口に、トークや出展ブースによる情報・知識・つながりを得られる場をつくります。

2. 実践内容：開催年・テーマ・会場（渋谷 club asia 各回 200名）

2010年『Know(≠no) more cancer』 2013年『Insideout～福祉の裏表～』

2014年『Future Fukushi』 2015年『Organ Donor（臓器移植）』

3. 結果：アンケート結果・感想

『医療福祉に対するイメージが変わった』 YES:90% NO:10%

※NOの回答者はもともと悪いイメージがないと回答

- ・「福祉の知らない世界を知ることが出来、視野が広がった。次回も参加したい。」
- ・「楽しかった。帰ったら両親と身体のことについて話そうと思う。」

4. 今後の課題と考察

これまでは音楽やアート、トークを観るなど受動的な内容だったが、今後は五感を使った体感・体験ワークショップを増やし、自分ゴトとして捉え自発的な気づきができるコンテンツを増やしていきたい。また、会場のキャパシティの問題や限定されたスペースで開催など限られた方にしか発信できていなかった。より“気軽さ”を追求し、ふらっと立ち寄れる感覚を演出するために街全体を使って開催するなどムーブメントを起こしていきたい。そして、多くの「医療福祉が縁遠い」と感じる方を対象にきっかけをつくることをしていくため、現代で関心が高いテクノロジーやデジタルなどの新たな切り口を加えて、参加者の窓口を拡げていきたい。

<質疑応答>

Q：イベントの参加者は、どのようにイベントを知るのでしょうか。

A：イベントの告知を Facebook などの SNS でしています。また、音楽好きの方たちは好きなアーティストを目当てに参加されます。医療・福祉従事者は「こんな新しい取り組みがある」という話題からイベントを知って頂くこともあります。

Q：参加者同士のつながりはあるのでしょうか。

A：以前は支部の制度をとっており、全国 10 支部の組織で活動していました。どの支部も「次にこんなことがしたい」という思いがきっかけで自発的に立ち上がった経緯があります。現在はより自由度を持って活動してもらうため、支部制度ではなく自主性に任せたコミュニティを作ってもらっています。

Q：当事者、家族の声はどのようなものが聞かれますか。

A：医療福祉のイメージを変えたい、医療福祉の業界をより良くしたい、ウブドベなら変えられるのではないかというお声をいただいています。

Q：イベントの参加料金は、おいくらですか。

A：イベントの参加料金はチケット制で、前売り券 3,000 円、当日券 3,500 円です。

<助言者コメント>

- ・新しい切り口での取り組みであり、医療・福祉の敷居を低くしてくれる素晴らしい活動だと思います。イベントがきっかけで知識や経験のない方が、医療・福祉の新しい世界を知り関心を深めてもらったり、特別な事ではなく身近なことだと感じてもらうことが大切なのだと思います。今後のご活躍を期待しています。



入所前の生活環境を知ることで見えてきたこと

社会福祉法人大三島育徳会

特別養護老人ホーム博水の郷 番本 鷹也

(リロケーションショック 生活環境 問題行動)

1. 問題と目的（はじめに）

入所初期に家に帰りたいたと繰り返し訴える利用者に対して、職員はどうしたらよいのか分からなくなっていました。利用者の立場になって考え、入所前の生活環境を元に、本人の生活を主軸にしたケアについて検討していきました。当初職員が問題行動として捉えていた「帰宅願望」「大声」「不穏」は問題行動ではなく、人の自然な感情なのだと学んだので報告します。

2. 倫理的配慮（対象と手続き）

この報告に際しては、所属施設長の承認を得て、対象者が特定されないよう配慮しています。

3. 症例紹介

A様、80代の女性、既往歴にはアルツハイマー型認知症があります。入所直後から、夕方から深夜にかけて家に帰りたいたという発言が多くあり、職員が施設で生活することになった事を説明すると「わ～！帰りたいたよ～」とさらに興奮してしまう状態でした。

4. 経過

A様の不眠や大声、帰りたいた気持ちの背景を探るため、多職種でカンファレンスを行いました。すると、今まで暮らしていた場所から施設に入所し生活環境が変わったことがストレスになっているのではないかと考え、自宅の生活環境に合わせて環境整備をすることにしました。職員の関わり方についてもA様と穏やかに話すことが出来た話題などを集めて、声掛けや関わり方を工夫していくことにしました。そして、実践していく中でA様が笑顔で話せる時間も増えていき、改めて本人目線で生活を整えて行くことの重要性に気づきました。

5. 考察（まとめ）

今回の事例で、職員が利用者を感じている問題行動は本当に「問題」なのだろうか？それは職員側が勝手にその利用者的大声や奇声・徘徊・不眠・不可解な行動の表面だけしか見ずに問題行動として片付けているだけであって、実は本人の気持ちになって考え、分析してみると「当たり前の行動」だったのではないかと思います。様々な方面から分析し、ケアの部分で関わることがあるのではないかと考えるきっかけになりました。家から施設に移る時に、全てがリセットされて、新しく施設の都合で生活してもらうのは違います。まずは本人を主軸に、施設での生活も自宅での生活の延長線上にあるようにつなげることが大切なのだ、この事例を通して学びました。

<質疑応答>

感想：住環境の変化に対して、ご利用者の視点も大切だと感じますが、職員の心のケアも重要だと思います。このことに焦点を当てることでご利用者に対してのケアの質が上がり、よりよい取り組みにつながると感じました。

感想：問題行動と捉えられていた行動は、自然な感情から起こっているという事を私の事業所でも共有したいと思いました。とても参考になりました。

Q：問題行動が当たり前の行動と捉えられるようになったのは、何がきっかけだったのでしょうか。

A：感情を抑え込むことは、根本的な解決にはなりません。「帰りたい」という感情にも理由が必ずあると気が付いたからです。

<助言者コメント>

- ・ご利用者が施設に慣れていくためにどうすれば良いかという事について、丁寧な考察をされていました。問題行動についての捉え方・考え方を職員同士で共有することが大切だと思います。ご利用者が施設での生活に慣れる、馴染む事に対して職員とご利用者との認識の差を埋めることに、今後も務めていただきたいと思います。



【実践報告など】

けやき学級の障がいのあるメンバーと仲間たちの活動
 ー障がいのあるメンバーを中心に、ともに学び、遊び、ともに生きる仲間を創るー

けやき学級 ○鈴木清之・西尾佳子・鬼塚正徳
 世田谷区教育委員会事務局生涯学習・地域学校連携課 吉田周平

(障がい者と仲間たちの自立と社会参加)

1. はじめに

けやき学級は1976年に当時の光明養護学校の卒業生を中心として、「障害者の自立と社会参加」を目的に世田谷区の青年学級事業をもとに発足したグループです。現在はいずみ学級、たんぼぼ学級などと同じく世田谷区教育委員会事務局の主催事業として、メンバーの自主活動を通じた「学び」を基本にして、昨年は40周年記念大会も開催しました。けやき学級のこれまでの歩みと、現在の企画の進め方や、仲間づくりを紹介します。

2. けやき学級の趣旨

「障がいのあるメンバーを中心に、みんな一人一人違う個性を大事にして、助け合っ
 て、力を合わせて、遊び、学び、みんなと一緒に楽しむことの大切さを広げていく。その中
 で誰もが心地よく、ともに生きる居場所を創っていく。それが“けやき学級”です。」

けやき学級の活動は「福祉の施策やサービス」ではなく、「教育分野の施策」として実践
 されてきました。参加者それぞれが意見を出しあい、それらを集約して企画をまとめいくこ
 とを毎年繰り返しています。そしてメンバーが主体的に参加し、体験し、学習して自分の世
 界を広げていくこと、生きていく力を学び、一緒に生きる仲間を作る場として活動を続けて
 います。

3. けやき学級の平成28年度のプログラム（抜粋）の紹介

企画会（第1回）開級式 ボートで多摩川の自然を楽しむ 二子玉川界隈の散策・探検	ロマンスカーで箱根の紅葉を 企画会（第5回） お茶（抹茶）のお点前を体験
企画会（第2回） みんなでボーリング みんなでカラオケ	クリスマス会&忘年会 世田谷八幡神社初詣と三茶でカラオケ
企画会（第3回） フリー・グリーンアレンジメント 勉強会（障害者差別解消法）	企画会（第6回） 料理教室（みんなで料理してみよう） 勉強会（みんなの仕事や活動） 年度末合宿（川場村なかのビレジ）

4. 今後の課題

けやき学級の発足当時と比べると、光明養護学校（現：光明学園）の在校生の重度化や、
 障害者自立支援法の施行で、けやき学級に参加するメンバーが大幅に減少しました。存続が
 危ぶまれる中での40周年記念大会で、けやきのOB達から改めてけやき学級の活動の意義
 を再確認させられました。前記の「けやき学級の趣旨」を実践し広げていくために、障がい
 のある方すべてを対象にして、仲間を獲得し、区内にPRしながら、誰もが参加し楽しむこ
 と、それをそれぞれの自立に繋げる工夫をしながら今後も活動していきます。

<質疑応答>

Q：けやき学級の活動に参加するためには、どのような手続きが必要でしょうか。

A：電話で、世田谷区教育委員会事務局生涯学習・地域学校連携課へ直接お問合せくだされば、プログラムの開催日をご案内します。特に参加資格などはありません。どなたでもご参加いただけます。

Q：参加している方々のニーズには、どのようなものがありますか。

A：障がいを持っている者同士でいろんなことに関わりたいという希望や、友人をつくりたい等があります。プログラム内容そのものについての要望もあります。

<助言者コメント>

- ・「けやき学級」は出会いの場であり、力を伸ばし成長していける場であり続けることができると感じました。与えられたものではなく、自分たちで作り上げる「福祉ではない取り組み」を40年以上も前から実践しており、先駆的な活動であると思います。



口頭発表 第2分科会 進行役・助言者



今井 康明（株式会社すずらん代表取締役）



吉田 光爾（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

口頭発表 第3分科会

進行役・助言者

山崎 順子（東京都発達障害者支援センター長）

佐藤 千晶（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

	発表者	所属	テーマ
1	梶 由香里	社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房	Aさんに関心をよせたことでAさんが 見せた変化
2	萩野 直人 和田 徹太郎	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所	行動障害の理解と支援に必要なこと
3	手塚 由美	一般社団法人輝水会	障がい者の主体性を引き出す「リハ・ス ポーツ」
4	牧野 友美 宿田 侑希 松永 春子	昭和女子大学人間社会学部 福祉社会学科2年	障がいを持つ子供たちとのプログラム を通じた関わり ープレイ&リズム希望丘でのソーシャ ルワークプロジェクト活動を通してー
5	甲斐 実	社会福祉法人せたがや檜の木会 喜多見夢工房分室	主体性を発揮する暮らしぶりに向けて
6	田中 千絵	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	分かりやすい！伝わる！個別支援計画
7	結城 尚子 八田 晋一郎 石切山 美帆	社会福祉法人はる グループホームはるの邑	本人の想いに添う支援 ーセルフ5ピクチャーズから見えてき たものー

A さんに関心をよせたことで A さんが見せた変化

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房 梶由香里

(知的障害 出会い 関係性)

1. 目的

A さん（女性、30 代、知的障害、愛の手帳 2 度）は人懐っこく、好奇心旺盛で、好きなことや、やりたいことがたくさんあるが、慣れない環境や人に対しては緊張や不安から「嫌だよ」「やらないよ」と否定的な言葉も多くなる傾向がある。その背景には自分の思いがうまく伝わらないもどかしさ、支援者との思いのすれ違いなどの経験があると捉えた。

そんな A さんとどう関わっていくか、A さんの気持ちはどうだろうか？A さんにとって新担当とはどういう人なのかを考え、関心を寄せたことで A さんが見せた変化をエピソードを通じて考察する。

2. エピソード① 「間違えたらやり直せばいいんだよ」

細かい作業は苦手で、間違えたら指摘されるという経験から自信のなさが伺えた。新しい作業には「嫌だよ」「やらないよ」と拒否も見られた。そんな A さんに対して「間違えたらやり直せばいいんだよ」と伝え、やりたい思いを汲み取り挑戦してもらおう。

当初は間違えることを恐れ作業にも集中できずにいて、A さんが間違えないよう材料の向きを固定するなどし、間違えた場合も「こんなにたくさんやってくれてありがとう」とプラスの声かけを繰り返していた。少しずつ間違えない実績から自信もつき、「やってみたい」思いも増え前向きな言葉も増えた。そうするうちに、仲間の見方も変わり、「A さんすごいね！」と声がかかるようになった。そうやって周囲も新担当も含めたプラスの言葉かけが少しずつ A さんの安心感につながり、新しい作業を目の前にしても臆することなく、「やってみたい」「教えてくれる？」と、さらに「間違えたらやり直せばいいね」と新担当の言葉を取り込む姿が見られるようになった。

3. まとめ

A さんのマイナス言葉をそのまま捉えていたら、きっと誤解やすれ違いが生じていたであろう。関心を寄せることで、行動面に止まらず、心情に着目でき、気づくこと、共感することが増える。A さんの気持ちに関心を寄せ、不安を知ることによって関係が変わってくる。すると私の言葉がけや対応が変わってきた。事実の指摘ではなく、支える表現になり、さらに関係の距離が縮まったように感じた。気心が知れるということだと思った。だから、出会いの折、気持ちが楽になる広げ方、プロセスに気を使わねばと感じている。

<質疑応答>

Q：出会いの折に～Aさんと出会ったころみ、気をつけていることは何ですか。

A：個でのお付き合いだとAさんも緊張して固くなってしまうので、まずは気楽なお付き合いを目指しました。グループでの会話の中でAさんを巻き込み、接点を持つなどしました。

関わりの中で、好きなこと、気になること、二人でおもしろいやりとりがみつければと思います。まずはなごやかな雰囲気、気楽なお付き合いができるよう心掛けています。

<助言者コメント>

- ・福祉の新しい現場で新しく担当になったらどう関わっていいか困ることがありますが、Aさんへの理解をしました。個別になると圧力がかかるからグループにしています。Aさんの気持ち、言動の背景を考える。グループで行うなかでAさんの本来の姿が見えてきました。タイトルをもっと変えると良いと思います。



行動障害の理解と支援に必要なこと

社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所
萩野直人、和田徹太郎

(行動障害 環境の構造化 チーム支援)

1. 目的

昨年度、東京都社会福祉協議会、強度行動障害支援指導者養成研修特別委員会、鳥取大学医学部・大学院教授・井上雅彦教授を中心に開催された、「平成28年度強度行動障害支援者アドバンス研修」に参加した。参加者が支援事例を持ち寄り約1年に渡り、行動障害の理解と支援の向上に努めた。その中で、行動障害の理解と支援に必要なことは、行動の背景（環境面）に着目し、統一したチーム支援が必要だと分かった。支援者にとっての問題行動を利用者本人の目線で見るということはどういう事なのか。この報告を通して、私たち支援者が普段行っている支援とは、と一歩立ち止まって見つめなおす機会にする為に、この事例を取りあげた。

2. 実践内容

実践概要：強度行動障害支援者アドバンス研修で学んだ支援方法に基づき、Aさんの行動背景に着目し、「アセスメント→支援プログラムの作成→実践→記録とモニタリング→評価→再アセスメント or 再プラン」を月1回、約5ヶ月間継続して行った。
対象行動：「無断で他人の飲料を飲む」「時間や場所を選ばず、シンクで手・頭・足を洗う」
実践期間：平成28年6月～平成29年1月

3. 結果

a) 対象行動「無断で他者の飲料を飲む」

- ①アセスメントとモニタリング：どんな場面で飲んでしまうかをアセスメント。
- ②支援プログラムの作成：お茶が飲める環境を提供。
- ③実践・記録・モニタリング：平成28年9月～平成29年1月
- ④評価：他者の飲料を飲んでしまう回数が減った。
- ⑤現在：お茶を飲める環境を本人に合わせて工夫し、Aさんが問題行動に変わる新しいスキル獲得を目指す。

b) 対象行動「時間や場所を選ばず、シンクで手・頭・足を洗う」

- ①アセスメントとモニタリング：いつどこでシンクを使うのかをアセスメント。
- ②支援プログラムの作成：限定した時間と場所でシンクを使える環境を提供。
- ③実践・記録・モニタリング：平成28年9月～平成29年1月
- ④評価：限定された環境の中でシンクを使っている。
- ⑤現在：タオルの使用方法などの新たなスキルの獲得。自発的に頭・足を洗いたいと表現することができる様になっている。

4. 今後の課題

a) Aさんに対する課題

- ①自宅以外での生活場面に繋がる新たなスキルの獲得を継続して目指す。
- ②本人のライフスタイルに添った実習所での生活。
- ③本人への支援だけで完結させない家族も含めた支援の展開をどうしていくか。

b) 施設としての課題

行動背景を理解することが利用者理解に繋がることが分かった。それは、利用者が安心して過ごせる実習所での生活の実現への第1歩でもあった。今後は、施設として統一したチーム支援をどのように展開していくかが課題。

<質疑応答>

Q：行動障害、白内障の方との関わりの中で、行動や背景に着目する、この支援は効果的でとても良いと思いました。例えば、人それぞれメガネの度数は違うという話がありましたが、その人にぴったり合うものを提供するのは難しいと思います。行動障害の受けとめは、施設で統一できるものなののでしょうか。また、割り切るものなののでしょうか。

A：その人の行動自体をみると、こちらがイラッとしてしまったり、受けとめきれないといったやりきれない気持ちがあったりもします。行動自体をみるのではなく、彼らの目線でいかにとらえ行動の背景に着目し、事前の環境を工夫しています。ゴールが高すぎてしまうことがありますが、スモールステップという言葉があるように、その人に合った行動におきかわるようなものを提供したいです。

<助言者コメント>

- ・支援者も人間ですから、イラッとすることもあります。チームでお互い支え合うことが重要だと思いました。この支援は、本人の気持ちを大事にし、施設の中で困っていることととらえなかったのだと思います。しかし、場所が変わったとき、この支援で良いのだろうか。生活全体がその人にフィットしたものになっているかを再度考えていただきたいと思います。



障がい者の主体性を引き出す「リハ・スポーツ」

一般社団法人輝水会
手塚由美

(主体性 障害者 スポーツ)

1. 目的

スポーツ・運動には、身体面のほかに、精神的な効果もあり、ストレス解消法として有用である。一方障害のある人にとって、一般的なスポーツクラブ等の利用は敷居が高く、また制限を課せられる事も少なくない。デイサービス等の介護予防運動をもって運動とする場合もあるが、私達は既存サービスでは果たせない役割を補完するために、新しい形のリハビリ・プログラムが必要と考えた。区内在宅医・すでに実績のある障害者スポーツ文化センター横浜ラポールのスポーツ指導員との連携のもと、どこでもわずかなスペースがあれば実践可能な「リハ・スポーツ教室」を世田谷区立総合福祉センターで実施した。この教室はスポーツ・運動プログラムを享受することに止まらず、教室終了後、自主的なサークル活動に発展させ、主体的に地域の中で生き生きと輝いて暮らしてもらう事を目的とする。

2. 実践内容

- 1) 教室の開催：平成27年10/30～平成28年1/30の間、週1回全10回・1回90分（ボッチャ・卓球・水中運動・健康講座）各種目の導入⇒実践を通じ自分達だけでも行えるよう指導する。サポートする者は参加者の出来る事に手を出し過ぎず、一緒に楽しむ。
- 2) 参加者：脳卒中片麻痺者（70歳代男性車椅子・70歳代男性独歩・60歳代男性独歩高次脳機能障害）・全介助の脳損傷者（交通事故）30歳代男性・術後の四肢麻痺80歳代男性・パーキンソン病70歳代女性・頸髄損傷60歳代男性の計7名（その他介助のため同行の妻2名・母1名）講師2名、サポートスタッフ4名（主婦など地域の方々）

3. 結果

発症や受傷後スポーツは無理とあきらめていた者が、複数種目のスポーツを行えた事により、身体面（体力・筋力の向上）・精神面（まだやれば出来るという自信・スポーツを楽しむ）・行動面（自分で来る・他にも出かけるチャンスが増加）など心身に変化が見られた。また、家族や介助者にも心理的变化が起こり、「この人はここまで」という決めつけがなくなり、一緒にスポーツを楽しむ仲間として、多様な障害のある方同士、介助者など双方向への理解が深まった。

4. 今後の課題と考察

教室終了後もあえて控えめなサポートを6カ月間続け、現在は完全な自主活動が続いている。介護・医療（保険）だけに頼らない取り組みとして、楽しいから、仲間がいるからこそ続けることが出来、主体的な活動につながる。会議室など場所さえあれば行うことが可能で対象者を変えれば高齢者・認知症・障害児童など幅広い対象者に応用できると考えられる。

<質疑応答>

Q：アンケート結果の対象月と実施月について教えてください。

A：毎週1回、全10回の取り組みが終わった時点で1回実施しています。アンケートは、ご家族・ご本人に自由記述してもらっています。体力向上と行動範囲が広がったとの感想がありました。また精神面では、同じ障害に対する理解が広がりましたとの感想がありました。

<助言者コメント>

- ・既存のシステムの補完とのことですが、補完を超えていると思います。アンケートについては、実施前に行わないのは残念です。主観的満足の視点からも是非、実施前にアンケートを取ってみてはいかがでしょうか。



【実践報告など】

障がいを持つ子どもたちとのプログラムを通じた関わり
－プレイ&リズム希望丘でのソーシャルワークプロジェクト活動を通して－

昭和女子大学 人間社会学部 福祉社会学科 2年
牧野友美 宿田侑希 松永春子

(自立支援 見守り 信頼関係)

1. 課題と目的

障がい児の通所施設である、社会福祉法人樫の木会プレイ&リズム希望丘における実際のボランティア活動を通して、①子どもたちの実態を理解する、②ボランティアの立場で障がいを持つ子どもたちにできることを考え、実践する、③子どもたちの個性や障がいを知ったうえで施設での活動プログラムを考え、実践する、の三点を目的とした。さらに、今後の学生生活を通して、活動先で得た障がいを持つ子どもたち（及びその保護者）のニーズを社会へ発信することを課題としている。

2. 方法

実践研究の方法は参加観察、及び活動プログラムの企画・実践である。

実践の対象は「プレイ&リズム希望丘」の子どもたちや職員、保護者の方である。

実践の手続きは所属大学からソーシャルワークプロジェクトを行うことを目的とした授業の一環として「プレイ&リズム希望丘」に活動依頼を行い、学生3名の受け入れの承諾を得た。参加学生と施設職員により活動日程・活動内容を協議して決定した。

3. 結果と考察

参加観察の期間は8月16日～23日の6日間合計約30時間である。

このうち、22日に、筆者らが企画した活動プログラムを行った。活動プログラムは約20分間で、内容は導入において『にじいろのさかな』の絵本の読み聞かせを行い、絵本に関連した魚の「ちぎり絵」を実施した。「ちぎり絵」は、魚の台紙とちぎった折紙と魚の目は学生の方で準備し、子どもたちには台紙に折り紙と目を貼る体験をしてもらうというスタイルをとった。活動プログラムに参加した子どもたちは10人であった。なお、活動中は職員の方にもご協力いただいた。

全体の感想として、プレイ&リズム希望丘では近くの地域に出かけに行き公共機関の利用の仕方をツアー形式で楽しみながら学ぶプログラムが多く提供されているため、利用する子どもたちの自立を支援していると感じた。このことは、保護者の支援にもつながっていると考えられた。保護者は、わが子の障がいについて受容している印象のある方が多く、保護者のお迎えを待ち遠しく待つ子どもの姿が多いことから、親子の関わりがしっかりと築かれていると感じた。

普段の子どもたちの様子は、子ども同士で遊ぶ場面も見られたが、個人で遊ぶ子が多いこと、スタッフに愛着を求めて来る子どもが多くいること、片付けが苦手だったり、同じ遊びを繰り返す姿があったり、こだわりが強いという姿も見られた。また、子どもによっては言葉よりも図や絵など視覚的に伝えた方が分かりやすいという特徴があることも理解した。

学生主体の活動プログラムについては、導入から活動への流れは良かったが、子どもたちの集中力を考慮して絵本を短いものにしたりと、作業の際の子どもたちへの声かけを増やしたりなど、課題も見つかった。子どもたちは予想していたより集中して話を聞いてくれ、作業も比較的スムーズに行うことができた。

結論として、障がいを持つ子どもたちに対してボランティアとして関わる際の大切なことは、障がいについて知識があること、その場、その子どもに応じて柔軟な対応をすること、関わりの中でニーズを模索し、より良い対応をすることだと言えると考えた。

<質疑応答>

Q：ボランティアを通して子ども達と信頼関係が築けていると感じたのはどのようなところでしょうか。

A：初回は初対面で行動してくれなかったが、2回目は声掛けをすると行動してくれました。

Q：障害の子と関わることで困惑することもあると思うが、どうすれば上手くいきますか。

A：時間をかけて根気よく関わる必要があります。

<助言者コメント>

- ・教育課程での活動をこういった学会で発表するのは立派であると感じました。昭和女子大学は実践力があり、現場にでている大学は少ないので良いと思いました。発達の様子を見ると障害の人の見方が変わります。



主体性を発揮する暮らしぶりに向けて

社会福祉法人せたがや桜の木会 喜多見夢工房分室
支援員 甲斐 実

(新規開設)

はじめに

旧上町福祉作業所の分室であった喜多見福祉作業所の本場化に伴い、平成29年4月から喜多見夢工房分室がスタートした。喜多見福祉作業所から9名、新規利用1名の計10名と一緒に仕事をし、生活していく中で利用者一人一人が主体性を発揮できる暮らしの仕組みづくりについて考察する。

1、喜多見夢工房分室について

喜多見駅から徒歩10分、世田谷通りに面し、調布～渋谷もしくは調布～二子玉川間を走るバス停の目の前に施設がある。ドアから続く作業台4台を置いた約12帖ほどの作業室。左右にカーテンで仕切られた更衣スペースがあり、奥には8帖ほどの製菓室。どこにいてもだれかの声が聞こえるほどの親和性の高さがある。

2、フレキシブルな使い勝手に

こじんまりとした空間。少し賑やかさから離れ、静かな場所に身を置きたくなる方もいらっしゃるので、製菓室や事務室などもフレキシブルに活用している。ですが、みんなの楽し気な声に誘われて、いつの間にか輪の中に入っているなんてこともしばしば。

3、7号ケーキサイズの仲間たち

全員で10名の少人数。その分それぞれの関わりが密になるので、時にはトラブルもありますが、人数が少ないからこそ気心が知れる良さも感じています。また、お出掛けひとつとっても、陽気に合わせてお弁当を持って川沿いを歩きお花見ランチに行ったり、お茶の時間に食べるお菓子を買に行き、一人一個好きなものを選んで今日は誰が選んだお菓子を出すかクジ引きしてみたりと楽しい演出が利きます。

4、自分らしくあること

成人期の課題は社会性の成熟、1つは持っている力を発揮する楽しみ、特に仕事で力を発揮すること。2つは仲間とともに楽しむことと捉えている。仕事の内容は、福祉作業所の時からやり慣れたものなので皆一様に取り組むことができる。しかし、それが当たり前のこととして流れていく日々では、成人期の「広がり」視点で物足りない。意図して行動に感謝し、気持ちに共感し、楽しいやりとりをはさみながら、シール帖やスタンプカードを使い視覚的に自分の振る舞いの広がりを実感できるよう工夫しはじめています。

そんな土壌の上に、以前から行っていた朝体操に加え「今日のお弁当発表」を導入した。皆の前で献立を読み上げる役割だが、うまく発表できなくても、字がスムーズに読めなくても「私、やりたい」と申し出る方が増えている。

なかなか自信の持てなかったAさんは来客があるたびに「あっち行け」と言いながら事務室に引っ込んでいたが、いつの間にか来客に面と向かって名前を告げたり、その時一番面白いと思っているギャグを言ってみたり、素直に自分を出せる姿が出始めている。

また、午後になると作業に気持ちが向き切らなかった方も、仲間の楽し気な声に誘われてマイペースではあるが一日通して仲間に巻き込まれて一緒に過ごす時間が多くなってきている。

5、考察

まずは一度気持ちを受け止めることを基本的な関わりの中核として、基本的に否定表現を用いない関わりを心がけてきた。利用者のイタズラ的な行動も制止や修正をするのではなく職員が乗っかって面白がることで他の仲間も否定をしない、これでいいんだと思えることが増えてきているのかもしれない。一度受け止められる土壌から自分らしさを出せる安心感に、また仲間との楽しさがエネルギー源であることを改めて感じている。

おわりに

まだ開設して半年も経っていないが、少しずつ「こんなのやってみよう」「あんなの楽しい」と思える場面が増えてきている手応えを感じる。一人一人が自分らしさを見出し、発揮していく土壌づくりにこれからも尽力していきたい。

<質疑応答>

Q：主体性を発揮する暮らしぶりで1番大切なこと、これを継続する為に大切にしていることは何ですか。

A：自己肯定感を高めることです。

Q：自己肯定感を高める為に行っている具体的な工夫はありますか。

A：1つ1つのやりとりです。個別・全体での関わりを大切にしています。

<助言者コメント>

- ・穏やかな暮らしぶりをしているのだと心が温まりました。利用者の立場に立って気持ちを考えることで利用者の自信につながると思いました。



分かりやすい！伝わる！個別支援計画

社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所

田中 千絵

(合理的配慮)

1. 目的

世田谷福祉作業所は知的障害者が通所利用し就労継続支援B型・就労移行支援事業を行う多機能施設である。作業所では10代～70代の約50名の利用者がある中で、利用者一人一人やりたいこと・やりたくないことが様々である。こうした利用者一人一人のニーズを細やかにアセスメントし個別支援計画を立てていくことが重要と考え、今までも個別支援計画の目標設定をしてきた。

今回、より利用者一人一人の障害特性に合わせた配慮ができ、利用者の希望や強みを目標に反映できる個別支援計画を作成することで、利用者自身が主体となって目標達成に向かっていけると考え、個別支援計画書の書き方を見直し、ご本人・家族との話し合いについても視点を変えていく取り組みを行った。

2. 取り組み内容

① 分かりやすい個別支援計画書への見直し

読みやすさを意識した世田谷福祉作業所独自の書式とした。

② 利用者の強みに着目する意識の醸成

計画作成やモニタリングをするにあたり、利用者のできている部分や得意なことを評価する視点を持つよう意識をした。

③利用者にとって分かりやすい表現で個別支援計画を作成

利用者一人ひとりの特性に合わせた表記に変更。日常の会話の中で使っている言葉を用いたり、障害特性に応じて単語のみで記載したり、ルビを使用したりしている。

④利用者主体の個別支援計画の話し合い

個別支援計画書が本人にとって分かりやすい表記・表現を意識して作られているので、個別支援計画の確認の際に本人にも家族にも内容を分かりやすく伝えることができる。自分自身の目標を利用者がより理解することで、利用者が主体となった話し合いが行えるようになった。

3. 今後に向けて

個別支援計画書の見直しをしたことで利用者本位での支援を更に高めていく為の入り口が固まった。今後は個別支援計画書を元に「利用者にとって分かりやすい」こと、「強みに着目する」ことを念頭に置いて支援を行っていき、モニタリング、再アセスメントのサイクルをきちんと回していくことが課題となる。

<質疑応答>

Q：個別援助計画を作成するにあたって、支援がスリム化しないようにするために、どのような工夫をしていますか。

A：本人や家族に詳しく説明する必要があるときは、注釈を入れた補助用紙を添付しています。本人向けに分かりやすく簡潔に記載してある個別支援計画の詳しい支援内容はそこに記載しています。

Q：強みに着目した計画をつくるにあたって、どのように職員の意識を変えていきましたか。

A：利用者や職員の良いところ探しをするキャンペーンを職員内で実施しました。見つけた良いところは付箋に書いて貼りだし、みんなで閲覧できるようにしました。

Q：計画書を変えようとしたきっかけは何ですか。

A：利用者さんにより分かりやすくしたかったからです。今も試行錯誤しながら改訂中です。

<助言者コメント>

- ・より良い個別支援計画をつくるために、サービス管理責任者の研修をとおして指導しているはずだが、浸透していないのが現状です。より良い計画を作成するだけでなく、支援の経過をモニタリングをしていくために日々の記録をどのように残しているのか、今回の発表では触れられていなかったですが、それも考えていかなければならないですね。



本人の想いに添う支援

－セルフ5ピクチャーズから見えてきたもの－

社会福祉法人はる グループホームはるの邑
結城尚子・八田晋一郎・石切山美帆

(ストレングス 5ピクチャーズ 想いの相違)

1・問題と目的

法人はるは、2016年度、駒澤大学、佐藤光正先生のご協力のもと、「利用者のストレングス」に着目した研修を行った。

本研修の目的は、日々の支援の中で、利用者を取り巻く環境のストレングスや、本人の持つストレングスを、「5ピクチャーズ」で可視化することによって、支援者側の想いと利用者本人の想いの「相違」を知り、利用者本位の支援に活かしていくことである。

2・方法

- ・対象利用者：2名（Aさん・男性 Bさん・女性）
- ・研修会において、実際にグループホーム利用者Aさんに参加いただき、職員が考える本人のストレングスと本人が考える自身のストレングスとの比較を行った。その後、本人にセルフ5ピクチャーズを作成していただき、個別支援計画書に反映させた。
- ・Bさんは、研修会には参加いただけなかったが、Aさんと同様、セルフ5ピクチャーズを作成していただき、個別支援計画書に反映させた。

3・結果

本人の想いと支援者の想いとの乖離を、職員一同学ぶことができた。本研修以降、現場では、実際にストレングスについて話し合うことや、ストレングスを深く観察することが浸透している。そして、利用者の真のニーズを実現するため、職員が考える機会が増えている。個別支援計画作成の際も、より利用者のストレングスを活かした計画を作成することとしている。障害者権利条約でも謳われている「利用者本位」に一步、近づけたのではないかと感じている。

4・考察

5ピクチャーズを活用することによって、本人のニーズ実現に近づけることができた。なかでも本人と支援者側が、可視化された図を共有することで、支援の方向性を定めることができたと感じている。一方で、意思表示をすることが困難な利用者に対して、どのような形でこれを作成していくのが課題である。また、多忙な業務の中で間違いなく、かつ確実に利用者のニーズを把握していくことの難しさも挙げられる。そんな状況の中でも支援者側は、常に利用者本位を意識し、一方通行の支援にならぬよう、対応していくことが求められる。

<質疑応答>

Q：知的障害のある方に5ピクチャーズを書いて頂いた上で、何が本人の意見なのか、読み取ることが難しいと思いますが、5ピクチャーズに向けての支援はどのようなことをしているのでしょうか

A：意思表示が難しい方々が、どのような将来像を描いているのか、ゆっくり探ります。色んな声掛けをし、何が好きか、どんな将来を考えているのかを探ります。そして、細かな動作を見逃さないようにしています。

<助言者コメント>

- ・本人の想いと支援者の想いが違っているということは言われてきていますが、5ピクチャーズを使うことで具体的なことが分かると思えました。言葉のない方、書けない方など本人の気持ちにどこまで気が付けるかが大切だと思います。



口頭発表 第3分科会 進行役・助言者



山崎 順子（東京都発達障害者支援センター長）



佐藤 千晶（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

口頭発表 第4分科会

進行役・助言者

佐藤 光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

	発表者	所属	テーマ
1	高見 佳乃子	駒澤大学文学部社会学科 社会福祉学専攻3年	大原福祉作業所での実習を通して、支援のあり方を考える
2	斉藤 由子	社会福祉法人せたがや櫛の木会 上町工房	『主体性』の発揮を意図して ～「自由発表」の時間から思うこと～
3	安藤 亜由美	社会福祉法人はる 社会就労センターパイ焼き窯	「ストレングス」に基づく利用者支援 ～パイ焼き窯での就労支援の取り組み～
4	湊 英輔	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所めばえ学園	不安感や自信のなさがあるAくんとの 関わりについて
5	中田 順子	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所おおらか学園	園外活動を介して利用者との関係性を 発展させる ー過敏性の強いAさんのケースを通じてー
6	佐藤 明子 及川 舞子	社会福祉法人友愛十字会 友愛デイサービスセンター	利用者支援の実践報告
7	長見 亮太	社会福祉法人せたがや櫛の木会 世田谷区立下馬福祉工房	障害のある人の「自分らしさ」の発揮を 考える

【実践報告など】

大原福祉作業所での実習を通して、支援のあり方を考える

駒澤大学 文学部 社会学科 社会福祉学専攻 3年高見佳乃子

(知的障害 社会福祉実習 ストレングス (強み))

【実施内容】

- (1) 期間 平成29年6月1日(木)～7月3日(月) 23日間
- (2) 場所 社会福祉法人せたがや檜の木会 大原福祉作業所(就労継続支援B型)
- (3) 目的 相談援助実習(社会福祉実習)
- (4) 実習内容 作業支援:受託作業、自主生産、官公需
その他:コミュニケーション、ケース記録の閲覧、作業所公開参加、工賃見直しなど

【実習テーマ】

- ・障害特性及び個性を理解し多様な支援を考える
- ・周囲の環境が利用者に与える影響、効果について考える

【エピソード】

1. マイナス面ではなくプラス面に注目

(エピソード1:Aさん) 言語性もあり、理解力も高いAさんは困っている人を見ると助けを買って出るなど仲間思いで行動力がある。しかし、優先順位がつけられず作業に集中できなかったり、他の利用者より自分は優位だと思い込み命令口調になってしまったりする。支援者としてAさんへの声かけの仕方を考える。

2. 周りの声かけが与える影響

(エピソード2:Bさん) 何事にも一生懸命なBさんは、作業所でもトップレベルの仕事量をこなす。しかし、スピードが先行してしまい丁寧さがない。初めてのことを苦手とし挑戦することを恐れていた。しかし、20年も拒み続けていたクッキー作業に入れた。周りの声かけが、Bさんに与えた効果を考える。

【まとめ】

障害を抱えることで生きづらさが生じることに對し支援者は理解を深める必要があるが、それ以上に彼らのプラス面である持ち味、強みを引き出していくことが求められる。良さを認めてくれる人が側にいるだけで自信になり仕事に對してのモチベーションが上がる。また、自分が必要とされ、役割を持てることは障害の有無にかかわらず重要なことだと学んだ。

利用者への声かけでは、プラスの声かけに對して、褒めるという考え方では上から下といった関係性がある。しかし、感謝の言葉や私言葉で伝えることはお互いが対等関係である。

実習指導者からの指導で印象に残っている言葉に“ありがとう”がある。“ありがとう”には、上下関係は全くない。子供だから、障害があるからという問題ではなく私が嬉しいと感じた際には素直に伝えられる魔法の言葉なのだ。

コミュニケーションスキルや、対等な関係で自分の気持ちを伝えていくことなど常識的対応の上に、専門的な知識や支援技術が求められるのだと学んだ。

<質疑応答>

Q：大原福祉作業所の概要について教えてください。

A：職員数は10人。利用者の数は31人。就労継続支援B型の人員配置にのっとり職員の配置をしています。活動時間は、9：00～16：00 までです。火曜日、金曜日は区民センターにて自主製品の販売を行っています。

Q：言語性のない利用者との関わりを通して学んだことは何ですか。

A：自閉的な方との交流では、表情や行動から心情理解に励みました。利用者の中には絵を描くことが好きで絵を描くときの表情から読みとることを学びました。

<助言者コメント>

- ・今回のように実習の経験を発表することで、成長につながります。長い年月をかけて支援した結果、Bさんの行動に変化が見えたことから、たゆまず支援することの素晴らしさが感じられる事例でした。障害があっても共生社会の一員として生きていくことがいいのだと思います。



『主体性』の発揮を意図して
～「自由発表」の時間から思うこと～

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房 斉藤由子

(知的障害 豊かな暮らし 主体性)

1. はじめに

当所は、就労支援継続B型として『仕事』を中心に張りのある暮らしを応援しているが、自分らしく生き活きと、より良く自分の生活を送るためには、自分の思いを知り、表現するといった主体性の発揮が必要と考える。そのため、日々の作業や役割、行事等を通し、主体性が発揮しやすい場面を意図して盛り込んでいる。その一つに『自由発表』の時間がある。そのプログラムの中身と利用者の様子を紹介し、その意味について考察する。

2. 『自由発表』の時間

朝の会の一つのコーナーとして、毎日10～15分程度の時間をとり実施してきた。司会の職員の間いかけで、発表したい利用者が手を挙げ、一人ずつ前に出て自由に『発表』するというもの。皆の前での自己表現の場、仲間を意識し合える場として設定し、自ら手を挙げられる方だけでなく、こちらから提案・依頼して始めた方もいる。発表の中身は、その時々思い、気になっていることや、関心事だったり、その日行う作業内容や、毎朝食べてきた物、外出した場所を自分で言ったり、関心がありそう、好きそうなことを職員が拾いニュースにしたり、クイズにしたりと様々である。

3. 『発表』での変化

始めてから3年が経ち、当初意図していた以上に、利用者皆さんの様子の変化や期待感の高さ、広がりが見られている。初めは数名だった発表者も徐々に増え、時間も長くなってきた。

元々話しをするのが好きな方が、皆の前で話しをし、きちんと認められることで得られる満足感はずぐに伝わってきた。様々な気になりや思いを、「発表の時間に話そう」と、そこに気持ちを向けていく様子もあった。思いを口にしづらい方、仲間への意識は高いのに、それを上手く表現できずにいた方には、「こんな風にこんな発表をしよう」と型を作って継続していくことで、自分を出す緊張感が和らいだり、仲間との不適切な関わりが減少したりする姿が見られた。前に出ることに抵抗感のあった方も、仲間の発表から自然に刺激を受け、「私もしたい、私にもできる」という思いが芽生えたようで、自ら前に出てくるようになってきた。当日、個別のエピソードを紹介する。

4. 考察

毎日同じ発表でOK、誰かと同じでもOK、上手に言えなくても、間違ってもOK、皆で認め合い、拍手し合うという和やかさ、楽しい雰囲気が、其々の、自分を表現したいという主体を引き出した。さらに、仲間同士笑い合える安心感は、自分の発表だけでなく仲間の発表に期待する様子、余裕に繋がった。その仲間への意識は、『見られる自分』を感じるきっかけとなり、『期待される私』、そしてそこに『応じようとする私』という、対職員や家族とだけでは得られない刺激や充実感となり、大人になっていく土壌となるのだろう。こんなことがしたい、こんな風になりたいという主体性の育ち、発揮は、それを引き出し、応えようとする周囲があつてこそだと改めて感じる。

現象だけを見れば、前に出て「今日ごはん食べました」と毎日同じことを言っているだけかもしれない。しかし、なぜその方が毎日その発表を行っているのか、どんな顔で、どんな思いで前に出ているのか、関心を寄せ気持ちも含めて見ていくと、その方ならではの主体性の発揮なのだ、その意味に気づかせられる。張りのある豊かな暮らしに向け、大切にしていける視点を考えさせられた。

<質疑応答>

Q：AさんとBさんの変化は、当事者同士の力に頼るものが大きく、職員の工夫がもっと必要にも思いましたが、いかがでしょうか。

A：職員が、ただ淡々と司会進行をしていては、その場の盛り上がりや広がりはありません。まずは職員が楽しく、和やかに、を意図して進めることが大きなポイントになります。また、毎日同じことの繰り返しと感じてマンネリ化しないよう、利用者の小さな変化を見逃さずにキャッチする、そこに応えていくということを心がけています。言動に着目するだけでなく、なぜこの人はこのような発表をするのかという心情を大切にすること、なぜ敢えてこのような時間を設定しているのかという意図をきちんと意識してすすめること、これらを大切にしています。

<助言者コメント>

- ・人は表現する生き物です。あれもOK、これもOKが安心感を生むことでいい芽を生み出すことができます。



【実践報告など】

「ストレンクス」に基づく利用者支援
 ～パイ焼き窯での就労支援の取り組み～

社会福祉法人はる 社会就労センターパイ焼き窯
 就労支援員 ○安藤 亜由美
 分室・はるの樹 野村 伸博
 調理班 小野 さなえ

(就労支援 ストレンクス)

1. 概要

法人はるでは、精神障害のある利用者への支援において、『利用者の強み(ストレンクス)』を活かした支援の実践を目指し、数年前から全職員参加での研修を進めている。今回、この研修の実践の一例として、「一般就労を希望する利用者への就労支援」について報告する。今回の実践では、事業所内各班の特色を生かした支援チームを構成し、利用者のニーズに、きめ細やかに対応する支援提供を目標とした。

2. 実践内容

- 1) パイ焼き窯全職員による、対象者ストレンクスの確認
- 2) 一般就労に向けた段階的支援の計画・実践

①はるの樹での支援：週4日 午前：軽作業、午後：健康づくりプログラムを提供

目標	本人ストレンクス例	支援内容例
①家から外に出る	食べることが好き	昼食の提供
②日中活動をする	絵が得意	イラストの依頼
③生活リズムを整える	PCができる など	PC入力作業を提供 など

☞結果 利用当初午後からの通所であったが、徐々に時間が早まり、日中活動のリズムを整えることができた。

②調理班での支援：はるの樹通所日のうち週2日午後のみ 調理班作業を提供

目標	本人ストレンクス例	支援内容例
①働くための体力づくり	きれい好き	昼食後の食器洗浄、厨房
②ビジネスマナー	周りをよく見ている など	清掃作業の提供 など

☞結果 苦手な作業が多くあったが、対処法をともに考えることでクリアできた。加えて一般就労に向け、新たなストレンクスが見つけれられた。

③就労支援プログラム

目標	本人ストレンクス例	支援内容例
①就労意欲の醸成	礼儀正しい	就職活動講座
②事業所外での就労経験	自分から質問できる など	職場体験実習(区・企業)

☞結果 世田谷区役所での実習に参加、良い評価を得て就労への自信となった。一方、この時点で本格的な就職活動へ進む意欲はみられなかった。

3. まとめ・今後の課題

今回の実践を通じて、日中活動・安定通所の継続～作業訓練～実習参加へと、一般就労へつながる手ごたえがみえた。その反面、「めんどくさい」「苦手なことは避けたい」という気持ちが湧き出し、もう一歩のところまで気が萎えることがあり、就労実現とその後の就労の継続へ懸念が残った。この点を乗り越えるための支援が今後の課題となった。

<質疑応答>

Q：2011年から2016年の長い事例ですが、ストレングスを積み重ねて風船をふくらませてきた中で、支援者がゆらぐことはあったのでしょうか。

A：利用者の体調に波があり、不調で状態が落ちることは何度もありました。そのときには、一旦立ち止まるようなこともありました。しかし「一般就労」という目標をご本人が持ち続けており、それを適時職員とも共有していたのでうまくいったと思います。

<助言者コメント>

- ・ゆらぎの中で目標を達成する。このようなプロセスが利用者の強みを引き上げる力になり、おもしろいですね。



不安感や自信のなさがあるAくんとの関わりについて

社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所
めばえ学園 湊英輔

(気持ちの表現 感情コントロール 自信)

【1. 問題】

Aくん(幼児、ASD)は職員に対しては親和的で、自分から話しかけたり、遊びに誘ってきたりとリラックスした姿が見られている。要求を伝えたり、職員と冗談を言って笑い合ったりと言葉でのやりとりもある程度行うことができる。その一方で同年代の他児とのかかわりや気持ちを伝える場面では、相手を前にすると硬直してしまったり、「ん～？」と言葉が出てこなくなったりしてしまう場面がしばしば見られる。また、絵を描く、小集団でのお集まりの場面等、苦手意識があることに対しては緊張感を漂わせ、表情も曇りがちになる。感情のコントロールにも難しさが窺えており、家庭内ではささいなことがきっかけで、泣いて激しく怒る、物に当たる等の行動があり、母親は対応に苦慮する時がある。

【2. Aくんへの関わり】

Aくんが気持ちを上手く表現できない時には、職員が気持ちを代弁したり、「〇〇が嫌だったかな？」とAくんを確認したりしている。また、やりとりの中で、日常目にするものでも意味を知らない言葉が多々ある様子も見られたため、認知発達面の成長を促し言葉の世界を豊かにしていくことも大切と考えられた。Aくんが『楽しさ』を感じつつ、遊びの中で数を数えることや、ルールのあるゲームで遊ぶこと、職員と言葉でやりとりをすることなど意識的に行っている。Aくんが心配そうにしている時には、不安感を十分受け止めた上で、対処の仕方を話し合い、自身の気持ちに対応していけるように支援している。また、Aくんが自信を得られたり、安心して小集団活動に取り組めたりすることもプラスになると考えられたため、Aくんの興味を踏まえた課題場面も設定し、達成感が味わえることも大切にしている。

【3. 経過】

ここ数カ月の間で、感じていることを言葉にする場面が増えてきている。困ったことがあるとAくんなりの表現ではあるが、言葉で説明をしようとする姿が見られるようになり、人との間で困り事が解決することも少しずつできるようになってきている。学園内の他児との関わり場面でも落ち着いた気持ちでやりとりに応じる姿が見られている。10までの計数が確実に行えるようになったり、「なんで?」「どうして?」と質問してきたりする場面も見られ、認知発達面の変化やAくんの世界の広がりが感じられる。

【4. 考察と今後について】

職員との関わりの中で、自分の気持ちを理解してもらえるとという安心感が得られていること、気持ちを言葉にできることで難しかったことも対処の仕方に気がつき、気持ちのコントロールにも繋がっているのではないかと考えられる。語彙の乏しさや、日によって興奮し過ぎてしまい行動調整に難しさが窺える時があるので、引き続き、日々の生活の中で言葉に触れることや、職員とのやりとりの中で気持ちや行動を調整したりする経験を大切にしたい。

<質疑応答>

Q：A君の変化を見ると割と順調に支援者のイメージに近づいていると思いますが、A君はある程度支援者から離れてもやっていけるのでしょうか。または、ある程度支援者の養護があって他者との関わりを持っていけるのでしょうか。

A：特定の友人がいないときは、心もとない感じがあります。A君自身の能力はありますが、まだ支援者の力が必要だと思います。

Q：支援者が他者との間にいるという安心感のない「学校」という環境ではどうするのでしょうか。

A：まだ自分の中にもイメージが沸いていませんが、今の学校の中で他者とどのように関わっていくのか、支援者との関わりがなくてもやっていけるのか。そういったことに対してめばえ学園で学べることは何かを考えていきたいと思います。

Q：6才児というと小学校にあがるタイミングですが、それについてはどのようにお考えですか。

A：今の友人とのつき合い方をみると、些細なことで怯えているようなことがあります。A君の社会的適応性を身に付けさせていきたいです。

<助言者コメント>

- ・ A君は自分の世界の中で生きています。他者との関わりを持つことによってその世界が広がって行っていきます。自分一人ではつukれない、他者や支援者と関わることによって彼自身が成長していくのでしょうか。



園外活動を介して利用者との関係性を発展させる

－過敏性の強いAさんのケースを通じて－

社会福祉法人嬉泉 おおらか学園 中田順子

(柔軟性のある関わり 不安・こだわりの強さへの対応 葛藤の共有)

1. Aさんの特徴と学園での支援経過

Aさんは他者の大きな声や身体接触に過敏で、不快や不安を高じさせ他害に至ることがある。また学園生活の流れなどを理解する力はあるものの、変化や変更に対応することができにくい。不快な体験をした状況や見通しと異なる状況では、瞬きもせず虚空を見つめ、身体が強張った様子で小刻みに身体全体を揺らすものの、支援員の声掛けには反応せず『固まって動かない』状態になる。そうした状態が1年以上も続いたことがあり、その際は“支援員と手を繋いで移動する”という行動の仕方自体を変えることで改善した経緯がある。しかしその後も、生活の流れに沿って動いていることで支援員が本人の内面の変化を見落とし、不快な経験や見通しとの食い違いに対処できず、いつしか固まって動けない状態を招いてしまうことが何度もあった。学園では過敏性の強いAさんの苦手な刺激を制限するように環境調整をし、見通しの食い違いが生じた際に支援員を頼りに対処できるような関係性の構築を大切にしながら支援を継続してきている。

2. 『買い物』を通じた支援の試み

Aさんは学園の備品等を地域の商店で購入する活動である『買い物』に継続して参加しており、楽しみにしている。また「自分の役割」という意識も感じているようである。買い物に出かける前に買う物の分担を決める話し合いをもっているが、Aさんはいつも「飴」「たまご」「スナック菓子」を選んでいる。これは、日頃からAさんが行動を一定に行うことで安心したいという気持ちからくるもので、支援員も本人が望む“一定の”関わりをしがちである。そうした関わりや活動の在り方は、確かに本人の安心安定に繋がっているだろう。しかし私としては、それでは表面的なやりとりを繰り返すばかりで、関係性は深まっていきにくいと感じる。

Aさんは一定さに安心を感じるものの、新しいことにチャレンジした後は達成感や満足感を支援員に伝えてくる面もあることから、現在、Aさんの“安心してほしい”という気持ちは受け止めつつ、本人の見通しや気持ちと異なることを敢えて求めることで、本人が迷ったり考えたり、という過程に支援員が関わっていき、お互いに気持ちを動かし合う経験をできるような試みを重ねている。例えば、Aさんがいつも買っているものを別の人を買ってほしいと提案したり、Aさんにいつもと違うものを買うように提案したりするのである。そうした私の関わりに対してAさんは不快感を露わにしたり、受け入れてくれないことも多いが、Aさんなりに迷ったり、こちらの提案を受け入れようとしてくれる部分も増えてきている。

3. 今後の課題

学園の中での生活を通じて、私はAさんに「苦手なことから守ってくれる人」として頼りにされていると感じてきている。しかし、だからといって園外という苦手な刺激や制約が多い状況下でも、Aさんの柔軟な対応を引き出せる支援ができるものでもない、ということも強く感じている。今後もやりとりを重ねる中で繋がりを深め、Aさんが困難にぶつかった時にこそ頼ってもらえる支援員になればと考えている。

<質疑応答>

Q：自閉症とは主にどのような症状があるのですか。

A：個人的な観点からになってしまいますが、コミュニケーションの質的障害、社会的適応性の困難さなどが挙げられます。

Q：園外活動で社会に出たときに問題行動などを起こしてしまわないようにするケアなどは行っていますか。

A：何か起きてパニックになるような状況はもちろん避けています。支援員と一緒に社会活動に出て、練習していくことが必要だと考えています。

Q：買い物というアプローチを通してAさんの元々の症状である固まって動けなくなるということに対してアプローチはできたのでしょうか。

A：固まって動けない状態が強く出ているような時には、職員が声掛けをしても動けません。ですので、そういう時には私とは外出しません。しかし、最近では買い物の前に私の話を聞いて『じゃあ大丈夫かな』と思ってくれるAさんも増えてきたことから、買い物の場でのAさんの関わりというのが、普段のAさんの姿にも繋がっていると感じています。

Q：Aさんとの関係性が素敵です。園外活動に対してAさんがプレッシャーを抱くことはないのですか。

A：買い物に対してAさんは自分が行くのだという意識があります。外出すると苦手な鳩がいて動けなくなってしまうということもありますが、支援者が手をつなぐなどして、励ましていくと鳩を避けて先に進むこともできます。なるべく、Aさんが『今日も買い物に行って良かった』と感じられるよう配慮しています。

<助言者コメント>

- ・ Aさんの成長を願い、Aさんの気持ちを汲みながら丁寧に揺さぶっていますね。買い物という身近なことの他にも、色々なところに行きたいという気持ちにアプローチしています。



利用者支援の実践報告

社会福祉法人友愛十字会 友愛デイサービスセンター
佐藤 明子・及川 舞子

(腹臥位療法 医療的ケア 包括的支援)

1. 目的

友愛デイサービスセンターは、重度の身体障害者（利用者の平均障害支援区分 5.9）を対象に生活介護事業を展開している。障害の重症化も進行している中で、医療的ケアの一環として腹臥位療法を取り入れ、利用者の健康維持、増進を推進する。

2. 実践内容

現在、当センターで実施している主な医療的ケアは、痰の吸引・経管栄養・酸素吸入であり、看護師2名が実施しているが、痰の吸引や胃瘻注入は生活支援員3名も担当している。痰の吸引・胃瘻注入については、今年度中に常勤生活支援員全員が実施できるようにし、医療的ケアを組織的に支える体制を構築することとしている。腹臥位療法は、吸引や胃瘻注入など看護師や特定の研修を経た職員が実施できる本来の医療的ケアとは異なるものであるが、呼吸症状の改善に非常に効果があることから、医療的ケアの一つと捉えており、積極的に実施している。実施方法としては利用者の状況に応じて作製したプローンキーパーと言われる腹臥位支援具を用いたり、胃瘻キットの装着などによりプローンキーパーでの腹臥位が難しい場合は半腹臥位（側臥位）になり、1回当たり15分～45分、1日に2回実施している。

3. 結果

定期的に排痰を促すため、気道の奥に貯留した痰も排出が促され、その後の喀痰吸引処置も効果的に実施できるようになった。また、鼻腔の閉塞症状が見られる利用者においては、閉塞症状も改善し、点鼻薬の服用が不要になるなど、安楽な呼吸の確保や呼吸疾患の症状緩和に非常に有効な結果が得られている。また、呼吸障害の緩和のみならず、体位変換することにより側弯進行の予防や褥瘡の予防、さらには便秘改善などの効果も見られている他、呼吸症状が安定することで、鼻腔及び口腔にチューブを挿入する吸引時の不快感や苦痛の減少にも繋がっている。

4. 今後の課題と考察

- (1) 腹臥位療法の状況を家族と共有し、家庭と施設の人的・物理的環境を考慮しつつ、間断ない支援を目指す。
- (2) 腹臥位療法を実施する利用者の心身の安定について、効果の検証に取り組み続ける。
- (3) 活動訓練室が非常に狭隘であり、腹臥位療法を必要とする利用者が増えた場合、個々の実施時間や回数の調整も必要となってくる。

<質疑応答>

Q：メリット、デメリット、アンケート調査もあって良かったです。職員の壁というのは利用者への負担からくるものなののでしょうか。

A：安心安全の定義に個人差がある場合があります。トランスファーの生じる作業となるので、職員体制が整わないとおこなえないことがある。また、長時間おこなう利用者様が退屈と感じているのではないかと案じたり、毎日行わなくてもよいのではとってしまう職員もいる。腹臥位の必要性和安全性を各職員で共有しながらこの誤差を埋め、日々おこなっております。また、日中を楽しく過ごしてほしいと思うご家族もいらっしゃるのでご相談をしながらおこなっています。

Q：顧客満足とはどのように捉えているのか、同意を得て行っているのですか。

A：今回、該当のご家族へのアンケート調査をおこなっています。その中で『腹臥位療法は有効であるが、自宅での実施が困難。』という意見が多く見られ、また、『施設での腹臥位の実施は有効であり助かっている。』との意見もいただいております。

腹臥位療法の効果は実感されておられますが、自宅での実施が困難なご家族が多くいらっしゃる中で、施設での腹臥位療法は顧客満足を高める一つの要素と捉えております。

また、同意に関してですが、腹臥位実施について、始動前にご家族との面談でご相談をさせていただきます。制作過程でもご家族のご意見やご要望、実際のご利用者様の使用感などを意見抽出させていただいております。通所の目的として『楽しみを得る』という方も多くおられますので、実施のタイミングや活用法などは随時、若しくは半期に一度の面談の際にご本人・ご家族と確認をおこなっています。



障害のある方の「自分らしさ」の発揮を考える

社会福祉法人せたがや榎の木会 世田谷区立下馬福祉工房 長見 亮太

(知的障害のある方々の“その人らしさ” 仲間と楽しさを共有する)

1. はじめに

当法人のミッションに「誰もが自分らしく生きられる地域づくり」を掲げている。自分らしく生きるということは誰もが願うことだが、知的障害のある方の場合、「こうあるべき」という支援理念が根強く、自分の思いをうまく伝えられなかったり、「自分はこうしたい」という思いを表現しても、それを周りに受け止められる機会が少ないように感じる。

自分の得意や関心を活かした自己表現を日々の活動に折り込むことで「自分の思いが伝わる」経験を重ね、その人の主体性が発揮されやすい暮らしが生まれるのではと考える。利用者の表現が多彩に表れる誕生会プログラムの取り組みを通して、“自分らしさ”の発揮について考察する。

2. 方法

誕生会プログラムは月に一回、午後の活動時間を使い、その月の誕生者が主役となって皆で集まって行く。主役の「歳を重ねた決意コーナー」、仲間の「ショータイム」、ゲーム、メッセージ渡し、ケーキタイムの流れで進行する。各コーナーの司会を利用者が行い、職員はフォロー役を担う。ショータイムではけん玉、ダンス、歌などそれぞれ定番の方々が登場する。得意分野を披露するのだが、他の人より得意だから、というより「この人といえばこれ」という定番の出番を重ねて、仲間から期待を受け、安心して、また自信をもって前に出られることが大事になる。集団に緊張があり参加しにくい方は無理強いせず、ピンポイントの参加でよしとしている。

3. 結果（エピソードとして発表時に紹介します）

- ・年に一度の主役はお祝いされる晴れがましさを味わい、お祝いする側に回った時に同じように嬉しい気持ちになる。仲間がいるからこそその嬉しさであり、大事にされていることを実感できる。
- ・15年続けた「ブランデーグラス」仲間から期待されて、大丈夫な自分を味わう。
- ・「〇〇さ～ん」名前を呼ばれて金ピカ衣装。切れ味抜群のダンス披露。
- ・楽しめるまで一年かかった「かくしっこゲーム」。段々上手になる自分を嬉しく思う。

4. 考察

職員の振り返りで「同じことを続けるのはなぜ？」との疑問が生まれた。一般的には次々に新しい面白さを取り入れる。知的に障害のある方の場合、次々に覚えるより「これはばっちりできる」と自信を持って取り組むことで、自他ともに「いいね」と実感しやすいように思える。新しいことを始める時には、難しすぎず易しすぎず、丁度の分かり方を検討するが、そこは職員のセンスが問われる場面で、彼らにとっての丁度とは何か、という日頃の支援の力量が活かされる機会でもある。

繰り返しの中で所々に小さな変化や成長が見られて、支援の面白みを感じる。職員が飽きると変化は見えにくい。利用者を楽しい雰囲気巻き込み、時に一所懸命にふざけることも職員の役割で、一緒に楽しむことは今の姿を肯定することであり、相手の良さに気付く大事なきっかけになる。地を出しやすい土壌の中で「こんな自分もいいな」と自己表現を重ねることは、日々の生き活きとした暮らしに繋がるものと考えている。

<質疑応答>

Q：就労支援の中で楽しい時間をつくろうと思ったきっかけは何ですか。

A：16～17年前から就労以外にも生活のハリを大切にしてきました。期限がなく通える限り働ける場所です。その中でただ仕事だけをしていればいいのではなく、仲間と楽しい時間をつくるのが大事と考えています。

Q：親の反応はどのようなものがありますか。

A：もっと仕事をしてほしいとか、遊ぶ時間は必要なのかというご家族もいますが誕生日会等も大切にすることが特徴であることをご理解して下さるご家族も多いです。

Q：利用者の能力を誕生日会などで発揮できるのでしょうか。

A：誕生日会での役割などを短期目標に盛り込むなどしています。

<助言者コメント>

- ・誕生日会のような特別な日にイベントがあるのが良いです。ありそうでなかった取り組みで長く続けているのは、職員も楽しむ意識を持っているからだと思います。



口頭発表 第4分科会 進行役・助言者



佐藤 光正（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）



根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

口頭発表 第5分科会

進行役・助言者

牧野 まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）

原 史子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

	発表者	所属	テーマ
1	塩崎 晃人 木村 果央 内藤 夏美 三橋 成美 吉永 有希	東京都市大学人間科学部 児童学科3年	自然遊びの大切さ
2	小堀 勇士 伊藤 真理子 伊藤 璃香 永井 きみ江 坂田 朗	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園	主体性を育む幼児保育
3	酒井 七海 鈴木 ちひろ 新山 瑞姫 山崎 寿々桜 吉野 真希	東京都市大学人間科学部 児童学科3年	人との関わりで育まれる心
4	内田 朝代	特定非営利活動法人 若者の自立支援すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再 出発と自立を支える場としてのシェア ハウス運営 安心して住むことの出来る居場所の必 要性
5	佐藤 彩子 松尾 直美	世田谷区在宅医療電話相談セン ター	『療養しながら地域で暮らす』～世田谷 区在宅医療電話相談センター10年の 実践をとおして～
6	木村 徹	三軒茶屋珈琲 red-clover コーヒー農園経営	コーヒー生産国の労働者 コーヒー生産国と消費国の関係とコー ヒー生産者の労働条件
7	五十嵐 まりも 他11名	昭和女子大学附属昭和高等学校 LOBO4	途上国女性の社会進出課題

自然遊びの大切さ

東京都市大学人間科学部児童学科3年

○塩崎晃人、木村果央、内藤夏美

三橋成美 吉永有希

(自然 遊び 発達)

1. 問題と目的（はじめに）

かつての日本では自然環境が豊かであり、子どもの遊びと自然環境とは密接な関係性があった。つまり、子どもの健全な心身の発達は、豊かな自然環境と子どもとの相互作用のなかで育まれてきたのであり、現代ではそのような側面が徐々に減少しつつあることは否定できない事実である。特に都市部において豊かな自然環境が失われつつある昨今、子どもたちの遊びの現状を踏まえつつ子どもと自然との相互作用について考察することは、極めて重要であると考えている。

この発表では、現代の子どもたちの問題点をふまえ、なぜ自然遊びが子どもたちにとって重要なのかについて、様々な事例を検討しながら明らかにしたいと考えている。

2. 内容・方法

近年、子どもたちの体力低下が大きな問題となっている。私たちは自然遊びがその解決策の一つであると提案する。自然遊びを通して予想される成長、人工物との比較、実際に体験した事例などをもとにその重要性を模索していく。

3. 考察

子どもの遊びたいこと・やりたいことを尊重し、それを好きなだけやる機会を設けることは、子どもの成長にとって非常に大きな助けになる。そこで子どもたちは自ら遊びを考え、様々なことを学んでいく。また、自然には「生命」との出会いが多くある。これは人によって作られた環境ではできない体験であり、生きるということについて考えるきっかけにもなる。自然という環境はそれらを実現するために理想的な場であると考えており、そのことについて様々な側面から考察を試みたい。

4. 今後の課題

近年、自然環境が失われていくなかで、その環境を確保することは地域社会によっては困難になっている現状がある。十分な自然環境が確保できない場合、その補完的方法のさらなる開発が今後の大きな課題と考えている。

<質疑応答>

Q：自然体験で、安全面についての対策はどうしているのでしょうか。

A：後ろで注意深く見守るようにしています。

「怪我をするからやめよう」と止めるのではなく、子どもの「やりたい!」という気持ちを大切にしています。

<助言者コメント>

- ・自然遊びに着目して考えられていて、良かったですね。
子ども同士の関係性について、これからしっかりと考えていくとより良い取り組みになるのではないのでしょうか。



主体性を育む幼児保育

社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園

小堀勇士、伊藤真理子、伊藤璃香

永井きみ江、坂田 朗

(子ども 若者)

1. 目的

保育所における活動全てが、子ども達の発達・成長を促す機会となると共に、様々なことを学ぶ場になっている。そして、私たちはその活動を通して、子ども達の自発性や創造性を発揮させ主体性を育むことに繋げていくよう日々奮闘している。今回、鎌田のびやか園の幼児グループにおいて、実際に子ども達と活動内容を作り上げることを通して、発揮された自発性や創造性が、どの様に子ども達の主体性の芽生えに繋がっていったのかを検証し、私たちが展開する保育内容・活動の向上の一助にすることを目的とした。

2. 実践内容

世田谷区における地域交流事業の一環として、高齢者との交流を目的とした世代間交流といった活動があり、新規開設園として新たに世代間交流の活動を子ども達と一緒に作り上げる作業等を行った。

- (1) 世代間交流の活動に参加するか話し合う
- (2) 高齢者施設を紹介してもらう
- (3) 高齢者施設に出向き見学することで、高齢者施設に関する理解を深めると共に、実際にどのような交流が出来るのかを考える。
- (4) 自分たちで考えた高齢者と交流するための活動を実践してみる。

3. 結果

本来であれば、保育士側が、世代間交流活動に関して事前に細かな部分まで計画した後、子ども達に見通しを持たせるための事前説明を行い、当日を迎えるといった流れが一般的だと言える。しかし、あえて子ども達にやりたいのかどうかの意思を確認し、世代間交流活動に関する計画までも子ども達に関与させ一緒に作り上げていくことで、自分が「やりたい」と言った活動の内容を子どもなりに正しく理解し、その後も参加し続ける子ども達は、「次はこうしたい」「こうしてみてもどうか」等と自発性と創造性を発揮し始めていったと言える。

4. 今後の課題と考察

今回、子ども達と一緒に活動を作り上げることを行い、それなりに自発性と創造性が発揮されたとは言えるが、このこと自体が主体性の芽生えに繋がっていくのかに関しては、世代間交流における取り組みを今後も続け、子ども達の様子を見ていく必要がある。

<質疑応答>

Q：子ども一人一人の気持ちを尊重し、「やりたくない！」という子に対して向き合う時間の確保が厳しい時は、どうやってその子の気持ちを尊重しているのでしょうか。

A：設定された状況の中では、子供たちと向き合いやすいです。職員がうまく連携をとり、一人一人をサポートしていく。

Q：活動に参加する時は、子供の行きたい、行きたくないを尊重すると思います。どのように子供たちの意見を尊重していますか。

A：職員が上手く連携をとり、行きたくない子をサポートしています。

Q：初めに老人ホームに行きたいと興味を示した子どもたちの特徴はありますか。

A：5歳児1名、4歳児3名です。身近におじいちゃん、おばあちゃんがいる子どもたちで、日頃から関わりがあると思われれます。

<助言者コメント>

・これからも職員が上手く連携をとり、一人一人をサポートしていくと良いですね。



人との関わりで育まれる心

東京都市大学人間科学部児童学科3年

○酒井七海、鈴木ちひろ、新山瑞姫

山崎寿々桜、吉野真希

(遊び 触れ合い 発達)

1. 問題と目的（はじめに）

少子・高齢化や核家族化が進み、地域社会においても人と人との触れ合いが希薄になりつつある。この傾向は子ども社会の中にも散見され、子ども同士のあそびの場面においてもその影響が色濃く反映されている。この発表では、子どもにとってなぜ人と触れ合うことが大切であるかについて実践を通して理解を深め、そのうえで子どもが人と触れ合える遊びを提案する。

2. 内容・方法

子どもにとってなぜ人と関わる大切なのかについて、実習やボランティアでの具体的実践の場面から考察する。また、実際に参加者と一緒に触れ合い遊びを体験するなかで触れ合いあそびがもたらす重要性について体感しながら考察を深めていく。

(実践内容 『はい、どうぞ』 『手をつなごう』)

3. 考察

遊びは子どもの自立心、自制心、共感心、協同心、愛他心を育む。この5つの心は、良好な人間関係を築く上で必要であり、これらの心は様々な遊びを通して育てていく。そのため、子どもたちが集まる場所である保育園や幼稚園などで、子どもたちが触れ合いながら遊ぶという経験を多くできるようにしていくことが必要であり、子どもたちにとって触れ合いを伴う遊びがいかに大切であるかについて考察を深める。

4. 今後の課題

以下のような社会環境にあって、触れ合い遊びの重要性を社会に向けて発信していく方法論の開発が今後の大きな課題である。

- スマートフォンやゲームなどの電子機器の普及に伴い、子どもの生活の中にそれらが多用され、親子間の関わりが減っているように感じる。子どもの遊びの範囲が狭まる懸念がある。
- 子ども達が「集まりたい(人が集まる公園・お祭り等)」と思える場所が減ってきているのではないか。



<質疑応答>

Q：どうしてペットボトルを使う遊びを考えたのですか。

A：500mlのペットボトルは身近にあり、実感として重さを感じることができるからです。

もし、ハムスターなどを題材にすると、人によって感じ方の違いが表れてしまい、意味合いが変わってきてしまうと思ったからです。

また、もし仮に子どもたちが大切に飼っているハムスター等を題材にすると、違和感を持つかもしれないとも思い、いちばん身近で表現がしやすいペットボトルにしました。

<助言者コメント>

- ・ゲームを取り入れていて、面白かったです。
子どもたちに遊びを提供する時の留意点を工夫したら、より良いのではないかという気がしました。
- ・実際に子どもたちにこの遊びを取り組ませてみたら、面白いかもしれません。
そしてそのうえで、結果がどうなるかを検証していくと、より深い研究になると思います。



児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と
自立を支える場としてのシェアハウス運営
安心して住むことの出来る居場所の必要性

特定非営利活動法人若者の自立支援すみれブーケ理事長 内田朝代

(生きづらさを抱える若者の自立 社会的養護 若者の居場所)

1. 問題と目的（はじめに）

18歳の春には施設を退所しなければならない若者たちが社会で困難に陥ったときのために、彼らの実家となるシェアハウスを世田谷区で平成26年4月より運営しております。多くの若者を受入れるために平成29年4月新たなシェアハウスを開設しました。親がいても親に頼ることのできない若者、親との関係性を絶たざるを得ないなか社会で生きていく若者たちです。失敗したりつまずいたりしたときに、何が必要でしょうか。皆さんが、そうしたときに当たり前のようになっていること、家族にぐちったり、相談したり、泣いたり、怒ったり、怒られたり、それが彼や彼女たちにはできません。若者が帰ってこられる場、休息や相談に訪れられる場、就労のための準備ができる場、そうした場所を提供することで、彼らの社会的自立と再スタートを支援しております。

2. 方法（対象と手続き）

児童養護施設等を退所後、生活していくなかで失敗したり、進学したけど困難に陥ったりしたときに、再チャレンジしたい若者を対象としたシェアハウスを運営することによる「若者の居場所づくり」を行っております。

- ・社会人と住むことを重視：「ひとりではないよ！」と思ってもらえるように、すみれブーケは彼や彼女たちに寄り添っています。
- ・コーディネーターを配置：いっしょに住む社会人との関係調整、社会的自立に向けたアドバイスやサポートを行う。

3. 結果（経過）

平成26年4月より支援中の若者も生活が安定してきており、準社会人枠とし、新たなシェアハウスにて生活する中で自立に向かって頑張っております。また、新たに迎える若者を支える気持ちを持てるようになりました。安心して住むことの出来る居場所の必要性が若者の経緯から鑑みられます。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

当団体は制度外の試みのため公の補助金等は無く、会員様の会費や寄付金で事業を行っておるためシェアハウス運営のための資金を調達しなければなりません。行政等の制度としての若者支援は整えられてはきていますが、まだ支援は不十分と考えられます。当法人のように民間の居場所づくりにて「人との繋がり」も大切なことと考えております。

<質疑応答>

Q：女性の社会人に対して、どのようなアナウンスをしていますか。

問題やトラブルはありますか。

A：相手が伝えてきたことに対して応じることを大切にして欲しいと伝えています。

日常の小さなトラブルに対しては、コーディネーターが対応しています。

Q：今後の課題や公的な補助金を受けていく方向性について教えてください。それは、制度による制約を生むことにもつながると考えていますか。

A：制度に基づいた補助金を受ける場合は、制約が生まれます。やりたいことができなくなるのではないかと悩んでいるところです。しかし現在は、会員様や多くの皆様の温かなご支援でシェアハウスを運営しており、公的な補助金等は考えていかなければと思っています。



【実践報告など】

『療養しながら地域で暮らす』
～世田谷区在宅医療電話相談センター10年の実践をとおして～

世田谷区在宅医療電話相談センター 佐藤 彩子
松尾 直美

(在宅療養 相談支援 連携支援)

◇目的

平成19年に世田谷区の委託事業として業務を開始した世田谷区在宅医療電話相談センターは、世田谷区で唯一の在宅医療に関する電話相談窓口として、区民やケアマネジャー、病院関係者等からの相談を受けてきた。

業務開始から10年目の節目を迎えるにあたり、当センターが相談機関として果たしてきた役割及び、積み上げてきた実践の分析を通して、在宅医療・在宅療養に関する区民のニーズと今後の課題を考察し、区民等に向けて発信することを目的とする。

◇発表内容

1. 成り立ちと概要

平成19年4月、世田谷区から世田谷区社会福祉事業団が委託を受け業務を開始した。体制としては、月曜日～土曜日の午前9時～午後5時まで電話またはFAXで対応している。従事している職員は、医療に詳しい職員（看護師、保健師、社会福祉士）で、区民やケアマネジャー、病院関係者等からの相談を受けている。

2. 業務内容

- ①在宅で受けられる医療に関する相談、支援
- ②在宅療養が困難な場合の転院等の相談、支援
- ③情報収集・関係機関とのネットワークづくり
- ④あんしんすこやかセンター等への情報提供支援

3. 事業実績の分析

平成19年の開設時から平成29年7月末までの相談件数は、延べ3,625件である。開設当初は長期療養型病院への転院相談が多かったが、医療制度、介護保険制度の変遷とともに在宅医療に関する情報を求める相談が増えている。

4. 事例から見えてくる役割

単に情報を提供するだけではなく、相談者の想いや今ある情報を共に整理していくことで、新しい選択肢にたどりついたり、今後の道筋をつけることができたケースもある。電話相談という限られた情報の中ではあるが、相談者の漠然とした疑問や不安な気持ちを丁寧に聴き、解きほぐしていく役割も果たしてきたと言える。

◇考察

入院日数の短縮化や在宅療養の推進の流れの中で、医療と介護の連携がますます重要となっている。世田谷区在宅医療電話相談センターが10年の間に積み上げてきた相談支援の実践をもとに、区民が療養しながら地域で暮らすために必要なことは何か、現場の視点から考察する。

<フロアからの感想>

ほとんどの病院には地域医療連携室があり、医療ソーシャルワーカーに相談が
つながらる場合もありますが、医事を主に行っている事務員が対応する際、特に大病院
の場合、相手の状況をあまり把握していないまま機械的に情報提供だけで終わらせ
てしまう傾向があります。そういった病院等であまり相談に乗ってもらえなかった
方が、在宅医療電話相談センターに相談している場合もあるのかもしれないですね。
これからも病院で満足な相談が出来なかった方を支援するという意味で、連携して
いけたらと思います。



<p>コーヒー生産国の労働者 コーヒー生産国と消費国の関係とコーヒー生産者の労働条件</p> <p style="text-align: right;">三軒茶屋珈琲 red-clover 店主 木村徹 コーヒー農園経営</p> <p style="text-align: center;">（コーヒー生産者 コーヒー農園 コーヒーは農産物）</p>

1、 目的

- コーヒー生産国の労働者の賃金を少しでも上げる
- それに伴う問題点の解決

2、 実践内容

- 現地でのコーヒー農園労働者の平均賃金の三倍の給料を支払うこととした。

- 家・食料・学校・病院などの生活の保障

3、 結果

- 多くの給料を手にした若者たちは山を下りて町へ。
- 世界的にコーヒー労働者の賃金が上がればコーヒーの価格が高騰する

4、 今後の課題

- コーヒー農園生産者、労働者、流通業者、コーヒー消費者の関係の誰もがハッピーになれるバランスが必要。
- しかし、コーヒーの世界は大きな力が働いているため、事実上個人単位では困難な課題である。

<質疑応答>

Q：現地コーヒー農園労働者が貰う賃金の3倍の賃金を払うようされたそうですが、その他に従業員の方へ、どのような対応されていますか。また、課題はありますか。

A：現在は、良い仕事をした場合には特別手当のようなものを支払っています。（例えば、収穫の際に完熟豆だけをきちんと摘んだ、など）
また、実質賃金を上げるのを控えめにし、その代りに生活にある程度雇用者が面倒をみることにしています。（学校を建設し、授業料は無料）（病院を建て、医療費無料）（家を建てて住み込み）（食料は自給自足で尚且つ町から定期的に購入する）などを実践して雇用者と従業員とでWINWINの関係を築いています。
課題としては、若い人に多くの賃金を渡すと山を下りてしまう場合があります。また、賃金が高騰すると、コーヒーの販売価格に跳ね返るという問題もあります。



途上国女性の社会進出課題



昭和女子大学附属昭和高等学校 LABO4

2年 五十嵐 まりも、植松 七海、岸 瑞貴、瀬津 暁乃

中村 真悠子、西村 公伽、宮原 未有

1年 伊駒 優依、大澤 果央、大澤 実央、小蘭江 奏星

菅沼 彩香

(女性 社会進出課題 発展途上国)

I LABO活動とは？

本校は文部科学省からスーパーグローバルハイスクール（SGH）に認定され、その中の取り組みの一つにLABO活動がある。この活動では4つのLABOに分かれて、あらゆる視点から女性に関する問題について研究を進めている。

II 目的

途上国の生活に触れて、社会的弱者となっている女性たちの現状や問題点から途上国女性のキャリアデザインを研究している。また、毎年8月に附属大学生と共にタイ北部のチェンライ県を訪れ、ボランティアを行いながら山岳少数民族・アカ族の村で生活を共にし、現地調査を通して得られたフェアトレード・文具回収などさまざまな支援方法の検討、提案を目的に活動している。

III 実践内容

- ・LABO4のアドバイザーである興梠 寛先生（昭和女子大学 グローバルビジネス学部特任教授）による講義や文献などを通して、途上国に関する情報を知り知識を深める。
- ・毎年8月のタイ研修で現地調査を行う。
- ・10月の中間発表や11月の文化祭、2月の全校発表に向けて1年間の活動のまとめをし、次年度に向けての活動の計画・引き継ぎを行う。

IV 結果・考察

今回訪れたタイの村では、男尊女卑のような文化がなくなってきており、タイの女性にとって社会進出しやすくなっている。そのため、昔は「女の子だから」と学校に行けず将来を自由に決められなかったが、今では1人1人が夢に向かって歩いていける環境が整いつつある。一方、他の発展途上国では昔ながらの習慣や宗教が理由で男尊女卑が残っているところが多い。また、今回の現地調査で必ずしも全ての女性が働きたい訳ではなく、彼女たちにとって“社会進出”とは何かという疑問が生まれた。

V 今後の課題

- ・タイ以外の発展途上国にも目を向け、研究の質を高める。
- ・彼女たちにとって“社会進出”とは何かについて議論を進める。
- ・他にも課題はあるのか、調査を進める。
- ・周りの人にこの現状を知ってもらうための活動を提案する。

<質疑応答>

Q：環境や能力に左右されず一人ひとりが輝くことが、社会進出なのではないかということでしたが、それが教育など周囲の環境により、制限されているならそうした現状を考えていくことも大切なのではないのでしょうか。

アカ族についてのボランティアで絵本提供などがあるということでしたが、男の子は理解できても女の子は読むことができないのではないのでしょうか。

A：実際に見ることはできなかったのですが、活動は行われています。

<助言者コメント>

- ・これからもこの活動をぜひ続けて欲しいです。



口頭発表 第5分科会 進行役・助言者



牧野 まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）



原 史子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

口頭発表 第6分科会

進行役・助言者

中澤 まゆみ（ノンフィクションライター）

野坂 洋子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教）

	発表者	所属	テーマ
1	進藤 義夫	世田谷セレ部	世田谷セレ部 活動報告
2	柳下 記子 野村 一恵	特定非営利活動法人ソラマ	誰もが普通に生きられる つながるやさしい街づくり －医療的ケアの必要な重度身体障害者のグループホーム設立を目指して－
3	宮川 英子 比留間 香代子 秋友 史衣 酒井 美知子	世田谷区介護サービスネットワーク 烏山地域部会	烏山ファースト －多職種連携からみえてきた地域連携における課題と烏山地域部会の取り組み－
4	秋山 由美子 百瀬 智彦 安藤 秀彦 菅佐原 浩晴	砧地域ご近所フォーラム 2018 実行委員会	砧地域ご近所フォーラムの取組み ～ひろげようご近所フォーラムのわ～
5	石黒 真貴子 泉谷 一美 鬼塚 正徳	世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）	世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）の活動 －誰もが自由におでかけできる世田谷を目指すそとでるの活動－
6	齋藤 隆弘	社会福祉法人敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑	地域とともにある施設を目指して ～地域公益への取り組み～
7	小泉 絵美	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻	若年性認知症コース「ともに」の活動報告

世田谷セレ部 活動報告

発表者：特定非営利活動法人障害者支援情報センター 進藤義夫

共同研究者：社会福祉法人藍 経塚章寛

(障害者施設ネットワーク PR活動)

1. 問題と目的（はじめに）

どのような機関においてもネットワークは重要とされるが、成功のみでなく失敗も含めたネットワークの形成と発展についての情報蓄積は、他の地域・次に続くネットワークに大きな示唆を与えると考えられる。前回第8回大会では、世田谷区の障害者施設ネットワーク「世田谷セレ部」の成立および経緯について第1弾報告を行った。本実践報告は昨年続き「世田谷セレ部」の推移を詳述し、地域ネットワークの効果や課題について報告する。

2. 方法（対象と手続き）

「世田谷セレ部」は、世田谷区内の就労継続支援B型事業所等が連携し、共同受注や共同販売等を行う障害者施設ネットワークであり、利用者の工賃向上を目指すとともに、障害があっても地域でいきいきと豊かに暮らせる環境づくりを進め、地域と連携し、地域住民に貢献する活動を行うことを目的としている。平成13年に企業団体と連携した「作業仲介事業」として始まり、「工賃向上」「施設のネットワーク化」を進めつつ、平成26年からは「世田谷セレ部」という名称を定めて活動している経緯および特徴や課題については昨年度発表した。今年度は、PRをネットワークの大きな目標に置き、行ってきた様々な活動を主に報告する。

3. 結果（経過）

①「世田谷セレ部」の外部向けPRとして、ふるさと納税返礼品の一部として世田谷セレ部の施設の自主製品詰合せを活用して頂いた。また、各種イベントへの参加を増やす一方、本学会をはじめとする学会などに参加し、活動の実践報告を行った。

②市民向けPRツールとして、公式ホームページを開設し(<http://setagaya-serebu.net/>)、内容については今後複数年かけて精査・作成していくこととした。

③東京都の「市区町村ネットワーク受注促進支援事業」に積極的に参加している。

④外部向けのみでなく「世田谷セレ部」内部向けにもPRは必要であると考え、「世田谷セレ部」の成立や経緯について各施設の新職員向けの内部研修を行った。

⑤その他、共同受注・共同販売等の活動も精力的に行った。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

さまざまなPR活動によって、少しずつ「世田谷セレ部」の名前は浸透しつつある。しかしながら、ネットワークの限られた予算の中で、多忙な所属施設の活動と並行して「世田谷セレ部」の活動を各施設が自主性を高めつつ行うことの大変さが今年も浮き彫りにされた。

<質疑応答>

Q：セレ部が発足して企業との連携をはかりながら、自主的に仕事は増えたけれど働く人の賃金は上がっているのでしょうか。セレブになったのでしょうか。

A：各施設の賃金はあがっていると言えます。ふるさと納税返礼品などでもあがっています。集客の効果は少しずつあがってきましたが、民間と戦っていかないといけないのは今後の課題です。学生とのつながりをつくっていきたいです。

Q：文京の学生は、どうして施設商品を知っていたのでしょうか。

A：各施設の自助努力もあって、口コミで広がっています。

<助言者コメント>

- ・「世田谷セレ部」というネーミングがネットワークにもつながっています。成功と失敗の両方に着目してやっているところが大切だと感じました。



誰もが普通に生きられる つながるやさしい街づくり
－医療的ケアが必要な重度身体障害者のグループホーム設立を目指して－

特定非営利活動法人ソラマ 柳下記子、野村一恵

(地域で生きる)

1. 問題と目的（はじめに）

重症心身障害者や医療的ケアが必要な重度身体障害者が住み慣れた世田谷の地域で生涯を過ごすことが非常に難しい現状がある。問題点はいくつもあるが、まずは解決策としてグループホームの設立を目指し活動を始めた。地域でつながり、住まうことを選択肢の一つになることを願っている。

2. 方法（対象と手続き）

- ①障害児者の理解と地域交流：勉強会「医療的ケアはこわくないと言えるために」（28年9月）講演会「子どもから大人までの合理的配慮」（28年11月）
社会貢献見本市出展（29年3月）
ドキュメント映画「普通に生きる」上映会と講演会（29年5月）
ドラムサークルイベント開催（28年7、10月、29年も予定）
- ②啓発活動：ワークショップ「－誰もが普通に生きられる－を実現するには」3回シリーズで開催（29年7、9、11月）
- ③グループホーム開設場所探し：行政、民間企業、地権者を訪問。
- ④施設見学：既存の施設を見学（練馬区、静岡県、長野県、埼玉県他）

3. 結果（経過）

イベントやワークショップの開催で重症心身障害児者や医療的ケアを初めて知った方も多く、当事者が街へ積極的に出ることや広く皆さんに知ってもらうことの重要性を学んだ。また、グループホーム開設、運営の問題点も、より明確になった。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

- より多くの方に知ってもらえるよう、最重度の当事者が出かけることの困難さをハード、ソフトの両面から解決していきたい。
- 問題点の解消に向けてさらに研鑽、検討を進める。

<質疑応答>

Q：21歳の時に交通事故で遷延性意識障害となり、現在は在宅で介護をしている子がおります。医療的ケアもあります。親亡き後を考えるとNPO法人ソラマの活動に関心があり、どの様なかたちで接点をもつことができますか。

A：配布資料やホームページ、Facebookをご覧いただくとか、よろしければ、お電話やメールでお問い合わせください。

Q：今、直面している乗り越えたい課題は何でしょうか。

A：土地が欲しいのですが、高額なので難しいです。行政の力を借りて運営するのが理想です。医療的ケアができる人材も不足しているのが現状です。

<助言者コメント>

- ・世田谷区の空き家利用については、重度の障害者の場合高度なバリアフリーを必要とするので、かえって改修コストがかかってしまうのが現状です。



烏山ファースト

－多職種連携からみえてきた地域連携における課題と烏山地域部会の取り組み－

オレンジケアサービス 宮川 英子

烏山あんしんすこやかセンター 比留間 香代子

秋友 史衣

メディカル・ハンプ訪問看護ステーション 酒井 美知子

(地域包括ケア 多職種連携 烏山部会)

1. 目的

世田谷区北西部に位置する烏山地域は他の4地域に比べ、単独世帯・高齢者の割合が高くなっている。また地区内に都立松沢病院、昭和大学附属烏山病院があり、精神科疾患で自宅療養中の方が多い。烏山地域包括支援センターにおいては、管轄する地域住民が1万人を超えているにもかかわらず、区内他地域に比べ介護事業所数が少ない。このような状況から我々は障害・要介護状態などに関わらず、すべての地域住民に切れ目のないサービスが提供できる多職種連携のシステムを構築しなければ、地域包括ケアは完成できないと考えた。世田谷区介護サービスネットワーク烏山地域部会幹事会（以下；烏山部会）では平成28年度から地域包括ケアに向けた取り組みを始めたが、活動のプロセスから見えてきた課題とそれに対する取り組みを明らかにすることにより、我々の目指す地域包括ケアを具体化し、活動につなげる事を目的とした。

2. 内容

烏山部会発足初年度は切れ目のない連携構築のため、まずは要支援者・総合事業利用者の支援について有識者の意見を聞き、グループワークを行った。このワークを振り返り課題を整理した。①地域包括ケアのためには制度を超えた事業所間の連携が必須である②軽度者や健康な方々にも認知されなければ地域全体へのサービスにつながらない。③事業者間の制度理解やサービスに対する知識理解がもっと必要である。以上の3課題を軸に、烏山区民文化祭への参加、「65歳の壁」をテーマとした障害者（児）支援事業所との交流会を企画運営した。また今年度は地域全体に認知してもらうために防災イベントを開催した。

3. 結果

文化祭では今までどこに相談して良いかわからなかったと介護相談に来た方が数名いた。普段見る事がない福祉用具に興味深く見ていただくなど地域の方々との交流を実感できた。障害者支援事業所との交流会では、参加して良かったとの声が多く、制度の勉強会や事例検討をしたい等前向きな意見も多数聞かれている。また、お互いの制度に関する知識がない事が共通認識となった。防災イベントでは100名近くの方に来場いただき、様々な感想が寄せられた。それぞれのイベントを通して連携、顔見知りの関係が増えていく事が実感できた。

4. 考察

烏山部会3つの課題は取り組みを始めたばかりで結果を出すことはできていないが、1年間の活動を通してネットワークが広がったのは大きな成果であった。構築したネットワークをさらに広げていき、顔の見える関係から、腹を割って話せる関係を作り課題達成に向けた取り組みを行っていきたいと考えている。

<質疑応答>

Q：地域包括ケアについて進めているが、実際どのように他の事業所とつながっていくのでしょうか。地域包括ケアのイメージ像について教えてください。

A：顔の見える関係から、こんなときはあの事業所に聞いてみようという顔が浮かび、解決してくれることを地域住民が実感でき、それが地域住民に伝わっていくことです。

<助言者コメント>

- ・高齢者が増える中、介護予防が必要だということが大切だとわかりました。強みのある地域で活動されています。地域包括ケアは具体的に何をしているのか区民には伝わりにくいため、繰り返し発信することが大切だと思います。区民を巻き込む姿勢がとても良いと感じました。



【実践報告など】

砧地域ご近所フォーラムの取組み
～ひろげようご近所フォーラムのわ～

砧地域ご近所フォーラム2018実行委員会：○秋山 由美子・百瀬 智彦
安藤 秀彦・菅佐原 浩晴

(顔の見える関係づくり わ 地域のつながり)

1. 目的

「砧地域ご近所フォーラム」は、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指して顔の見える関係づくりを進めていこうと、平成22年度から始まり今年度で8回目を迎える。砧地域には5つの地区があり、それぞれの地区から6～11人の実行委員が集まり、総勢40名を超える人数で実行委員会を組織している。実行委員は多種多様で、医師、歯科医師、薬剤師、高齢・障害・子育ての支援者、民生・児童委員、大学、社会福祉協議会、社会福祉事業団、町会自治会、行政等様々な方々で構成されている。

月1回開催される実行委員会では今年のテーマや発表・展示の内容、当日のプログラムの進め方など活発な発言で議論を積み重ねている。時には意見が対立し、激論を交わすこともあるが、思いはひとつ、『砧地域ってやっぱりいいまちなんですね』と誰もが言えるまちを目指すこと。継続は力なり、と信じて取り組んでいる。

2. 実践内容

それぞれの地区には私たちの知らない素晴らしい活動がまだまだたくさんある。その活動を掘り起こし、フォーラム当日は、活動している方々に自ら発表・展示していただき、そこでお互いが知り合い、交流を深め、ネットワークを拡げている。フォーラムは区民同士のつながりの役目も果たしている。

3. 今後の課題と考察

第1回が開催された平成22年度は参加人数約250人、テーマも「認知症を地域で支える」として高齢者に焦点を当てていた。その後、地域の中で生活しているすべての方々を対象とするように変化し、平成27年度からは「特別企画～つながろう、つなげよう、高齢・障害・子ども・若者の窓口～」と題したグループワークもおこなった。住民の抱える困りごとは多様化・複雑化・複合化しており、従来の高齢・障害・子育て・若者など領域ごとに設けられた個々の相談窓口だけでは解決が難しくなっている。そこで、領域を超えた連携ができるよう、相談窓口をつなぐ場を作ろうと考えた、初めての試みであった。また、平成28年度からはご近所カフェでお薬相談を行うなど私たちの活動は進化しながらこれからも続く…。

今年度は平成30年3月17日（土）12時半から成城ホールで「笑顔でひろがる5つのわ～顔の見える関係づくり～」をテーマに行う。区民の皆様にご覧いただきこんな活動があるなら私も参加したい、そして安心してこの地域で暮らして行こう、区民の皆様にご覧いただき。

是非私たちのフォーラムへご参加ください。

イメージキャラクター
わっくん



<質疑応答>

Q：当初の高齢者対象から、対象を広げていかれていますが、広げればテーマ設定は焦点が絞りにくくなります。どこに焦点をあてて、何を大切にしているのでしょうか。

A：私たちも悩みながらテーマを設定しています。アンケートで、翌年度のテーマをお聞きしています。高齢者、障害者等の対象別ではなく地域を大切に、地域に焦点を当てています。ですので育む、寄り合う、歩む、笑いなどの言葉でテーマを考えました。今年は笑いと言うことで“笑顔”をテーマにしました。



【実践報告など】

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）の活動
－誰もが自由におでかけできる世田谷を目指すそとでるの活動－

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）○石黒真貴子・泉谷一美・鬼塚正徳
（くらしの足を守り育てる市民活動）

1. そとでるとは

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）は、「誰もが自由に外出し移動できる世田谷」を目指して、NPO法人せたがや移動ケアが、区の補助金を基に運営しています。

具体的には、一人では外出が困難な利用者の依頼による介護タクシーや移送NPOの「配車」と「外出相談」、「担い手の育成」、事業者同士や地域との連携の「コウディネイト」、これら業務の「データ管理と公開」を業務としています。今回はこのセンター事業と、区の補助対象外の「おでかけサポーターズ」の事務局活動などを報告します。

2. そとでるの活動

(1) そとでるの配車、相談の実績（平成29年6月30日現在）

- ・利用登録者：4,422名、毎月平均60名程のペースで増加
- ・登録事業者（介護タクシー、NPO）92事業者、登録福祉車両199台
- ・配車件数：受付ベースで毎月200件程、（キャンセルも全体の10%以上）
- ・相談件数：毎月50件程
- ・当日、翌日の配車依頼が30～40% ・重介助、階段介助は10%程
- ・利用目的の大半は通院、入退院

(2) 配車・相談以外の活動

1) 人材育成

- ・福祉有償運送運転者講習（国交省認定）、登録事業者研修 ・スタッフミニ研修、社協やケアマネ研修への講師派遣、学生インターシップの受け入れ、等

2) 事業者同士や地域との連携の「コウディネイト」

- ・センター運営委員会の開催、移送の安全を考える研究会の開催 ・世田谷区移動支援サービス連絡会の区との共催
- ・くらしの足をみんなで考える全国フォーラム実行委員会や東京のくらしの足を考える会の事務局活動
- ・社協が事務局になった世田谷区の地域包括ケアシステム構築の協力。
- ・一人では外出が困難な利用者の実態調査（世田谷区まちづくりファンド助成）

3) おでかけサポーターズの事務局活動（世田谷区提案型協働事業助成）

- ・おでかけイベントの企画と開催（深大寺、昭和記念公園、江戸東京博物館等）
- ・イベントの送迎支援（梅まつり、光明夏祭り、雑居まつり、ふれあいフェスタ等）
- ・こどもデイういずの運転者派遣 ・ふくしまっこの送迎協力
- ・勉強会の開催（認知症サポーターズ養成講座、外出支援制度の勉強会等）

3. 今後取り組みたいこと

- ①団塊世代の地域活動への参加促進 ②災害時の福祉輸送関係者の対応マニュアルの作成 ③区内の交通不便地域（通院や買物難民の対策）等

<質疑応答>

Q：団塊の世代の人にどのように参加してもらっているのでしょうか。

A：ボランティア運転者講習を開催すると、時間的に余裕のある団塊世代やその後の世代の方々が参加してくれます。この方々に対して、地域に何かの興味ある活動のアピールがあれば良いと思います。

Q：当日や直近の申し込みには対応できていますか。

A：申し込みを受けると、そとでるに登録している94の事業者に運行の問い合わせメール配信をして、運行が可能だと回答してきたいくつかの事業者から近さや利用者のニーズに応じているかを確認し、配車依頼をしています。利用者のキャンセルや2重依頼を除けば、ほぼ100%対応していると思っています。



【実践報告など】

地域とともにある施設を目指して～地域公益への取り組み～

社会福祉法人 敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑

養護課 統括主任 齋藤 隆弘

(地域公益事業)

1. 目的

千歳敬心苑は平成28年度より「千歳敬心苑は、敬意と真心で地域社会から最も必要とされる介護サービスを創造します」というビジョンを掲げました。

平成28年の社会福祉法改正では、社会福祉法人の地域における公益的な取り組みを実施する責務について規定され、地域公益についてより一層の努力を求められるようにもなりました。千歳敬心苑では、地域に必要とされる施設、地域とともにある施設を目指して地域公益事業を積極展開していくこととしました。

2. 実践内容

地域包括ケア会議等を通じて、地域ニーズの把握から始めました。その中で交通の利便性が悪く、商店街まで買物に行けない「買物難民」と称される高齢者の存在を知りました。買物にもなかなか行けないためパンを大量に買い込み、毎食パンを独りで寂しく食べて生活している方々。在宅介護をするなかで認知症の対応に困惑している地域の方々。地域に「たまり場」的な場所が欲しいと思っている方々。そのような困っている方々に対し施設として何が出来るのか協議検討を重ね、また多くの協力機関にお力添えを頂き、それぞれ「買物キャラバン」「ちとせd e ごはん」「演劇集団ちとせ座」「ちとCafé」として取り組みを実施しました。

3. 結果

「買物キャラバン」については地区社会福祉協議会主催事業として地域ぐるみの取り組みにまで発展しました。ご利用者の方々からは「ありがたい」「継続してほしい」等、肯定的なご意見や「頻度を増やしてほしい」など発展的なご意見を頂きました。「演劇集団ちとせ座」は出張公演の依頼を頂くまでになり、一定の成果、効果があったと感じています。

4. 今後の課題と考察

一事業所だけではニーズに対し充足しきれないため、協力事業所を増やし地域全体での取り組みに進化させていくこと、さらに、慢性的な人員不足により地域公益事業にまでなかなか着手が及ばない事業所であっても負担感少なく実施できるモデルケースの創造に努めていきたいと考えております。

<質疑応答>

Q：疲れ切った職員さんが、お芝居の練習などはどうやっているのでしょうか。

A：仕事が終わった後などです。大変だと思いきや、逆にモチベーションにつながっています。

Q：買い物キャラバンについて、利用者さんの負担はどのくらいですか。また、うまくいったコツは何ですか。

A：無料で利用してもらっています。民生委員が社協に働きかけてモニタリングも行ってくれました。

Q：ちとせdeごはんの利用者負担はどのようになっていますか。

A：大人は、ほぼ実費の500円をいただいています。未就学児童は200円です。



若年性認知症コース「ともに」の活動報告

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団

デイ・ホーム弦巻 小泉 絵美

(若年性認知症 個別性 継続した支援)

1. 目的

デイ・ホーム弦巻では、平成28年4月から若年性認知症コース「ともに」を実施している。若年性認知症の方のみを対象としたデイサービスは数少ない。

「ともに」における実践を通して、若年性認知症の方とご家族への支援や活動内容を検討、構築していくこと、地域の方々に若年性認知症を知り、理解していただく機会を増やしていくことを目的とした。

2. 取組内容

- (1) 朝の会で活動決定：挨拶から始め、メンバーで当日の活動内容を決定。
- (2) 外出プログラム：メンバーみんなで決めた場所へ外出。
- (3) 作業プログラム：パソコンを使用した入力作業や調理。
- (4) 振り返り：当日の活動内容を写真撮影し、印刷したものをノートに貼り、活動記録を作成するなど様々な活動を模索、実施してきた。

3. 結果

若年性認知症の方のプログラムについて、決まった流れでの実施は難しいと感じた。

若年性認知症、と聞くと、「若年」という言葉が先行し、「若くて、高齢者よりも身体状況も高い」というイメージを抱くことも多いかもしれない。しかし、その認知症状はその人ごとに違い、様々で、高齢者に比べて、より本人や家族に与える不安やいらだちなどのダメージは大きいと感じる。

中には「就労したい」という若年層ならではの思いを持った方もいれば、必ずしもそうではない方もいる。若年層だから、という考え方のプログラムではなく、ひとり一人の症状や思いに応じた活動を実施していかなければならない。だからこそ、決まりきった活動にはなりえないと考える。

4. 今後の課題

若年性認知症コースと言っても、それぞれの持っている力や認知症の症状は様々であり、その方にあった支援を長期的に検討していく必要がある。そのために既存の活動内容にとらわれず、本人・家族の思いに応じた活動を行い、様々な視点やノウハウを蓄積していく。

現在、若年層の方でも、利用していく中で、加齢により、高齢者になっていくとともに、身体状況や認知症の症状にも変化が現れる。

そういった際に、支援が途切れるのではなく、先を見据えながら、ともに悩み、ともに考え、利用者・家族に寄り添った支援をしていきたいと思う。

<質疑応答>

Q：個別対応の際の職員配置はどのようにしていますか。

A：その日の利用人数やご本人の状況に合わせて、対応しています。

Q：他の事業所へのアドバイスがあったら教えてください。

A：一般的な高齢者の認知症よりも状況や課題が様々であるため、より一層、ご本人、ご家族のお話をよく伺い、状況を良く理解することが大事です。

Q：どのようなプロセスで利用できるのでしょうか。

A：認知症コースであるため、まずは認知症の診断が必要です。

その後ケアマネジャーを通じて申し込みとなります。

しかし、診断やサービスにスムーズに結びつかないことも多く、ご家族から直接、ご相談や利用についての問い合わせがあることもあります。



口頭発表 第6分科会 進行役・助言者



中澤 まゆみ（ノンフィクションライター）



野坂 洋子（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教）

口頭発表 第7分科会

進行役・助言者

長谷川 幹（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長）

李 恩心（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

	発表者	所属	テーマ
1	金子 広志	世田谷福祉専門学校	eラーニングによる実務者研修 ーいつでも何処でもできる研修資格へー
2	明石 眞弓	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	おでかけひろばの「食」がつなぐ、地域のつながり
3	高木 照子 中尾 有紀子	下馬地区社会福祉協議会	都営アパートのコミュニティ再生「サロン下馬和楽」
4	富沢 優 樋口 わかな 吉田 彩花	日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン	日大さくらサロン～学生主催サロンにおける活動の継続と新たな挑戦～
5	真行寺 ひろ子 中田 成子	桜香苑 太子堂あんしんすこやかセンター	区民向け在宅医療連続講座を開催してわかったこと
6	河合 信吾 鈴木 一夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」高齢者なんでも相談室の相談内容について
7	徳永 宣行	世田谷区介護サービスネットワーク	地域のインフラとしての可能性ー世田谷区介護サービスネットワーク地域部会の活動ー

eラーニングによる実務者研修

—いつでも何処でもできる研修資格へ—

世田谷福祉専門学校 金子 広志

(介護福祉士受験資格 eラーニング 実務者研修)

1. 目的

介護福祉士資格制度が今年から変更され現任介護職員が3年以上の実務経験があっても介護福祉士試験受験資格を得られなくなった。さらに、450時間という「実務者研修」を受講しなければならず現任介護職員が実際に実務者研修を受けて介護福祉士を目指すにはハードルが高くなっている。そこで、eラーニングを使用して実務者研修の受講ハードルを少しでも低くすることができるかどうか検討することを目的とした。また、実務者研修を修了すれば訪問介護、医療的ケア、サービス提供責任者など担う資格を得ることができる。しかも実務者研修は従前の「介護技術講習会」のように実務経験3年以上という条件や年齢制限はないので高校生、大学生にも受講可能で「介護の資格」としてのキャリアアップにもつながる。高校生、大学生には実務者研修を通して介護に関心を持ってもらうチャンスでもある。eラーニングによる実務者研修が高校生、大学生にも可能かどうか検討する。

2. 内容

事前モニターとして介護職員になって日も浅い初任者研修終了者1名に受講して頂いた。現在は10名が実務者研修を受講中で11月の修了をめざしている。eラーニングはPCやタブレット、スマホなどインターネットとつながる機器を使い、自由な時間に何処でも学ぶことができるのが大きなメリットになっている。405時間はこのネットを使つての研修になる。残りのカリキュラムである介護、医療的ケアの実習は7日間のスクーリングで行う。実務者研修を修了したモニターにアンケートと担当者の聞き取りを行い検証した。

3. 結果

eラーニングの最大のメリットは働きながら自分の時間で学べるところが指摘された。現任介護職員の場合は時間を取ることが難しく自由な時間に研修できることが大きなメリットになっている。デメリットとして画面を通しての研修なので実際はどのような事なのか実感として理解できない場面もあるということも指摘された。スクーリングとeラーニングを比較した場合「実際に経験していることや疑問点を直接聞ける、説明が多岐にわたりわかりやすい」とスクーリングの優位性を強調した。また、モニターは「介護についてeラーニングで学ぶことは楽しかった」とeラーニングが興味、関心を誘う効果のあることも指摘した。

4. 考察

eラーニングの特徴であるひとりで研修できるということが、人と人とのつながりを大切にしている介護職員の研修形態としてどうなのかという面は生じている。したがってeラーニングで補えない体験や多岐にわたる事例、人とのつながり等をどのようにスクーリングでカバーしていくかが、今後の課題である。確かに「いつでも何処でも研修ができる」介護福祉士受験資格に欠かせないという現実は大いだが、介護福祉士としての力量をつけていくことを基本にしながらeラーニングの取り組みをすることが求められる。ネット関係機器に慣れている高校生や大学生にはeラーニングは大きな魅力になる可能性がある。モニターがeラーニングで「新たなことを学ぶのは楽しい」と評したことは大きい。しかし、その場合は受講料など経済的な問題も生じてくるのでその支援が求められるだろう。

<質疑応答>

Q：今まで何人くらい受講希望者がいましたか。

A：20人に達すれば良いのですが、今のところは10人を超える程度です。

介護福祉士制度が変わり施設では実務者研修を受けることで介護福祉士の比率が高くなることが望めます。また、実務者研修は実務経験、年齢などに関係なく受講することができるので高校生・大学生が在学中に介護福祉士資格を取得することが可能になりました。しかし、周知が十分ではないので制度が変わったことを知らない高校生・大学生が多いです。現在受講者は10人いますが、高校生・大学生はいません。これから実務者研修を受講する人が増えることを期待しています。

Q：eラーニングのモニターの方は受講して楽しかったとのことですが、詳しくきかせてください。

A：ネットで研修する分野では自分で計画を立て、いつでもどこでも受講でき、スクーリングで研修する分野では教科書に載っていることや具体的なことを確かめられるので楽しい。そして、初任者研修よりも広く深い知識が得られるので楽しいと応えていました。初任者研修、実務者研修、介護福祉士など介護福祉士制度に関わる内容は世田谷福祉専門学校が発行している「せたふくだより」(<http://setagayafukushi.ac.jp/setafukudayori/>)に詳しく載せてあるので、見ていただくとありがたいです。

<助言者コメント>

- 一人のモニターの結果なので、今後、もっと受講者を広げていただきたいと思います。科目ごと単元ごとの理解度の違いを確認しながら進めることや学習教材を工夫して変えていくことが大事になります。



おでかけひろばの「食」がつなく、地域のつながり

特定非営利活動法人せたがや子育てネット

明石眞弓

(せためし ろかめし)

1. 問題と目的（はじめに）

NPO 法人せたがや子育てネットでは、妊娠期から乳幼児期にかけて地域の身近な場所に気軽にでかけられる場として、「世田谷区おでかけひろば」を区内2箇所を受託しています。利用者から聞こえてきた声が「手助けを得られやすい実家近くや生まれ育った地元ではなく、夫の帰りが遅い中、朝から晩までほぼひとりっきりで慣れない育児をしている」といった、「ワンオペ育児」「アウェイ育児」の状況でした。そこで、たまにはいろんな世代と一緒にわいわい夕飯を食べよう。と企画されたのが「ろかめし」「せためし」です。

2. 方法（対象と手続き）

芦花公園団地内のおでかけひろばぶりっじでは、団地内の一人暮らしのシニア層にも声をかけ、祖父母世代と乳幼児親子との交流がはじまっています。瀬田のおでかけひろばまーぶるでは、地域の中高校生世代が集まってきて、あかちゃんとのゆるやかな空間の共有が起きている。いずれも月に1度、「どなたでも」参加できます。カレンダーやSNSなどで告知しながら、ご縁のあった方に直接声をかけながらゆっくり運営しています。

3. 結果（経過）

少しずつ広がってきています。時折、近所の方からお米やお野菜のご寄付をいただけるのも大変助かっています。フードドライブなどにもエントリーを手続きしているところです。「一緒に食べたいから」とスイカをもって来てくださったり、夫婦では食べきれないからとお中元の乾物を寄付くださったり。仕事帰りに父親がそのまま寄ってくれることもあります。『ろかめし、せためしがあるから早く仕事を切り上げて帰ろう！』という雰囲気もつくっていきたいです。子どもが生まれたばかりの時期の父親は、なかなか地域に関われないので、知り合いをつくるきっかけにもしたいと思います。

4. 考察（まとめ、今後の課題）

4月から毎月1回続けることでせいっぱいでした。また、運営スタッフが30代～40代中心のため、シニア層となかなかつながることができていません。調理から助っ人してくださるサポーターになっていただくには？「いってごらん」と紹介してもらうためのツールは？

地域の方が一歩踏み出して行ってみようと思ってもらえるアイデアや工夫をアドバイスいただきたいと思っています。

<質疑応答>

Q：シニアとのつながりをご存じですか。

A：近くで活動をしているので知っています。自分も関わったことがあります。

Q：瀬田のおでかけひろばまーぶるのせためし活動や、シニア層の募集について教えてください。

A：オープン時には町会や民生委員・児童委員さんに声をかけたりして、地道に募集していきます。大家さんや地元の不動産屋さんのおかげで、縁を大事にしながら、少しずつ広がっていています。

Q：町会長だけでなく、他の町会の方と関わってはどのようにでしょうか。

A：地域の方にもぜひとも広げていきたいと思っています。

Q：子育て世代の地域づくりなど、異世代で集まる事業の展開の中で違う目的や発見はありましたか。

A：子育ての課題は多岐にわたります。例えば、孫育てをしている祖父母の方、介護と子育ての両方をしているダブルケアの方、他国籍の方など様々な支援者や団体と連携していきたい。



都営アパートのコミュニティ再生「サロン下馬和楽」

下馬地区社会福祉協議会

高木 照子、中尾 有紀子

(居場所づくり ゆるやかな繋がり)

1. 問題の所在と取り組みの目的

昭和30～40年代の高度経済成長期において都市部を中心に建設された団地が老朽化に伴い建て替えが進んでいる。

同じ時期に建設された「都営下馬2丁目アパート」でも老朽化した団地の建て替えが進められ、エレベータなしの5階建てだった団地は、最も高いもので11階建てと高層化し災害に強い近代的な建物へと再生を果たした。

一方で、建て替えに伴う引越しにより以前の隣近所の関係が崩れ人との繋がりが薄れている。このことを危惧された住民の方から「居場所づくりがしたい」と提案があり、住民主体のもと「ゆるやかな繋がりづくり」を図ることを目的とした取り組みが始まった。

2. 実践内容

「サロン下馬和楽」の開催

(1)日 時：毎月、第4月曜日 14時～16時（平成28年9月から）

(2)会 場：都営下馬アパート第3集会所

(3)参加費：無料、予約不要

(4)内 容：三宿病院 神経内科部長 清塚先生による認知症のお話

世田谷警察による詐欺対策講座

地域の専門職による身近な相談窓口（健康・生活・介護相談等）

簡単な体力測定・体操・輪投げ・折り紙・おしゃべり・お茶 等々

3. 結果

町会協力のもと身近で気軽に行ける集会所で定期開催とし、住民による見守り活動を通じた声掛けや掲示を行うことにより毎回、30名を超える参加がある。

また、あんしんすこやかセンター等の協力を得ることにより、都営アパートに住んでいる方だけでなく他地区からの参加者も増加しており新たな繋がりができている。

内容については、交流企画に加え、医療機関や福祉事業所、警察等の協力により、認知症講座や詐欺対策等をテーマとした講演を開催し、参加者から好評を得た。

4. 今後の課題と考察

毎回、新たな参加者があり交流が生まれている。今後も気軽に参加できる内容で定期開催とし繋がりを持たない方への参加を継続して呼び掛けていきたい。

また、都営アパートは周辺の地区に比べ高齢化が進み、健康に関する理解と疾病への発生活予防・重症化防止が住民からも求められている。そのことを解決していくためにも医療機関・専門職との連携を図り住民との顔の見える関係づくりに取り組んでいく。

<質疑応答>

Q：世代的には70～80代が多いのですか。

A：70～80代の方が多く、1人の世帯が多いです。

Q：月に1回だと、待ち遠しくされる方が多いのではないですか？

A：そうですね。スタッフともども待ち遠しいです。

最初のうちは、どうなるかと思っていましたが、世代が違ってもしっかり声をかけあっていたりして、とても良い場になっています。

<助言者コメント>

- ・地域のコミュニティの大切さがよくわかりました。



日大さくらサロン～学生主催サロンにおける活動の継続と新たな挑戦～

日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン

発表者：富沢優、樋口わかな、吉田彩花

共同研究者：安藤伸也、北川卓治、廣瀬祐里香、浅賀崇、秋元那月、新井悠華、

石塚凧紗、今井夏帆、相良勇希、平賀真呂也、河上真奈、栗田有紀、松村萌々

(学生 サロン)

1. はじめに

「日大さくらサロン」は日本大学文理学部キャンパスを拠点に、大学周辺にお住まいの方々と学生が相互に交流できるサロンを学生自ら企画し、運営する学生ボランティア団体です。

2. 活動内容

2～3ヶ月に1回のペースで大学に地域の方をお招きし、サロンを開催しています。企画からサロンの運営まで学生主催のサロンを開催するため、週に1度の定例会にてサロン企画の話し合いを行っています。また、開催に向けた告知ポスターの製作や招待状の送付、メールの送信、公式 Twitter での案内等、様々な情報手段を活用しながら、学生自ら広報活動に積極的に取り組んでおります。

3. サロン企画内容

- ・桜麗祭ツアー：大学内を地域の方に案内し、学祭の雰囲気を感じていただくツアー企画
- ・学食ランチ：学食で地域の方と一緒に食事をしながらおしゃべりを楽しむ企画
- ・ゼミナール体験：議題に対して、大学の授業形式を活用しながら地域の方と議論する企画
- ・脳トレ・クイズ大会：脳トレを応用した体操やクイズ・ゲームを地域の方と楽しむ企画

4. 新たな取り組み

- ・参加経験者に継続参加を促す試み

地域の方の声がきっかけで、スタンプカードを作成しました。サロン参加毎にスタンプを押すことでスタンプを貯めるといった楽しみを生み、それがサロンへの継続的な参加に繋がるのではないかと考えています。地域の方々から団体への愛着心や参加意欲を高めていただくためのきっかけづくりを行っています。

- ・団体の周知と地域とのネットワークづくり

大学周辺地域のサロンやたまごの家の活動に学生自ら参加し、団体を周知させ、学生と地域の方々とのネットワークを築いています。併せて、サロン開催の案内や招待をしています。

5. 課題と今後の展望

今後は、団体発足当初からの活動目的や意義を理解し、共有し、継承すること、活動の継続性を維持していくことが求められます。また、学生主催のサロンという学生目線の独自性を大切にしながら、地域の方の声を引き出し、共に創り上げるサロンを目指してまいります。

<質疑応答>

Q：参加しているのはどのくらいの年代の方ですか。

若い人が来てくれる取組みはありますか。

A：対象者は小学生から高齢の方まで幅広く、70～80代が70%を占めています。若い世代の方への取組みはこれからです。

Q：イベントの開催はいつですか。

A：イベントごとに異なります。土曜日に開催することが多いです。

Q：地域への出張はしていますか。出張をお願いできますか。

A：たまごの家のみです。活動の幅を広げたいので、お誘いがあれば出張します。地域の中でもいろいろなサロンがありますが、今後ともよろしくお願ひします。

<助言者コメント>

- ・非常に学生らしい発表で、すばらしかったです。他の大学に広めてはどうでしょうか。拠点を確保できるのはすばらしい。メリットをいかした活動でよかったですね。活動のための活動にならないようがんばってほしいです。



区民向け在宅医療連続講座を開催してわかったこと

桜香苑

真行寺ひろ子

太子堂あんしんすこやかセンター 中田成子

(在宅医療 看取り 区民の意識)

1. はじめに

現在、多くの方が病院で最期を迎えているが、財政的事情等により今後は地域や在宅で最期を迎える方が増加していくものと思われる。だが、厚労省の発表ほどには、在宅医療や看取りが国民に浸透しているとは思えず、世田谷地域では『「在宅医療」知っていますか？家で最期まで療養したい人に』のテーマで在宅医療に関する区民向け連続講座を開催した。参加した区民の在宅医療に対する意識等、講座を開催してわかったことを報告する。

2. 目的

区民が在宅医療に関心を持ち、自分の事として考え行動するために、行政をはじめ、関係機関や地域が今後工夫すべきこと、活動すべきことは何か明らかにしたい。

3. 内容

- 1) 対象：2016年10月から2017年6月の間で「世田谷地域の医療・介護・福祉を考える会」と世田谷地域7か所のあんしんすこやかセンターが共催した在宅医療講座に参加した区民398名
- 2) 方法・内容：在宅医療の啓蒙を中心とした7回の講座を開催。調査方法は自記式アンケート自由記載欄を設定し、在宅医療に対してどういう意識を持っているか、自分や家族の最期の在り方をどう考えているか、感想などを記載してもらった。
- 3) 分析方法：回収253枚をデータ分析、自由記載欄は大まかなカテゴリーに分類した。
- 4) 倫理的配慮：無記名でアンケートの提出は自由であり、提出を持って同意とした。

4. 考察

誰でも必ず死を迎えるが、いざ当事者となると現実として受け入れにくく、未知未経験なことは不安で考えたくない現状がある。講座の中で在宅見取りの経験のあるご家族に自身の介護や看取りの体験を話して頂く時間を設けたところ、「短時間では勿体ないじっくり話を聞きたい」との意見が多く寄せられた。介護や看取りを経験した区民や医療者から自分の体験を語ってもらうことが、最も身近で効果の高い伝達の機会と考えられる。また、地域全体で自らの健康や地域の医療・介護の体制を考える機会も必要である。在宅で最期を迎えたい区民の希望が実現できる体制をつくるには、どの地域・どの年代でも①在宅医療や看取りについて自分の事として考えられる情報提供の仕方②自分や家族がどのように・どこで最期を迎えたいかを考える機会の提供③地域で当事者・家族・医療者が腹を割って話せる場づくりが必要であると確認できた。今後も地域と協力して活動していきたい。

<質疑応答>

Q：高齢になると、出かけるのが大変になるので、出前はうれしいですね。

A：お呼びいただければ、公民館などどこへでも行きます。

<助言者コメント>

- ・アンケート分析がすばらしい。看取りの話も広がるとかなり変わると思います。ピンピンコロリは難しい。本人の努力が必要です。年齢が要因となるケースは半分もないのではと思います。話し相手がいなくなったり、出かけなくなると筋力も落ち、どんどん虚弱になってしまいます。活発になれば変わるだろうと思います。



「世老研」高齢者なんでも相談室の相談内容について

世田谷区老人問題研究会

河合 信吾

世田谷区老人問題研究会

鈴木 一夫

(社会的変化に伴う相談内容の変化)

1. 相談室の目的

「世老研」は老人大学の第一期生が「高齢者なんでも相談室」を開く目的で設立した会で、世田谷区の委託事業として、地域での高齢者、ならびにその家族が幸せに暮らしたいとの願望と日常生活を営んでいる中でいろいろな問題と悩みについて、相談員が同じ高齢者の立場に立って相談に応じながら確かな情報の提供と共に相談要件の解決に当たります。

2. 相談室の活動の活動内容

毎週月、水、金曜日 PM1時～4時迄 ひだまり友遊会館の相談室にて電話及び、又は来所のお客に対して相談員2名にて対応致しております。

相談の件数は月当たり10～15件。相談内容は、家族問題、住宅問題、生活問題、健康問題、年金問題、その他の問題とあわせて年間平均して180件扱っております。

相談内容についてみますと、最近の1年、2年の短いスパンではあまり変わりはなく、生活問題、健康問題で約50%になります。しかし20年前と比較してみますと、家族問題、住宅問題で50%を占めております。

これは、社会的背景が大きく変わっている為と考えられます。

① 平均寿命 平成7年と比較しますと 男女とも約5年拡大

② 独居世帯 26%から32%に拡大

この様なことによるものと考えられます。

3. 相談室の今後の展望について

社会的背景を考えますと

① 高齢化率の拡大

② ひとり暮らし（独居世帯）とくに高齢者の独居世帯の拡大

③ 平均寿命がますます高くなる

等が考えられますので今後の相談内容がどうなるか興味深く観てゆきたいと考えます。

<質疑応答>

Q：37年間続いているとお聞きしましたが、どのように運営されていますか。

A：現在会員は41名で、約30名で相談を担当しております。月当たり、1回～2回になります。新会員の人と毎年少しずつ入れ替わっております。

Q：難しい相談はありますか。

A：法律は専門ではないため、専門の機関等への橋渡しをしています。

<助言者コメント>

- ・経験を活かし、相談者を導いて行ってください。



地域のインフラとしての可能性

－世田谷区介護サービスネットワーク地域部会の活動－

世田谷区介護サービスネットワーク 徳永 宣行

(介護事業者の地域での役割)

1. はじめに

世田谷区介護サービスネットワーク(以下：介護ネット)は、世田谷区内で介護サービス等を提供している事業所で構成されている団体である。職種別の専門部会や研修グループなど発足当時から様々な活動を通して、介護サービスの質の向上や連携強化に取り組んできた。平成27年度からは「地域包括ケアシステムの構築」を念頭に、区内の5地域それぞれに地域部会を立ち上げた。

2. 方法

各地域部会ではテーマや活動内容をコアメンバーが話し合い、介護事業所などの枠組みにとらわれず「顔が見える関係」をつくるために、交流会の開催やイベントへの参加などの活動をしている。世田谷地域部会では事業所同士の連携を深めるために、自事業所のいいところをアピールできる「介護ワーカーズアピール10」を開催している。また、あんしんすこやかセンターが中心になって行っている地域での活動にも積極的に協力して、地域の方々に介護・福祉の仕事などについて周知を行った。

他の地域部会でも地域住民の方を巻き込んで防災について一緒に考えたり、福祉専門学校や病院、介護施設などに地域の方も招いて交流の場を設けたり、お祭りに参加するなど様々なかたちで活動をしている。

3. 結果

これまでも介護ネットでは職種を越えた連携を深めるために、研修会や交流会を行ってきた。もちろん介護を受けている方やそのご家族に対しても働きかけをしてきていた。そして地域部会の活動は3年目になり、さらに広がりを見せている。これまで介護ネットにあまり参加できていなかった事業所、あんしんすこやかセンターや地域住民の方などが参加してくれることで、地域のことを一緒に考えるための土壌ができつつある。

4. まとめ

「地域包括ケア」という言葉は専門職の間では浸透してきていると思う。一方で、地域の主体である住民の方々にはまだなじみがないのではないか。介護ネットでは言葉にとらわれることなく、地域部会の活動を通じて、住民だけではなく介護事業所も地域の一員であり、誰もが安心して住みやすい街づくりを進めるために何が必要なのか、どうすれば実現できるのかをともに考えていきたいと思う。そのために介護事業所にある人・物・場所を活用することもできるはずである。

<質疑応答>

Q：世田谷地域のあんしんすこやかセンターはいくつありますか。

A：7箇所です。(池尻・上馬・下馬・若林・太子堂・経堂・上町)

世田谷区ではまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター、社会福祉協議会の三位一体で地域づくりを目指しています。地域の事業所も協力していきたいです。

Q：各地域、それぞれの目標を教えてください。

A：世田谷区の5地域といってもとても大きいです。共通課題もたくさんあります。ある地域では幹線道路で分断されてしまい、全く状況が変わってしまいます。また大きな商業地域では元々の地域住民と若い世代や単身者との交流も課題になっています。一緒に地域づくりができるとういことです。

Q：どんな職種が多いのですか。(コアメンバー)

A：訪問看護、訪問介護、デイサービス、ケアマネジャー、リハビリ職など様々です。

<助言者コメント>

- ・これから地域のインフラになっていくことがよく分かりました。できるなら区民向けに連続講座を開催したり、区民が体験談を話す機会を設けたりしてはどうでしょうか。



口頭発表 第7分科会 進行役・助言者



長谷川 幹（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長）



李 恩心（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

企画分科会①開催報告

「コミュニケーションの発達支援」

1. 趣旨説明：進藤

世田谷区は 23 区内で最も人口が多く、総人口、児童人口共に増加傾向にあり、特に乳幼児(0歳～5歳)の増加が著しいと言われている。その中で両親から見て発達の気になる子どもについて、区の関連施設で発達相談が行われているが、相談件数が多く、すぐには相談が受けられない状況が見られている。

今回の企画分科会①では、上記のような現状を踏まえ、“子どものコミュニケーション”について気になる問題とその支援に焦点を当て、発達障害が専門の小児科医、発達心理学・臨床心理学の専門家、言語聴覚障害の専門家の方々に講演と討論を伺う会を計画した。

2. シンポジスト報告

(1) 第1報告：宮尾益知氏（どんぐり発達クリニック院長・ギフトッド研究所理事長）

健常者における視線認識の発達、指さし、模倣、社会的参照、共同注意の種類や三項関係の成立、子どもの発達を促すための工夫や、発達障害との関連について解説。その上で発達障害やその支援法、地域の役割、ADHD（注意欠陥多動性障害）の診断と治療原則、自閉症は増えていること、その症状の特徴、対応方法の原則などを取り上げた。さらに現場での発達障害について大切なこととして、子どもの特性を理解してあげること、子どもが落ち着いて過ごせる環境をつくること、してほしくないことをやめさせることなどを言及。保護者が子どもの発達障害の特性に気付いたら、4歳～5歳までに専門の医療機関で受診させること、それらの施設、総合的なネットワークなど沢山の貴重な情報を提供して頂いた。

(2) 第2報告：藤崎春代氏（昭和女子大学心理学科教授、発達相談など担当）

昭和女子大学生生活心理研究所内にある、世田谷区の委託を受けたNPO 昭和子育てステーション世田谷で、区内在住の18歳未満の発達障害を対象に発達相談を行っている。言語について心理学で扱う内容として、言語的知識（language）、話しことば（speech）、コミュニケーションについて言及。言語獲得の4つの仮説（①学習説、②生得説、③認知説、④コミュニケーション仮説）の中で、④のコミュニケーション仮説（相互作用説）について、子どもは周囲の大人との相互関係を通して言語も学んで行くこと、養育者の発話特徴の研究がなされていることを説明。さらに、母親が乳児の心の世界に目を向け、乳児を心を持った一人の人間として捉えるという特徴（mind-mindedness）や、乳児の側の社会的同調として、指さし（三項関係の成立）、応答の指さし（コミュニケーション成立）、社会的参照（他者の表情を手がかりにして判断／行動する）などについて解説、コミュニケーションの発達の基盤となる情報を提供頂いた。

(3) 第3報告：進藤美津子（昭和女子大学福祉社会学科ことばの相談室担当）

話しことばのコミュニケーション図式と、コミュニケーションの/言語学的/生理学的/音響学的/各レベルの働きを解説、さらに話しことばのコミュニケーション回路として、①ことばの入口(耳)⇒②ことばの処理(脳)⇒③ことばの出口（発声発語器官）について説明。子どものことばで気になることでは、ことばの発達の遅れ/発音の間

題/ことばの流暢性の問題(吃音)/聴覚障害や脳損傷によることばの問題/などを取り上げた。ことばや聴こえの発達評価、言語聴覚士によることばの相談・指導を紹介し、2017年春よりスタートした本学福祉社会学科の「ことばの相談室」(地域貢献と学生の実習の場として設置)の相談・指導の活動状況について紹介した。

3. シンポジスト間の討論

- ・宮尾先生⇒藤崎先生：社会的参照は将来の犯罪に関係あるか⇒どちらかというとも生物学的危ないことに母の姿を見て乗り越える。抑えるというよりはむしろチャレンジ。
- ・宮尾先生⇒進藤：自閉症児はいつからST (Speech Therapy) を受けるか⇒ことばの相談室では小学低学年児から行っている。母親が我が子にことばのキャッチボールができるようになってほしいと望んでいる。子どもの興味がある物を介して、順番を決めて行う。
- ・藤崎先生⇒宮尾先生：家族支援のプログラムについて⇒保護者支援 (parent training) のプログラム、父の会、母の会を開催している。父の会ではアスペルガーが疑われる父親に参加してもらい、子どもとの関わり方を教育する。お互いが譲り合って暮らしていくことが最終目標である。
- ・会場参加者⇒宮尾先生：運動会が苦手な子がいるがどうしたらよいか⇒その子どもと一般の人とは文化が異なる。子どもが予測できるようにしてあげる。その子なりに安心できるパターンを作ることが必要である。

4. まとめ：進藤

発達障害のコミュニケーション支援について、小児科学、発達/臨床心理学、言語聴覚障害学のそれぞれの立場から、障害の見方、捉え方、相談・支援の方法、関連施設などについて、貴重な情報を得ることができ、現状や今後の取り組みへの有益な示唆が得られた。

(文責：コーディネーター・司会・シンポジスト 進藤美津子)



企画分科会②開催報告

「かべ、境界、を乗り越え新しいコミュニティ創造の戦略」

1. 趣旨説明：高橋氏

本分科会は、急激な社会変化と多様な価値観の中で、医療や福祉は組織や部門や専門性や専門職、非専門職間の「境界」を越え、異なる声を「共振」させて組織変革や地域変革、そして知識創造を引き起こしていく必要があるという問題意識のもとに設定された。専門職、非専門職の連携・協働あるいは対立が生じる時、鍵になるのは「対話」である。それぞれの「境界」を越え、新しい知識やツールやコミュニティ間のつながりを協働で創造する実践や戦略を生み出す一助とすべく、今日は活発な議論を期待したい。

2. シンポジスト報告

(1) 第1報告：渡邊氏

社会福祉協議会では、生活困窮者に対する相談支援を行っている。生活保護受給世帯の子どもの高校進学率が低い中、学習支援を活動の軸として、食事を共にすることにより集団におけるマナーなども身に付くようにしている。協力者は専門家ではなく様々なボランティア（元教師や学生、地域の人など）である。利用している子どもたちは、50人ほど。生活困窮だけではなく、外国籍、発達障害など様々な境遇にある。様々な大人とかかわる機会が少なく、より多くの子どもの受け入れたいので、そのためにもボランティアを増やしたい。なお、活動は世田谷区内5地域で行っている。ボランティアと福祉事務所の職員など、子ども支援にかかわる人々とともに、ケース検討会なども行っている。

(2) 第2報告：篠原氏

せたがや若者サポートステーションでは、引きこもりや不登校、中退、ニート等の課題を抱え、働くことに悩む若者の職業的自立を事業目標に掲げている。若者たちはコミュニケーションが苦手であったり、自分に自信がないといった課題を抱えているため、体験を重視し、働くイメージとコミュニケーション力を高められるように支援している。個別相談にて、何に悩んでいるのかを引き出し、課題に応じて農業体験や清掃体験、ビジネスマナーセミナーなどへの参加を促す。受け入れ先は、若者たちと接し「なんだ、普通じゃないか!」と驚く。高齢者が多く参加する地域イベントへの参加を通じ、人と協働する、人の役に立つという経験を積んでいく。地域が若者にとって社会との出会いの場所となっている。

(3) 第3報告：渡辺氏

ブラック企業でパワハラを受け、自己都合退職に追い込まれた若者たちは雇用保険がもらえずに困って POSSE の労働相談にたどり着く。労働相談に来る人の半分は正職員、2割がブラックバイトである。特に固定残業代の制度は「求人詐欺」ともいえるべき社会問題である。長時間労働が続き、うつ病になってしまう人もいる。POSSE では生活相談も行っている。20～40代の人が多い。福祉事務所を一回以上訪れた経験のある人は6割だが、そこで問題が解決されていない。生活保護水準以下の貧困状態にある人は増加し続けている。これは個人の問題ではなく、社会の問題である。福祉国家は社会を構成する私たちの主体的・自発的な営みの上によって創られるのであり、権利を行使することを重視している。

(4) 第4報告：岡氏

精神科ソーシャルワーカーとして13年間、目の前にいる人を信じ、その人の言葉にならない思いや希望を含めて、その人の声を聞くことを大切にしてきた。病院では本人の能力の

セスメントも医学モデルの文化の中で行われる。退院準備プログラムでは、外に出る経験をするが、その際に専門職同士の対立が起こることもある。地域では本人の不安の解消、暮らす場所と保証人の問題、生活支援、金銭・服薬管理といった課題がある。これを誰がサポートするか。戦略として、同じ志を持つ人をひたすら探し、本人の味方を増やす。制度面の問題もある。特に地域差の問題は大きい。壁や境界は、不安や緊張による防衛から作られる。風評被害もある。「見える化」「わかる化」をして、手をつなぐ人を増やしていきたい。

3. 質疑応答・全体討論

各報告者に対する質問を質問用紙にて受け付け、それへの回答を挟んで全体討論が行われた。質問内容は個別的で詳細は割愛するが、主に、各報告者の所属する団体等の連携先についての質問や、地域におけるネットワークづくりの手法、労働相談・生活相談の種類とその対応などについての質疑と議論が行われた。コーディネーターの伊藤氏から、福祉専門職が差別や偏見を助長するような言動をすると厳しく追及されるが、一般市民であればそれが許されるという風潮があることに対する疑問が呈された。それに関連して、フロアから福祉行政が個人の権利を行使することに対して否定的になってきており、社会福祉士の養成テキストなどもそのような論調に変わってきているとのコメントがあった。

4. シンポジストからのコメント

最後に、報告者から一言ずつコメントをいただいた。渡邊氏「親との信頼関係を築き、相談先を紹介することによって、様々な子どもに対応できる努力を続けたい。」、篠原氏「若者の問題を他人任せにしないで、地域で関心を持ってほしい。若者と地域がつながっていく仕組みづくりをしていきたい。」、渡辺氏「福祉の専門家は目の前の人しか見ていない。マクロな視点が足りず、ソーシャルワーカーと言いつつ『social』な部分が足りないと思う。」、岡氏「目の前の患者中心。福祉専門職よりただの人として壁を取り払うように働きかけるソーシャルアクションをしていきたい。」

5. まとめ：高橋氏

越境する必要があるのは、複合的な問題を抱える人がいるためである。縦割りでの対応ではなく、当事者と学びあいながらコミュニティを作っていくことが重要。本人のことを『翻訳』し、諦めずに伝えていくこと、挑戦していくこと、これが既存の枠組みを超えるために必要な戦略の第一歩である。対象をステレオタイプ化せず、地域の資源を活用し、また本人もコミュニティに貢献していく。

『学ぶ力』と『使う力』。この二つの力が壁を乗り越え、越境しあう実践のキーワードとなろう。(文責：コーディネーター 伊藤純)



全体会Ⅱ



大会総括

司会／それでは全体会Ⅱを開始したいと思います。

ご参加いただきました皆様、発表者や進行役・助言者の皆様、ボランティアの皆様お疲れ様でした。全体会Ⅱにつきましても引き続き、せたがや福社区民学会の報告集などに写真等の掲載をいたしますことをご了承願います。ご都合の悪い方がいらっしゃいましたらお申し出ください。

本日は口頭発表、ポスター発表がありました。また、区内障害者施設の手作り品の販売や学生交流会せたがやLink!による休憩コーナーも設置されました。大会の締めくくりとして、これらの活動の中での会場の様子について、皆様からのご感想をお聞きしたいと思います。

まず、口頭発表の方、発表されてのご感想等を伺いたいと思います。特に指定はいたしませんので、挙手でお願いいたします。こんなことがあったよとか、発表を聞いて驚いた等いかがでしょうか。黄色の名札の方が発表された方だと思います。マイクをお持ちしますので、大変恐縮ですがお名前とご所属を先にお願ひします。

【特別養護老人ホーム久我山園 笠原様】



特別養護老人ホーム久我山園の笠原と申します。本日は、ボランティアに関しての発表をしました。突然なので何も考えていませんでしたが、私達の発表は、うちの施設でボランティアをして下さっている方の発表をしました。また別の発表を聞いてジーンとくる内容のものがあり、聞いて良かったと思いました。

司会／ボランティアサークルの活動発表で、昭和女子大学中等部の先生で、私の大先輩にあたる方から、現場の中で感じたことやボランティアをしているうえでの気づきをご発表いただきました。ありがとうございました。

【世田谷区介護サービスネットワーク 徳永様】

第7分科会で発表いたしました世田谷区介護サービスネットワークの徳永と申します。私どもは、介護事業所のネットワークが地域でどのような力を発揮できるかを発表しました。この発表をするために考えた中で、介護サービスネットワークだけではなく、もっとさらに地域の



中で共生社会をつくっていければよいと思いました。自分も発表をとおして振り返ることができました。早速協力しようよという話を今日その場でいただき、関わりが持てたので、とても有意義な時間でした。

司会／ありがとうございました。

全国規模の学会だと、せっかく知り合っても遠いところでのふれあいの形になってしまいますが、世田谷という規模の中で協力し合えると、色々なことができる可能性が増えるなど、興味深く感じることができました。ありがとうございました。あと、もう一方ご感想をお願いします。

【特別養護老人ホーム博水の郷 番本様】

特別養護老人ホーム博水の郷の番本でございます。今回初めて事例研究発表をさせていただきました。私が発表した事例は、入所したご利用者が帰りたい気持ちがあって、どう対応したらよいかの事例研究を発表しました。実際にご利用者と向かい合っている時はこの研究発表の話は無かったのですが、自分がどういう対応をしていくか、対応して深めていくうちに自分がやってきたことの再確認をすることができました。大変自分にとって身になる事例研究になりました。実際に発表させていただき、また他の研究発表も聞かせていただいたのですが、自分が施設にいるだけではわからないことや、児童・障害など他分野の方々の取り組みを聞くことができ、自分の発想の枠が広がったと感じています。本当に参加させていただきありがとうございます。



司会／私もひとつの分科会を担当しましたが、体験の振り返りをまとめるという事は、こういった発表をする機会が無いと出来ないと思います。発表することを通じて自分の体験をかなり明確に整理されて発表されていたので、私にとっても参考になりました。ありがとうございました。

次にポスター発表の方のご感想を伺います。ご感想いただけませんかでしょうか。

【世田谷ケアマネジャー連絡会 石井様】

世田谷ケアマネジャー連絡会で発表しました石井と申します。今回は、世田谷区の皆様や専門職の方向けに、分かり易い世田谷区内にある高齢者向けの施設の種類分けをしてガイドブックにしたものを配りました。連絡会には様々な施設に勤めているケアマネジャーがいて、所属している職場の施設については詳しいのですが、職場以外の施設については理解が浅いので、それぞれの知識を持ち寄ってまとめ、冊子としてお配りしたという事です。思ったよりも有意義なものが出来たと感じています。ポスター発表を聞きに来てくださった方々には、冊子をお配りしたので



すが、まだ冊子が残っておりますので、関心のある方は是非お持ちいただければと思います。ありがとうございました。

司会／冊子がまだあるという事なので、是非関心のある方はお持ち帰りください。

では、すいません、手前の緑の方お願いします。

【かたよせ会 高山様】

ポスター発表の第一分科会で発表しました、かたよせ会の高山と申します。在宅介護の家族会を21年やっています。昨年の大会で、一斉に発表をすることについて、苦情と言いますかご意見を申し上げたのですが、一斉に発表をはじめてしまうと、あちらこちらの声が入ってしまうので、聞いていただく方が聞こえなくなったり、理解しにくくなったりしてしまうので、その形式を何とか変えて欲しいと意見を申し上げました。今年から早速、自由にポスター発表をご覧いただける時間と、コアタイムというそれぞれの方に助言者がついていただいて、それを聞いていただき、助言者の方が質問や講評をしていただくという形にさせていただき、私たちも言いたい事を伝える事ができ良かったです。そういう点では今回改善をしていただき、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



司会／貴重なご意見をいただき、ポスター発表の方法を変えることができたという事で、まずはご意見をいただいたことをありがたく思います。ポスター発表は時間帯が長いため、どこに誰がいるかという事が分からない事が多いのですが、今回はコアタイムを取り入れていただいたのですけれども、安心いたしました。向上させていきたいと思えます。

次に、助言者の皆様からお話をいただきたいのですが、口頭発表では20名の助言者の方にご担当いただきましたが、その方からご感想をお願いします。

私から指名してもよろしいでしょうか。第3分科会の山崎先生、佐藤先生からご意見をいただけますでしょうか。

【助言者 佐藤先生】

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科の佐藤です。今回第3分科会を担当いたしました。実際は、山崎先生が講評をしてくださったのですが、ご都合で全体会Ⅱを欠席

されましたので、私の方から簡単に感想を述べさせていただきます。

第3分科会は7発表ありまして、障がい児・者の支援に携わる方々から発表がありました。研究手法は様々だったのですが、すべて支援者の思い込みとかネガティブな見方を何とか正せないかという取り組みをした点が共通していました。例えば、いかに利用者に寄り添えるかを日々現場職員の方々が試行錯誤して、様々な方法を用いている。その中で寄り添うこちら側の思い込みに気づかされたという成果を様々な角度からご発表をいただきました。質問者の方からも、うちも同じようなことで悩んでおり、個別支援計画書の見直しであるとか、5ピクチャーズなど様々な手法が発表されましたので、日々の支援者の思いが良く分かり、助言者として頭が下がる思いで大変勉強になりました。発表者の方、ありがとうございました。



司会／第4分科会の佐藤光正先生・根本先生いらっしゃいますか。お願いします。

【助言者 佐藤先生】

第4分科会を担当いたしました駒澤大学の佐藤です。第4分科会も7事例ありました。障がい児・者という枠組みは第3分科会と同じですが、主に実践報告という事でストレングス、その人らしさというところに着目して普段の何気ない日常の支援をとおして丁寧に関わったり、一緒に癒しながら次の成長を促すような関わりをされていました。日々の実践の中で職員も楽しみ、利用者が良くなっていくことで支援者も元気になっていくというような素敵な報告がありました。以上です。



司会／ありがとうございます。それでは、第7分科会の長谷川先生からお願いします。

【助言者 長谷川先生】

長谷川です。第7分科会は、日本大学の学生さんがサロンをやっていて、その前の発表では下馬団地で町会の方々とかがサロンをやっていて、あんすこや家族が関わっている。その対比がとても興味深いし、この二つの発表にもう一つ加わればシンポジウムが出来るぐらいの内容でした。非常に内容が高まってきていて、聴衆の方も増えてきて、拍手が違いますね。力強い拍手になってきていますので、来年あ



たりはシンポジウムが出来るのではないかとこの様な雰囲気でした。以上です。

司会／ありがとうございます。ポスター発表の方のご意見をいただきたいのですが、コアタイムのことで発表者の方からご発言いただきましたが、第2会場の園田先生よろしくお願いします。

【助言者 園田先生】

園田でございます。第2会場を担当させていただきました。先程ご意見がございましたけれども、コアタイムを取り入れたことで、各々の発表の声がかき消えることは一切なく、各々が自由な形で広く発表できたと思っております。ポスター会場ですが、運営はスムーズにいったのではないかなと思います。内容ですが、口頭発表と一緒に、非常に内容が充実していること、また特筆すべき点は内容が充実していることだけではなくて、非常に先駆的な取り組みをしているという印象を強く持ちました。こういう取り組みは全国的にも珍しいのではないかと、全国で行ったとしても遜色がない、全国の皆様も参考になるのではないかとこのような発表が数多くあり、私も感銘を受けました。世田谷の福祉のレベルの高さを実感させていただけた一日でした。発表者の皆様ありがとうございました。



司会／ありがとうございます。いずれの会場におかれましても、発表の向こうに人が見える、利用者の方もそうですし、区民の方が見える発表をしていただき、こういったことを情報共有したり、あるいは、ネットワークを組んだり、あるいは、私は教育現場におりますけれども、学生に伝えていきたいなと思うようなエッセンスがたくさん詰まった大会ではなかったかなと思います。これからもこの大会の成果を今後のそれぞれの活動の中に活かしていけたらいいなと思います。

次回開催校挨拶

日本体育大学体育学部健康学科教授
横山 順一

皆様お疲れさまです。次回開催校になります日本体育大学を代表いたしまして、私、横山からご挨拶をさせていただきたいと思います。本日、昭和女子大学での大会は、企画、運営、発表の内容とも非常にレベルが高く、充実した大会になったと思います。ここでの内容を参考にさせていただき、次回本校で開催したいと思っております。具体的にはまだ、この日というところが決定しておりませんが、来年の11月の中旬ごろを予定させていただきたいと思っております。実は第5回の大会を日本体育大学で予定していたのですが、年明けに予定しておりまして、大雪で流れてしまったということがありました。出来ればそういうことがないようにするため、今年よりは遅い時期になりますが、11月中旬ごろを予定させていただきたいと考えております。

第10回大会という事で、節目とも感じますので、十分検討を加えて皆様が満足していただける大会にしていきたいと思っておりますので、是非、皆様お誘いあわせのうえ、今日いらっしゃっていない方にもお声掛けいただき、足を運んでいただきたいなと思っております。ぜひよろしくお願ひします。



第9回大会実行委員長挨拶

せたがや福社區民学会第9回大会実行委員長
北本 佳子

皆様、実行委員長を担当させていただきました昭和女子大学の北本と申します。

本日は本当にありがとうございました。昭和女子大学で開催されました「せたがや福社區民学会第9回大会」ですが、およそ関係者を含め500名の方がご参加くださいました。また本日は昭和女子大学の他に、はじめにもお話がありましたが、駒澤大学、日本大学、日本体育大学、東京都市大学、東京医療保健大学の学生さん達総勢およそ100名のボランティアがあったほか、多数の区民の皆さん、それから福祉サービス事業者の皆さんのご協力を頂き、この大会を無事に開催することができました。心から感謝申し上げます。

一言感想を申し上げたいと思いますが、手前味噌になりますが皆様もおっしゃっていただきましたように、この学会がますますいい学会になってきていることを実感しました。その背景に、私たちがこの学会を運営するにあたり、前回、開催校からのご挨拶で10月1日日曜日に初めて行うという事の他に、出来るだけ新しい物を取り入れたいという事を申し上げました。新しい物を取り入れたいという中に、私どもの学会の実行委員会で教員が協議した中で、やはり学会と付いているので、出来るだけ学会らしさをつくっていく、世田谷のアウトホームな良さは残しつつ、学会らしさをアップしたいという事で、今回色々な変化が入っています。

一つには、分科会のテーマを日本社会福祉学会と同じように、学会の分科会の名前に近づけたこと、二つ目には、報告集の要旨を見て分かって頂けたかと思いますが、なるべく統一化を図るとともに、その要旨集の統一化も学会の発表要旨の様式を踏襲する形に直す、ですから、いろいろなキーワードを入れたり、発表の内容に規制ではないが、こういう内容を発表して下さいというかたちでお願いをしたりしたかと思えます。それによって事務局や皆さん方にはご負担がかかったかもしれませんが、研究らしさが加わったのではないかと思います。またポスター発表と口頭発表というネーミングも、今回の学会に近づけるという事で変えさせていただきました。それと企画分科会等につきましても、学会で行われているものを試みとして開かせていただきました。これにつきましては、次回の開催校でもそういった発表を続けるかどうかという事でご検討いただければと思いました。

あとはポスター発表のコアタイムにつきましては、私ども学会というよりも皆様のご意見をもとにそれを取り入れさせていただき、学会らしさと世田谷らしさがうまくミックスできて良かったのではないかと思います。全体にどの分科会も拝見しますと、非常に現場の実践をベースにした熱い発表が行われておりまして、研究の学会ではあまり聞くことができないとても良い発表が沢山行われたと思えました。また聞いている方の雰囲気も非常に共感的、同じような悩みを持っていたり、同じようなことを感じたりしている方々がいらっしゃるという事が感じられ、やはりこの学会の良さが伝わってきたと思えました。今回このような学会を開催させて

いただいたことで、来年度に向けてせたがや福社区民学会で発表したいという思いをますます募られて、一人でも多くの方が発表するとともに、見学参加という方もますます増えていただければと思います。

最後になりましたがこの学会の運営にあたり、事務局その他いろいろな学校の皆様、そして区民の皆様の支えがありましたことを改めて感謝申し上げ、閉会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



休憩・交流スペース「ほっとスペース」・区内障害者施設手作り品販売



特別寄稿

せたがや福社區民学会の過去と未来

せたがや福社區民学会前会長 永山 誠

*せたがや福社區民学会の特徴

福祉関係の専門職、大学、学生、住民、行政が同じテーブルに着き、区民福祉の向上を目的に実践や研究を発表し相互に学び、理解を深めるため「せたがや福社區民学会」が2008年創設されました。保坂区長からは政策提言も期待されています。設立準備大会（昭和女子大学）から数え2017年で10年、一時代を経ました。地域単位の福祉学会の試みは日本では唯一、国際的にも前例がまだみつかりません。希少価値のある社会実験です。この学会は一言でいえば「区民合意の福祉を地域の文化にする取り組み」です。行政の目標は地域包括ケアシステムですが、おおきくいえばこの土台づくりの先取りでした。

*区民学会の創立前夜

せたがや福社區民学会創設の発端は、2007年に大学と地域の交流を進め福祉教育の質を高めるため昭和女子大学社会福祉学内学会を創設すると河島修さんにお話をしたら、世田谷区福祉人材育成・研修センター長の河島さんは、研修センターも同趣旨の企画が必要だといわれました。ならば「世田谷区内に福祉学会を立ち上げようか」と意気投合し、その場で河島さんが事業団（世田谷区社会福祉事業団）・区側の説得、私が設立大会準備と役割分担をしました。半年の設立準備会を経て、せたがや福社區民学会が立ち上がります。これは秋山由美子さんをはじめ世田谷区役所関係所管の皆様（当時）や関係者の皆様のご理解と2017年5月に他界された河島さんの努力が大きかった。そして大会ごとにつくられる実行委員会の精力的な共同作業と事務局担当の福祉人材育成・研修センター職員の献身的なご努力が継承され10年も続けることができました。関係各位にこころからお礼を申し上げたいと思います。

地域を基礎とする福祉学会創立構想を私はだいぶ以前から持っていました。私が以前勤務しておりました県立大学を基盤とする構想は機が熟せず立ち消えとなり、都内の別の区ではプレッシャー団体と学会との区別があいまいで目的の明確な合意がつかれませんでした。世田谷区は3回目です。関係者・住民と自治体の信頼関係がせたがや福社區民学会成立のカギだったのです。

*「包括的福祉」の視点は「世田谷の文化力」

各大学を中心に組織される実行委員会の英知に満ちた采配は見事なもので、大会ごとに相互理解を深め異業種的交流によって「なじみの関係」が広がり、世田谷における「包括的福祉の視点」の重要さが浮き彫りになってきました。区民福祉を実践中心に高めようとする区民学会の成果は、世田谷区の文化力の一角をやがて占めるようになると思います。

10年間お世話になり、ありがとうございました。

資 料 編

- せたがや福社区民学会 役員名簿
- 第9回大会実行委員名簿
- 第9回大会実績
- 団体会員名簿
- 設立趣旨

せたがや福社區民学会役員

【順不同】

役職	氏名	所属／職名
理事	あげのその よしこ 上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	もりもと しゅうぞう 森本 修三	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
理事	きたもと けいこ 北本 佳子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
理事	さとう こうせい 佐藤 光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	すお とおる 諏訪 徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	そのだ いわお 園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科講師
理事	よこやま じゅんいち 横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	おおくま ゆきこ 大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	はせがわ みき 長谷川 幹	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
理事	かとう よしえ 加藤 美枝	世田谷区老人問題研究会理事
理事	むらた さちこ 村田 幸子	福祉ジャーナリスト
理事	やまざき じゅんこ 山崎 順子	東京都発達障害者支援センター長
理事	うえだ ゆうじ 植田 祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
理事	つじもと きくお 辻本 きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク
理事	なかはら ひとみ 中原 ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
理事	うりゅう りつこ 瓜生 律子	世田谷区高齢福祉部長
理事	かなざわ ひろみち 金澤 弘道	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	こが まなぶ 古閑 学	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	あたけ めぐみ 阿竹 恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	かなざわ しんじ 金澤 眞二	世田谷区会計管理者
監事	まきの まゆみ 牧野 まゆみ	日本放送協会学園高等学校教諭

第5期 (H29. 4. 1～H31. 3. 31)

せたがや福社区民学会 第9回大会実行委員名簿

	氏名	所属/職名
◆◎	委員長 北本 佳子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
◆	副委員長 吉田 光爾	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
◆	高橋 学	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
◆	原 史子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授
◆	進藤 美津子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科特命教授
◆	中土 純子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教
◆	野坂 洋子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教
◆	伊藤 純	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
◆	渡辺 剛	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
◆	李 恩心	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師
◆	佐藤 千晶	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師
◆	根本 治代	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師
◎	上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎	諏訪 徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎	佐藤 光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◎	横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
◎	森本 修三	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
◎	園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科講師
◎	長谷川 幹	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
◎	加藤 美枝	世田谷区老人問題研究会理事
◎	村田 幸子	福祉ジャーナリスト
◎	山崎 順子	東京都発達障害者支援センター長
◎	植田 祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
◎	辻本 きく夫	世田谷区介護サービスネットワーク
◎	中原 ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
◎	阿竹 恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
	仁藤 久喜	砧地域ご近所フォーラム2018実行委員会
	大野 和啓	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係
	八木 早知子	世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課障害者就労支援担当
	石塚 典子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団経営企画課長

◆印は、開催校の委員 ◎印は、学会運営委員

事務局

	菊池 泰子	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
	千葉 律	世田谷区福祉人材育成・研修センター次長
	富樫 恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター
	木村 優	世田谷区福祉人材育成・研修センター
	念佛 久子	世田谷区福祉人材育成・研修センター

第9回大会実績

参加者数550人

内訳) 来場者 373人

当日スタッフ、ボランティア、理事等役員 177人(うち学生ボランティア108人)

分科会参加者(各発表終了時の人数:単位 人)

発表番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ポスター第1会場	20(コアタイム時 延べ人数)							
ポスター第2会場	34(コアタイム時 延べ人数)							
第1分科会	43	45	33	48	49	16	34	
第2分科会	25	27	24	20	20	25	15	
第3分科会	18	22	14	16	14	33	14	
第4分科会	20	8	11	24	25	10	24	
第5分科会	7	31	25	18	30	20	20	
第6分科会	12	15	18	30	26	28	40	
第7分科会	30	24	33	40	33	36	26	
企画分科会1	15							
企画分科会2	25							

その他

*パソコン文字通訳(全体会)及び手話通訳(全体会、分科会)をお願いしました。

*会員大学(昭和女子大学、駒澤大学、日本大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学)の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影・休憩コーナー運営等の大会運営にご協力いただきました。

*区内6ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

団体会員名簿

(平成29年12月末現在)

	団体名
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部児童学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	ハブネットせたがや
8	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
9	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区駒沢生活実習所
10	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所
11	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区九品仏生活実習所
12	社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部
13	社会福祉法人世田谷ボランティア協会市民活動推進部
14	社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房
15	社会福祉法人せたがや檜の木会 下馬福祉工房
16	社会福祉法人せたがや檜の木会 喜多見夢工房
17	社会福祉法人せたがや檜の木会 大原福祉作業所
18	社会福祉法人せたがや檜の木会 世田谷区立千歳台福祉園
19	社会福祉法人せたがや檜の木会 わくわく祖師谷
20	社会福祉法人康和会 久我山園
21	社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所
22	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷
23	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ
24	有限会社ヘルパーサービス和知
25	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム
26	社会福祉法人友愛十字会 友愛デイサービスセンター
27	医療法人社団慈泉会 介護老人保健施設 うなね杏霞苑
28	社会福祉法人嬉泉 世田谷区発達障害相談・療育センター
29	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園
30	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 すこやか園
31	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園
32	社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園
33	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園
34	砧地域ご近所フォーラム2018実行委員会
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
36	世田谷区
37	社会福祉法人福音寮
38	医療法人はなまる会 グループホームももちゃん
39	世田谷福祉専門学校
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム(特養)

	団体名
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム(短期入所)
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム(特養)
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム(短期入所)
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム太子堂
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷一丁目介護保険サービス
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢介護保険サービス
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花介護保険サービス
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂介護保険サービス
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上町地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢地域包括支援センター
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションけやき
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション北沢
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション芦花
64	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう
65	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋
66	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 パルメゾン上北沢
67	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 総務課
68	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷区福祉人材育成・研修センター
69	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
70	社会福祉法人正吉福祉会 世田谷区立きたざわ苑
71	世田谷区老人問題研究会
72	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所
73	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家
74	社会福祉法人奉優会 通所介護 等々力の家デイホーム
73	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家
74	社会福祉法人奉優会 通所介護 等々力の家デイホーム
75	社会福祉法人奉優会 等々力の家 訪問介護ステーション
76	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム喜多見
77	社会福祉法人奉優会 優つくり小規模多機能介護喜多見
78	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム鎌田
79	社会福祉法人奉優会 優つくりグループホーム池尻
80	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム

	団体名
81	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬
82	社会福祉法人古木会 成城アルテンハイム
83	世田谷区介護サービスネットワーク
84	セントケアリフォーム等々カ
85	在宅介護家族の会「フェロー会」
86	株式会社やさしい手 おまかせ事業部 地域交流レストラン事業部
87	一般社団法人子ども・若者応援団
88	特定非営利活動法人若者の自立支援すみれブーケ
89	社会福祉法人敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑
90	NPO法人せたがや子育てネット
91	有限会社ケアステーションたね
92	NPO法人Ubdobe
93	株式会社すずらん
94	樹のはな居宅介護支援事業所
95	在宅介護家族会 かたよせ会
96	世田谷セレ部
97	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻
98	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿
99	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿
100	公益財団法人 全国有料老人ホーム協会
101	特定非営利活動法人ソラマ
102	一般社団法人はびなす こどもデイういず
103	(株)ベネッセスタイルケア くらら用賀
104	トラストガーデン桜新町
105	認定特定非営利活動法人 語らいの家
106	老人給食協力会ふきのとう
107	社会福祉法人青藍会 ホームハートハウス成城

せたがや福社区民学会設立趣旨

福祉活動は、何よりも実践を基本とします。と同時に、その実践の質を高め、内容が広く地域の人々に共有されることが望まれます。世田谷の福祉活動は、地域の中で行われている実際の日常的実践について互いに発表し合い、認識し合うことによって、さらに高まっていくことでしょう。また、自分たちの実践が、地域全体から眺めれば、どのように位置づけられるのか、実践している人々が再発見することも大切です。

せたがや福社区民学会は、世田谷区の福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に対等平等な立場で、福祉実践活動の工夫や抱える課題についての研究の成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成21年12月に設立されました。



発行 せたがや福社区民学会
発行日 平成30年3月

〈事務局〉
世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒157-0066
世田谷区成城6-3-10 成城6丁目事務所棟1階
TEL 5429-3100 FAX 5429-3101
E-mail fukushijinzei@setagayaj.or.jp
URL <https://www.setagaya-jinzai.jp>